
萌え絵師への道

昔昔亭或処

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

萌え絵師への道

【著者名】

昔昔亭或処

【あらすじ】

売れない少女漫画家のあたしが、なぜか萌え絵師を目指すことになりました。それもこれも、本業は格調高い純文学の大作家先生が気まぐれにライトノベルをお書きあそばされやがったおかげです。スマセン今からでもこのオシゴトお断りするわけにはいきませんか。

……どうしてこうなった。

通帳を眺めて、悶然とした。

やばー。

今きっとあたし人生の岐路に立たされている気がする。

アタシはイワコル駆け出しの少女漫画家で、ぶっちゃけて言えば売れない漫画家で、正直に言えば年に一本雑誌に読みきりを（しかも予定していた作家さんの穴埋め代原とかで）載せてもらつのが闇の山の、プロを名乗るのもオカガマシイ自称漫画家だ。

絵は、そこそこ上手いと思つ。つか客観的にも評価は高い。

が、問題はストーリーである。自分でも分かっているけれど、面白くない。どうしたら心に響く面白いモノができるのか、試行錯誤を続けている。

……続けていく。うん。自分が頑張る限り、夢は終わらない。は

ず。だけど。

やうやく、夢を追うのもどうだらうかといつ年齢だ。

同級生たちは結婚して家庭に落ち着いていたり、社会でバリバリ働いていたりする。

なのにアタシは、雑誌の細々したカットのお仕事とコンビニのバイトで食いつないでいる。

あたしの夢を応援してくれていた両親も、どうやら引き際を見極めようとしている気配だ。いつ引導渡されるか。

そんな切羽詰った状況。絵の仕事ならどんなものでも請け負つて当然だ。少女漫画に拘つたりしない。拘れるご身分じゃないのは重々自覚している。

でも。

やつぱり、あれだけ追い詰められていなければ、あたしはある仕事を受けなかつたんじやないかと、後々になつて考えた。

後悔先に立たず。一寸先は闇。あるいは、……人間万事塞翁が馬。

事の発端は、顔なじみの編集さんからの一本の電話だった。

漫画家人生の、もっと大きく書いてあたしの人生でのターニングポイントとなつたお仕事は、こつしてアタシの元に舞い込んできた。

「やー」「めんねー？」急に呼び出してダイジョウブだった？』

7つ年上のオネーサンは、最初に雑誌社の新人賞に応募したときからの付き合いだ。あたしが夕方から深夜のコンビニのバイト以外には決まった予定などないと当然知っている。

『オネーサン』と呼んでいるが、本名は『緒峯^{おね}』さんだ。

出版社近くのカフエは、外で打ち合わせるときの定番。カフエと看板を出しながらも、今テーブルに運ばれてきたのが緑茶のもの、定番。

「全然平氣です。で、お仕事の話、だそうですけれど？」

つい先日もネームを持ち込んでクソミソに駄目出しされたばかりだ。まだ新しいネームはできていない。

「うん。時間も無いことだし、チャキチャキ進めましょうか」

アタシは時間有り余ってるんだけどね。でもやり手の編集サンとか急なお声がかりのお仕事とかの方には時間が無い。

「はい。で、どんなカットですか。サイズと枚数は？」

差し詰め雑誌の小カットだらうと聞くと、オネーサンは首を振った。

「違つのよ。説明するとちよつと面倒なんだけど、盥回して回って
きた話でね。嫌なら断つてくれてもいいんだけど」

と、前置きされて、どんな無理難題が、と身構えた話は、挿絵の
お仕事だった。

なんだそんなことなら、と軽く頷いたが最後、ガッシと腕をつか
まれて、そのまま出版社に引きずられた。

「アナタなら引き受けてくれると思ったのよ大丈夫よアナタならき
つと簡単だわ詳しい話は担当がするから」

と言いつつ、ここの逃がすまいとする態度。ここに至つて鈍いあた
しの脳味噌が危険を察知したけれど、オネーサンが今更逃がしてく
れるはずも無かつた。

漫画雑誌の編集部には時々お邪魔していたけれど、連れて行かれたのは初めて踏み入れるフロア。

「藤埜さん、連れてきたわよー」

周囲を見回す余裕も無く、衝立に仕切られたブースに座らされた。

「あ、あの、オネーサン、ちょ、あたしトイレ」

腕を放してくれないオネーサンに訴えてみたけれど、『藤埜さん』と呼ばれた誰かがブースに来るほつが早かつた。

「乞う受けてくれたんですね…！　ありがとうございます…！」

田の下にクマ飼つてる、いかにも胃に穴が開いていそうな華奢な男の人が、縋りつかんばかりの勢いで突っ込んできた。

おう。ゾンビかと思つたよ。お陰でトイレに逃げ損ねた。

「……オシゴトの詳細をオネガイシマス……」

救世主を挙ぐ姿勢のゾンビを無碍にもできない。

実際、今のあたしは仕事を選べる『』身分ではない。絵のお仕事なら何だってやりましょつ。

これまでに編集さんを追い詰める『小説の挿絵のお仕事』と

やらがどんなのもか、あたしには想像もつかないですが。

オネーサンとバトンタッチした藤埜さんが、息も絶え絶えに説明するところ。

なんでも普段は高尚な純文学をお書きあそばされる大作家先生が、何を思ったかイキナリ少年少女向けの小説を、所謂ライトノベルを書きたいと仰つたそうな。

曰く、最近の若者は高尚な文学を毛嫌いし情弱なモノばかりを好み、これはけしからん、これは幼少の頃より良き物語に触れていためではないのか、ならばこの私が一肌脱ごうではないか、ライトノベルを装いつつも深遠なる純文学の片鱗をキラリとちりばめた良質の若者向け大衆小説を書いて進ぜよう、とな。

この発言は藤埜さんフィルターのような気がするけど、とにかく、ラノベ風の良質な小説を書きたいそうだ。

そこはソレ、出版社としては、売れない純文学より売れるラノベ、大作家先生の実力は本物なのだからライトノベル風でも充分と踏んだ。

そして企画は、ペンネームを変えて期待の新人作家を装う、ところまではトントン拍子に進んだのだが、ライトノベルの重大要素、イラストレーターの段で躓いた。

大作家先生は、芸術に造詣が深く目が肥えていて、しかも我慢だ

つた。

キャッチャーな萌え絵はコドコトク却下、有名な萌え絵師を軒並み
クビにしたそうだ。

ジャケ買いなんてあるよつて、ラノベは表紙が重要だ。表紙と帯
が良ければ中身はどうあれそこそこ売れる。

逆に言えば、中身が良くても手にとつても売えなければ、そもそも
も読んでもらえない。

大作家先生は、ペンネームを変えて新人作家を装つ以上、今まで
のネームバリューは役に立たない。つまりは全くの無名。

先ずは有名な萌え絵師で読者を釣るのも一つの手だ。

なのに、大作家先生は、そのための萌え絵師を、出版社側が必死
に掻き集めた売れっ子萌え絵師を、ぜーんぶ気に入らないと切つて
捨てた。

普段大作家先生が出すハードカバーは、有名な書家が題字を書い
たり、著名的な日本画家が表紙絵を描いたり、そりやもーご立派な装
丁がなされているんだってわ。あたしは純文学なんて読まないから
知らないけど。

つまりは大作家先生を満足させるキャッチャーなイラストレーター
が見つからない。どこをどう探しても。

万策尽きようかというときに、偶々、編集さんたちの横のつなが
りで、あたしの描いたカット数枚が藤埜さんの手に渡ったそうだ。

卒業シーズン特集ページ用のカットで、桜吹雪にセーラー服の少女の後姿、という、はつきり言って誰が書いても大差ないであろう絵だ。

だが、そのカットが、大作家先生のお眼鏡に適つたらしい。マジか。それが本当なら大作家先生の芸術的センスは疑わしいモノだ。

そんなこんなで藁にも縋る思いで、今回あたしにお話が来た、と。

……微妙に、この藤埜サンも失礼なこと言つてるよ。

「お話は分かりました。でも、そんなカット一枚で評価されて、いざイラスト見たらやつぱり気に入らないってことになりませんか?」

「いやあ、もう、これで駄目なら、先生にも諦めてもいいってトコまで来てますんで。その辺は気兼ねなく描いて下さい。ちゃんと絵が描ける人だけは緒峯さんから聞いてますから」

藤埜サン、……多分、仕事のしそぎで、人としてイロイロ失つてるとと思う。『遺いとか言い回しあと』

「……でも、キャッチャーな萌え絵師でジャケ買い狙うんなら、そもそも人選ミスじゃないですか」

「もう人選なんて余地がないんですね」

藤埜サン正直すぎる。あたしのプライドなんてささやかな物だけどね。でもちょっと突き刺さるんだよな、トゲが。

「……もうどうでもいいから取り合えず一冊出して大作家先生の気が済めばいい、と」

「はい」

ハイって言った！　『はい』って言ったよこの人！――

「…………」のお話、もし私がお断りしたらどうなりますか？

「どうにもならなくなります」

口から抜け出る魂が見える氣がする藤埜サンは、まさに生ける屍そのものだった。

「……お受けします」

思えば、自分の差し迫った事情よりも、同情とか恐怖とかが先だつたのかもしれない。

校正前の第一稿が手元にあるところと、その場で直ぐに挿絵の話になつた。

時間がないから、大雑把なキャラクター・デザインはその場でやる。でないと、表紙とカラー・口絵の印刷が間に合わない。どんだけデッドなんだ。

正直、原稿読む時間も惜しいので、口頭でキャラの説明をしてもらつた。

「じゃあ、主人公の女の子はこんな感じで？ もうちょっと大人しい感じ？ 逆にツリ目気味にしてクールな感じとか？ 一重か二重かでも印象変わりますけど。あと前髪が、……この程度か、ココまでか、……」いつ、サイドにしても、キャラの性格違っちゃいますよね？ カラーなら、やつぱアニメ塗りが基本？ 彩色でもイメージ変わりますよ。色の指定は？」

その場でやつと何種類もの顔を描いていく。藤塙サンはちょっとの差でガラリと印象が変わる絵に目を見張つていた。

「はあ…、す」「もんですね。こんなサラサラと描けるもんなんですね…」

「感心はいいから、キャラの特徴教えてください。表紙絵の入稿いつなんですか」

底辺漫画家舐めるな。デッド入稿の代原の直しどと、分単位、秒

単位なんだ。これぐらいで感心するな。

「あ、はい。ううへん、もうちょっとキツメな感じ、かな……？
でも見た目は優等生って文章に書いてあるし……、大人しいのかな……？」

……ええと。アナタが担当なんじゃなんですか？ なんで担当
が主人公キャラ分かつてないの？

「これ、写真とつて、大作家先生にメールしてください。今すぐ。
ソレぐらい、いいですよね？」

書いた本人に聞くのが手っ取り早い。いくら大物作家だろうと自
分の作品のためならソレぐらいやつてもいいだろ？

はい、と藤埜サンが慌てて携帯電話取り出すのを横に、大雑把に
表紙絵の構図を数パターン作つた。タイトルや帯の位置を考えると、
文庫本の表紙なんてさほどバリエーションがない。レベルによつ
ては表紙に一定の決まりがあつたりするから更に狭まる。

「装丁」のデザイナーさんいないんですか。タイトルの色やフォント、
どうなつてます？」

と、藤埜サンの携帯がチャラララ、と鳴つた。

「あ、先生」

おう。噂の大作家先生か。

電話なのに起立してペコペコ頭を下げる藤埜サンを妙に親近感持

つて眺めつつ、あたしは表紙絵のラフを2、3枚描いた。

「あのー」

「あ、電話終わりました？ どんな感じが良いって？」

藤埜サンは、左手で畠の辺りを押さえつつ、ボソボソと言つた。

「今から来るやつです」

「…………だれが、ビニ」と

聞かなくとも分かるけど、でも確認したい。

「先生が、ここの。20分後くらいに着くやつです」

フットワーク軽いな大作家先生。偶々近くにいたのか。

20分後に速攻クビつことは、……無いといいな。

兎にも角にも時間が押しているということで、大作家先生を待つ20分も惜しい。

主人公とその他数名、藤埜サンの曖昧な説明で大雑把に描きだす。

制服がセーラーという話なので、主人公の制服も数パターン描いた。男子は詰襟だそうな。何となく、昭和の香りが漂う。大作家先生って失礼ながらお年を召しておいでなのだろうか。そんな大御所が今風ラノベなんて大丈夫なのか？

「あ、そういうえば、作家の先生って、どなたなんですか。私もお名前くらいは知っている方でしょつか」

「まだお伝えしていませんでしたか。失礼しました。呉羽隆生先生
です」

……知らない。しうがないじゃないか、あたしは普段純文学なんて……どころか文芸書全般読まないんだから。読むのは漫画おんり！。国語の教科書で読んだ名作があたしの読書暦の全てだ。

「知らないでしょ？ そういう顔をしていますよ」

不意に頭上から涼やかな声が降ってきた。冷ややか、とも言える。首を捻つて見上げると、場違いなイケメンがそこにいて、呆気に取られた。

「あ、先生。本日は足労頂き申し訳ございません」

がたん、と起立し直角にお辞儀した藤埜サン。

「いいえ。構いませんよ。もともと私がいろいろお願ひしたんですから」

柔らかく微笑んで、丁寧に応じるイケメン。

ありえねえ。できすぎている。少女漫画なら確實に腹黒キャラだ。
なんだこの無駄に爽やかな超美形。その絶妙な眉と田と鼻のバランス、今度是非モデルになつて欲しい。薄い唇は滑らかに皮肉を発するのに適していそうだ。今聞いた声も柔らかい美声で、キツツイ一言も美辞麗句の如く響くだろう。

カジュアルなセルフレームの眼鏡とすつきり短い髪型、いかにも爽やかですと描いてある薄青の綿シャツは襟と袖におしゃれな青ラインステッチ、袖から覗く銀色は恐らく某高級老舗時計ブランドで、仕立てのよさそうな黒いズボンはぴっちりプレスで余計なシワもなく、磨き上げられた革靴は光を反射する。

休日にちよつとそこまで散歩してました、なファッションながらも、どこにも隙が見当たらない。現実にこんな人いるのか。

「いらっしゃがイラストレーターの方です。あの桜吹雪のカットの」

イラストレーターじゃないです漫画家です、と言いたい。が、恐ろしいことに気付いてしまった。

え。まさかこの若いイケメンが大作家先生なのですか。

名前今聞いたばかりなのに忘れたよ、カオのインパクトで。

「そうですか。はじめまして。今回は急な話を受けていただいてありがとうございます」

にこやかに微笑んで堂々と右手を差し出され、自分が座つたまま
だつたことに遅ればせながら気付いた。

慌てて立ち上がり、頭を下げる。

「はじめまして」

日本人の挨拶はお辞儀だ。シェイクハンドなんてニアな距離感は
無理。特にこの男相手は絶対無理。初対面ならなおさら。

大作家先生は、無視された手をさりげなく戻し、にこやかな顔を
キープしたまま頷いた。

……この男、デキる。

大作家先生は、ヒジヨウにゲイジュツにゾウケイがフカくあらせられました。

「違います。スカート丈がなんでそんなに短いんですか。これはセーラー服なんですよ」

制服デザインの全身ラフを指差して一言。

「え、でもこれでも膝上5cm程度ですけど」

今どきの制服、一般的なスカート丈はもうチョイ上皿でも良いだらう。

「なぜ膝上なんです。太腿が見えてしまうでしょう。膝下10cmです」

どうしよう。イケメン大作家先生は、ひょっとして変態サンかもしれません。そういうえばあの桜吹雪のカット、セーラー服のスカート丈長めだったような。いやアレは風に揺れるプリーツスカートがあんまり短いわけにも行かなかつたからで、丈はこだわりポイントではなかつた。そこを評価されたんなら、今まで首になつた売れっ子萌え絵師皆さんになんと申し開きを。この大作家先生の萌えツボは世間一般から乖離しているようですが皆さんは悪くないですよ絶対。

考えていることがバレたはずもないが、大作家先生はチラ、とリフ絵から目を上げた。

「いいですか？」この物語は、抑圧された主人公の成長物語です。自己を確立しようと足搔く青春ストーリーです。主人公は、社会の中で孤独を感じています。それは誰しもが同じように感じていることではありますが、主人公は自分だけと思つてゐる。その内面を、このスカート丈が示しているのです」

…………ええーとお。

ちら、と藤埜サンに助けを求めた。が、うんうんと感心して頷いている。駄目だ。味方がいない。

「心を隠す鎧がごときスカート丈。周囲を直視できない象徴の眼鏡。これは重要なポイントですよ」

確定？ 確定だよねコレ？ ザ・ヘンタイ！！

「……ではソックスは白で三つ折、黒革ローファー、髪はみつあみお下げですか」

むしろそこまで行くとギャグじゃないかと思つ。

「あなた、読んでませんね？ 今からでも読んでください。30分もあれば充分です。それからきちんと話しましょう」

ぎくり。

校正前の第一稿とやらが田の前に差し出される。

「……あの。30分で、これを見めど？」

白慢じやないが、あたしは文字を読むのが苦手だ。文字があたしを嫌っている。

恐る恐る手に取つたそれは、紙の質量以上の重さを感じさせる。

「大した量じゃありません。直ぐです」

ヘンタイイケメンの威圧的な眼差しに促され、あたしは嫌々タイトルのみの一枚目を捲つた。

気を利かせた藤埜サンがコーヒーを持つてくれて、大作家先生が一度席を外して戻ってきて、更にオネーサンが様子見に顔を出して引っ込んで、そして藤埜サンがどこからか軽食用にサンドウイッチを買ってきてくれて大作家先生と藤埜サンがそれらを平らげて、時計の長針が一回転半して、最後の一枚を読み終えた。

気が付いたらティッシュの箱が目の前に置いてある。取り合えず鼻をかんだ。泣いてない。泣いてないからね断じて。

鼻すつきりして、一言。すげえ。

スマセソフした大作家先生。イケメンだとか変態だとか一度と言いません。

成長物語？ 青春ストーリー？ そんな言葉で片付くのかコレが？

ページ一面の文字を見ると眠くなるあたしが、なんと最後まで読めた。読みきつた。しかも全然苦痛でなくむしろ先へ先へと引っ張られた。

ラノベにありがちなファンタジー設定がこうも活かされるとほ
非日常でしか叫べなかつた主人公が現実で声を上げた瞬間は拍手喝
さいしたくなつたよ。

「はい。スカートは膝下10㌢、了解しました。是非とも色は紺
じやなく黒にしたいと思います。スカーフは緑でリボン結びじやな
くタイ結びです。髪の毛はストレートロングを後ろで一つに結わえ
て前髪はパツン、眼鏡は黒縁。ついでに作中にはないですが、前
歯に矯正器具つけていいですか」

よいしい、と、大作家先生は頷いた。

……相当キワなマニアを喜ばせそつだ。

そしていじつなつた。

結局表紙は、いくらなんでもと編集ストップで、大作家先生指定の主人公（ネガベー・）と最終的に一皮向けた主人公（ポジベー・）が背中合わせの構図で決定した。

絵柄も普段の少女漫画チックなものじゃなく多少デフォルメしたものにして、でもデッサンは大作家先生の強い要望により現実の頭身に近く、しかし生々しくない程度には現実離れさせた。

大作家先生の注文と、編集の意向と、ギリギリのすり合わせで出来上がったイラストは、萌え絵という曖昧なカテゴリーの隅っこにギリギリ引っかかるかも知れない程度の仕上がりだった。

ちゃんとした契約も後回しに、自分史上最速で、表紙とカラーロゴ、本文挿絵数点と宣伝用のカット数枚を描きあげると、流石の大作家先生もご納得のご様子で微笑んで居られた。無駄に避け面。徹夜明けにその笑顔は逝けつてことだろ。

うつかりワタクシが提案してしまった歯並び矯正器具のアイデアは大作家先生の意欲を刺激したらしく、第一稿の後、更に手直しが入ったとか。やばい方向に背中押してしまった気がしてならない。関係者の方々に土下座したい。

ともあれ、無事（？）発売日に店頭に本が並んだ。作家を除く関係者全員が死力を尽くした結果だ。出版業界つてツクツク恐ろしいところだ。

藤埜サンの体重が最終的にどれだけ削られたのか、知りたくない。

人間つて意外とシブトイ生き物だと実証された。

取り合えず、あたしは一度とあのイケメン大作家先生とは関わりたくない。

ド変態であることを差し引いてもお釣りがきそうな美形であることは認める。が、膝下スカートと眼鏡のこだわりはそこそこ市民権を得るかもしけないが、矯正器具萌えつてどんだけコアなんだ。他にどんなマニアックな趣味隠し持つてるのか妄想の余地ありまくりだ。

ああいつものは寄らず触らず関わらず遠くから眺めるに限る。

そうして、ろくに契約も確認せずにこのお仕事を終え、今まで「カット数点纏めていくら」が主だったあたしは、今日振り込まれた報酬にビビッているわけテス。

これはあぶく銭だよ、悪銭身につかずだよ、こんな非常識なオシゴト今後無いし。

あ、結局あの大作家先生のお名前なんだっけ。

偽装ペンネームたがおじやくまが高尾紅葉たかおひやだつてことは出来上がった本貰つたら知つてるけどね。

さて。

……夕飯、久々に、お肉とか、贅沢できるかな？ お肉、大特価

じゃなくても良いかな？ 一段高い棚の和牛買っちゃって良いかな？

清水の舞台から飛び降りるつもりで、国産牛（でも切り落とし）を買って帰ると、留守電がピロピロ光っていた。

メッセージを再生させる。

「こんにちは。藤埜です。先日はありがとうございました。例の本が好評で増刷が決まりました。次回もよろしくお願ひいたします。まずはご連絡まで」

つー、つー、つー、……。

あれ？

次回？

……びびりになつた。

いつも打ち合わせに使つてゐる出版社近くの定番カフエ。カフエと看板を出しているにも関わらず、人気メニューは緑茶。そしてあたしは困惑していた。

「お待たせしました。早速ですが、次作の話をしても？」

颯爽とやつてきて向かいの席に座る、このお兄さんはどなたでしょうか。

「……あの、打ち合わせの相手は、藤埜サンだつたはずでは……？」
そう。電話で日時を指定してきたのは、忘れないのに忘れられないとあるオシゴトでお世話になつた編集さんだ。

ゾンビかと見紛う不健康そうな華奢な青年だつたと記憶している。

だが実際現れたのは、いかにも「スポーツはテニスを嗜む程度ですが週一でジムに通つて健康管理しています」と言ひ出しそうなお兄さんだ。

パリッとスースが仕事のできる男オーラを醸している。

「はい。私は。お電話でもうつお話をしたかと思いますが

「口一合とお兄さんは頷いた。

脳内の、生ける屍の顔を探り出す。如何せん、ヘンタイイケメン大作家先生の衝撃が大きくて、影が薄い。

あのゾンビから、餌のいらないクマ二匹を引いて、顔色を修正して、落ち窪んだ眼窩を正常に直して、充血した目に目薬、こけた頬をふつくら、無精ひげをマイナス、髪を美容師にお任せで。

……。

「人間つて生き物の可能性を再認識しました」

アレから一ヶ月。ひょっとしてコレが常態なのか。アレが非常時か。

……編集さんつて、文字通り身を削ってるんだな。

「は？」

「いいえ。私は藤埜サンの味方です。（例え藤埜サンがあたしの味方じゃなくても）」

「なにがありましたか？」

心配そうな顔されちゃったよ。アナタの寿命のほうが心配だよ。

「いえ、これから何があるような……」

予感と並つか、悪寒と並つか。

「なるほど。では、仕事の話をさせていただいてもよろしくでしょ
うか？」

せりふり、そのオシゴトがね？

「やのことなんですが、一身上の都合によつてのオシゴトを続ける
わけには……」

「契約書にやんと書いてありますよな？」

「いやかに、しかし『逃げんじやねえ』と心の声付もで、藤埜サ
ンは呟つた。せり、やつぱりあたしの味方じやないよ。

「……で、お仕事のお話をオネガイします」

後悔先に立たずつてこいつこいつことですね。

なんであたしは大作家先生と直にお話してるんでしょうか。いやそれは藤埜サンがあたしをここに連れてきて置いて置いていつたんだけどさ。

「あの矯正器具のアイデアは非常に感心しました。周囲が望む言葉しか言えない主人公の実情が、一目で説得力を持ちました」

大作家先生は、こんなオサレな和風モダンレストランで、矯正器具を褒め称えている。どうしてあたしがソレを聞かなきゃいけないんだ。

「……そんなに矯正器具お好きなんですか。あまり公言しないほうがいいご趣味かと思いますが……」

小声で、ぼそつとな。

さつきから隣のテーブルの視線が気になるんだもん。

「誰が矯正器具を好きなんですか。私は矯正器具を思いついた貴女の感性を褒めているのです。言葉は精確に聞き取っていただきたい。あなたのイラストで、私は絵の説得力を再認識しました。文筆業をしていると、文章で読者の想像力を如何に掻き立てるかを重視してしまいます。子供の想像力の低下は、アニメやCGの進化の悪しき弊害だと考えていました」

あ。矯正器具萌えじゃないんだ。これは朗報だ。よかつたよかつた。濃ゆいご趣味の方と二人でご飯なんて、食が進まないじゃないか。もぐもぐ。

で、ふつーの会話で何でそんなに熟語が多いんでしょうか。めんどくさいしゃべり方ですね。『この白身魚のフライ美味しいですね』は、どう訳したらいいですか。

「ですが、違った。口元から僅かに除く矯正器具。これだけで主人公が言葉一つ正直に言えない環境を想起させる。全く脱帽です。あなたのおかげで、あの小説は完成度の高い物になりました。お礼申し上げます」

お礼を言つたために、人をこんなところに呼び出したのか。電話で充分なのに。ご飯オゴリはうれしいけど。

「ですから、次回作は最初の段階から」協力いただきたい、と考えております」

「うぐ。炊き込みご飯が気管に。あ、味噌汁慌てて肘でひっくり返し……。

「大丈夫ですか？」

おしほりを差し出す手も優雅な大作家先生は、慌てず騒がず、ウェイターを呼んだ。

最初から協力、って、どういう意味ですか。

ゲホゴホグション、あ、鼻からご飯粒が。

妙な押しの強さで、大作家先生はあたしをタクシーに押し込んだ。

うわー。女あじらいの上手さが透けて見えるような。

「ズボンも濡れているでしょう。そんな姿で電車に乗せるわけにはいきません」

はあ。紳士ですね。

でも、ヘルプのアシスタントでド修羅場明けなんか、もつと酷い格好もザラです。顔にトーンの切れ端くつつけたまま山手線一周しましたこともあります。

そのまま送つてくれるつもりかと思つていたら、街中で降ろされた。え。お店？

「彼女に似合つ物を」

高級感漂う店内を通り抜けて、奥の応接室っぽいところを通されて、VIP用かよこういうところにあるんだ庶民の知らない世界つて感じーなんで今カメラ持つてないんだネタだコレ、と、一度と来る機会はないであろう場所を田に焼き付けていると。

モーテルさんのようなプロポーションの店員さんが、ふわふわ華やかなヒラヒラを持ってきた。

「おぬし替えを。サイズが合わないようでしたらお申し付け下さい」

「へ？」

「おぬし替えを。サイズが合わないようでしたらお申し付け下さい」

一畳ほどの広さの試着室は、大きな壁一面の姿見とアンティークなカウチが置いてあった。渡されたのはふわふわシフォンのミニ丈ワンピース。コレをどうしようと。

愕然と立ち尽くしていると、またドア越しに声がかかった。

「いらっしゃいませ」。行き届かず申し訳御座にませんでした」

と、恐縮しながら店員さんが渡してくれたのは、可愛らしく下着とストッキングでした。

ああ。このワンピース、肩大きく開いてるしね。うん。今のスポーツブラじゃ見えちゃうしね。生足とかお披露目できるような年じゃないしね。

……でもどうして普通のパンティストッキングじゃなくてガータータイプなの。どうしてこのブラジャーサイズがぴったりなの。どうしてこのパンツ紐なの。このHロいチョイスは誰が！？

げんなりして、でも着替えないと外に出してくれない気がしたから、着替えた。

説いた様にぴったりサイズで、店員さんにオモウシシケるようなことは何もなかつた。脱いだ服を胸に抱えて恐る恐る試着室を出ると、履きなれたローファーはなく、これまた可愛らしい華奢なサンダルが置いてある。

……コレを履けと。

うろたえていると店員さんが速やかにやつて来て、足にカポッとサンダルを履かせ、足首にストラップをぱちんと止めると大きなお花「サー・ジュー」をくつつけた。申し訳なくて泣きそうだ。今まであしの人生で他人様に靴を履かせてもらったことが……幼稚園頃までならあつたかもしねない。

「そちら、お預かりいたします。クリーニングした後『血毛』にお届けするよう手配いたしますので」

胸に抱えた服を取り上げられた。え？　ちょっと待つてよ、その中には脱いだ靴下や脱いだパン……！！

「持つて帰ります、持ち帰りますから、あの、紙袋か何かに纏めてくれたら……！」

お願い、オネガイします！！

あたしの必死さが伝わったのか、店員さんは頷いてくれた。助かった。3枚980円のパンツを人に見られるなんていいくらなんでも……。

「こちらへ。服の雰囲気変わりましたので、メイクを少々お直しいたします」

最早何も言つまい。ベルトコンベアに乗つけられた気分で、ほぼスッピンだつた顔を弄られ、髪形もどうにかされ、いつの間にか手にもネイルを施されそうになつて、慌てて手は商売道具だから止めてくれと頼んだら、付け爪された。剥がし方も丁寧に教わったけど、オーバーヒートした脳味噌で、そんなの覚えていられるわけがない。

疲労困憊で店員さんに連れられて、ぼんやりとソファに座つたら、隣が大作家先生だった。

「……なんでこんな……」

涼やかに「コーヒー飲んでるヘンタイイケメンは、店員にカードを渡した。なんてことだ。この一式お値段どんくらいだ、普段量販店半額セールでしか買い物しない貧乏人には予想もできない。

「綺麗ですか？ よくお似合いです。」このスタッフは優秀ですね

愕然としていると大作家先生サマがサラリと仰つた。違えよ問題が。

「あの。こそこして頂かなくとも」

言え。ちゃんと言つんだあたし！

「氣に入りませんでしたか？ なら別の店に行きましょうか」

のおおお！ なんてこと言つんだ、この店員さんの仕事の成果、ケチ付けるなんてありえない残念なのは中身があたしつてことだ。

「やうじやなくて。こんな」と、して頂く理由がありません

よし言えた！ はつきりキッパリお断りしろ！

「理由ならありますよ。私がエスポートしている間に不愉快な目に遭わせてしました。そのお詫びです」

「なんだこの男……。

「……あの、今は持ち合わせがありませんが、このお金は是非ゼヒ支払わせてください。男の人に服を買つてもうつのは結婚相手だけだと両親から躊躇されています」

いや、嘘だけど。ウチの両親にそんな教えを受けた覚えはないけど。

「それはあれですか。男が服をプレゼントするのはそれを脱がす下心があるから、といつへ？」

「そうだよ、とはとても言えない。少なくとも、田の前のイケメンがあたしに、はりえない。」

「いやいや、先生がそうだといつもりはありません、ええ、全くこれっぽっちも。ですが紳士な先生ならお分かりいただけるかと思いますが、誤解を招くような行動は慎むべきではないでしょうか」

「……紳士、ですか？」

なんでもこじで理解できませんってカオしてんだ大作家先生。

「少なくともただの仕事の関係で、服プレゼントはしないでしょう。今回の場合なら、クリーニング代渡すのがスマートな対応つてものです。それだって充分気を遣つた対応だと思います。だからこれはやりすぎです」

「ただの仕事の……」

避け面の微笑みだつた。どす黒い何かが見え隠れした。触れたら確実に良くない事が起きる何かを秘めている。

「なるほど。では、これも仕事の一環と考えてください。ちょうど次回作のキャラクターを考えていたところです」

……。

大作家先生の脳内は、複雑怪奇に捻じ曲がっている模様です。

「前回は詳しくお話できなかつたんですが、この企画は一年を通して4冊ほどの発行を考えています」

「はい、そうですか。大作家先生、周囲から浮きまくつてますね。

「春夏秋冬、それぞれのシーズンを描く予定で」

「なるほど、そして女子の注目集めてますよ。

「一貫したテーマは自己否定なのですが」

「女子、つづーか、これは腐女子だな。ツレがあたしで」「めんなさい。実は男の娘なんだよ、て妄想変換オネガイします。

「次は、コスプレにのめり込む少女を主人公に据えようと考えています」

「……ああ。だから、此処なんですね。

「すみませんが、あたしはそっち方面さほど詳しくありません。もし良ければコスプレイヤー何人かは紹介できますが」

「聖地は平日でもこれだけ賑わっているんですね。履きなれないヒールが怖いです。

「必要ありません。私は個人への取材はほとんどしません。人間観察が主ですね」

そう仰る大作家先生は、歩行者天国を眺めて動かない。

注視されている変形メイド服の子が、こっちを気にしている。

うん。このヘンタイイケメン、カオだけは、……いや、スタイルもファンションも良いんだけどさ。

「貴女はどうですか。その服、さほど抵抗なく着たようですが、普段からそういういたテイストのものを着ているわけではないでしょ？」

「おおおお！ 人が必死に意識しないようにしていることを…！」

お店出て駅まで歩くだけで3回にけつて大作家先生の手を煩わせてしまったこととか、記憶から抹消したい。

電車が揺れてつり革つかまるつとしたらワンピースの肩がずれて、大作家先生に指摘されてブラ紐見えてることに気付いたとか。駅の階段普通に登つたら大作家先生にスカート押さえるように注意されちゃつたとか。

「こんなミニスカート普段着ないし… ガーターベルトが見えてしまいます、なんて一々言い方がヤラシイんだよ！」

「て、抵抗はありましたけど… でも、しおがないじゃないですか。それにコレはコスプレ服じゃありません」

「やうですか？ 日常とは異なる、といつ意味では同じ括りでしょ。新たな自分になつた気はしますか？」

「あらたなジブン。……そりゃ、ちよつとは、異性の視線が気になつたりはしますが。

「コスプレをする、といつ心理はぢうこいつものですか。外見を変えて自己解放？ ならば普段の自分とは何なのでしょうか。解放しなきやならない、つまりは、抑圧されている。何にですか？ コスプレとこう手段でどうしてじうといつのか。結局は既存のキャラクターの模倣で」

ブツブツと、考えこむ大作家先生。

……ええーと。タイトルは『哲学者の彫像』 ダンボールでもあれば書いて横に置くんだけど。

で、あたしはいつまでこれにお付き合つてなきやならないんでしょつか。

ああ。あの赤い軍服（でも超ミニ）のツインテール、れつきも見たな。何往復目だろ？ ピラ配りのメイド服はずつと視界にいるし。撮影会始まっちゃった和服っぽい一団、禁止されていのはずの路上パフォーマンスは、平日は規制がゆるいんだろうか。

とにかく、この周辺だけ混雑してゐるような気がするけど、氣のせいかな。全ての元凶がこの哲学者の彫像じゃないかつてのは、あたしの跡ち過ぎかな。

……………しかしそうそろ肌寒くなつてきた。

恐らくは春の新作、春風にヒラヒラと浮かれ氣分のモテカワパー
デ、大抵の見た目重視ファッショソは我慢が付き物だと思つが、こ
れは春先に着るには少し薄着過ぎると思つんだ。

奢つてもらつた和風創作ランチは、途中でお味噌汁ひつくり返し
たせいで完食できなかつた。お腹すいてきた。

……………そういえば、今日は実家に顔を出す予定だ。一人暮らしのア
パートから駅三つ離れてる実家へは、ここからなら乗り継ぎひとつな
つてたつける。

先週お母さんが、春キャベツが旬だから次はロールキャベツなん
かいいわね、と言つていた気がする。

メニューを思い浮かべたり、途端に空腹が我慢できなくなつてしま
た。

「…………先生。あの、そろそろ、移動しませんか？
老え事なら、どこかお店ででも……」

恐る恐る声をかけたら、先生は、はつとしてこいつを見た。

「あ、ああ。いたんですね。失礼しました」

いたんですね、だと？ なんだあたしは帰つてもよかつたのか。

「その、そろそろ肌寒くなつてきましたし、いつまでもこいで彫像

……こや、ほーっとしてゐるのもナンですか!」

「ひひやおー、避け面……」

「……そんなの、ここへ来てから3時間ほどですか。その間、貴女はただぼーっとしていたんですか?」

え? こやこや、だつて、先生動かないしー、しゃべらないしー!

「……まあ、こいでしょ! 放つておいて申し訳ない。唇が青くなっていますね。その格好では寒かつたでしょ! ビニカで温かい物を……」

あ。戻った。大作家先生の負のスイッチが分からぬ。

「あ、いえ。今日のところは、この後実家に行く予定だったなんですが、毎週一回は顔を見せる約束で」

……あれ? 急に寒くなつた? 日が落ちたから?

「毎週顔を出す? お住まいは? 実家と近いんですね?」

「え、えと。近所とこいつほどでは、駅三つ離れてますし」

「…………なるほど」

逝く、逝くよ。なんのこの避け面、なんでそんな冷氣発生させてるのー? ?

「あ、あの、その、えと」

「『実家に、今日は行けなくなつたと電話してく下さい。もう少し
お付き合いでいただきますよ。これは仕事ですから』」

大作家先生は『自分の携帯電話を胸ポケットから取り出してあた
しに握らせた。

「え？ で、でも」

「いいですか？ 貴女は、あの矯正器具のアイデアで、この私に原
稿の手直しをさせたんですよ？ 完成原稿は誤字ですらミスのなか
つた私に、本文そのものの修正をさせたんですよ！ 人に渡すときに
は常に完璧でなければならないという私のモットーを覆して……」

モ、モットーだと？ 知らんがなそんなモン！！

「…………その責任は、取つていただきます」

……バイバイ、お母さんのロールキャベツ。明日まで残しておい
てくれたらいいんだけど。

#πの「」(後書き)

作者はコスプレに偏見はないです。むしろジャステイス。

メイドさん、ハツ当たりだけど、恨むよ。

何を思い立つたのか、大作家先生はピラ配りのメイドさんに声をかけた。うれしそうに応じたメイドさんは、大作家先生の質問に快く答えてくれた。

……そしてコスプレ服専門店の存在を知った。

その筋じや有名なお店だそうだ。専門店があるとは知らなかつた。

大作家先生は、大量のお買い物をなさいました。

先生のお買い物に同行する勇気はあたしには無かつた。

店の外で待つ間、ディスプレイのおどりおどりして鎧兜を観察していた。

へー、これどう考えても腕上げただけで肩の角みたいので自分刺すんじゃないかな、そもそもこの肩のジョイント駆動域がほとんど無いみたいにみえるんだけど実際着た人いるのかな、鎧である以上使用目的は戦闘じやないのかな、このデザインもうちょっとどうにかならんもんかな、鎧と言うには「ケオドシ感漂つちゃつてる気がする、もしこんなキャラクター出来たら絶対雑魚だと思つよ。

「荷物、持ちます」

両手に紙袋抱えた大作家先生が相変わらず小難しい力才で戻つて来て、大変そうだったからそう申し出たら、やんわりと断られた。

「女性に荷物を持たせるわけにはいきませんよ」

でもね。大作家先生サマ。自分のルックス自覚してくれないかな。激しく違和感あるんだよ。

このお店の紙袋、笑顔満面ロリ巨乳が自己主張しそぎだと思つんだ。

「じゃあ、直ぐにタクシー拾いましょう。大荷物ですから電車では大変です」

隣にいるあたしが耐えられません。

ひょっとしてあの場で解散する手もあつたんじゃないのか、と気付いたのは、タクシーに乗つて、大作家先生が目的地を田モマンションと告げたときだつた。

え。この上田モまでつき合はれちゃうわけですか。

……つづーか、何であたしはのん気にー一緒にちやつてるんだ。

今、大作家先生は何を持つていいる? 大量のコスプレ服だ。

何で大作家先生はあたしを同行させた?。

いやいやいや、またかね、そんなはずないよね、あたしは着せ替え人形じゃないよ？

あたしは『仕事』で一緒に繕するわけだから、つまり絵を書くんだよね？ 絵、だよね？

今更ながらに、大作家先生のお買い物を見張つていなかつたことを後悔した。どんな恐ろしい衣装買つたんだ。サイズはどうだった。せつしき店の外で待ちたいと申し出たときあつせつり許可が下りたのはナニユエか。

このワンピースの買つたお店であたしのサイズはバレてると考えていい。

え？ あたし今これ何フラグ？

#にのなな

大作家先生の脳内では、次回作の主人公は、コスプレにのめり込む女の子だそうです。

どんどんコスプレがエスカレートして常軌を逸していくんだそうです。

そのコスプレの「デザインを、あたしに任せたいらしいです。

そんならそうと卑く言つて下さい。

あの参考資料の山が、ホントにただの資料であつたことに心底安堵した。

この完成度を女子中学生が縫製可能でしょつか、とか、手縫いとミシンの技術が相当、とか、材料費がどの程度で購入はどこで、とか。

タクシーのなかで紙袋開けて検証し始めちゃった大作家先生に、運転手さんがどん引きだつた。

紙袋の中にスク水を見つけてしまったあたしも、運転手さんにフオローする気力が失せた。

大作家先生が紙袋ガサガサさせる音だけが響く車内。重苦しい空氣に耐えかねた運転手さんがカーラジオをつけ、偶然なのか必然なのか、アイドル声優の超音波ボイスが飛び出して、クリティカルに

ダメージを受けた。

運転手さんが、恐らく最速で田地に到着させたのは間違いない。高速道路じゃないのにスピードメーターが× km示してたとか、あたしは見てないから。

「白毛は洒落たデザイナーズマンションで、やはりここでも紙袋の美少女がすさまじい攻撃力を發揮した。

常駐しているらしい管理人さんが、宅配便のお荷物が届いています、と言いかけて固まって、仕方ないからあたしがそれらしき荷物を置き場から探して勝手に受け取つた。軽いけどかさばる大きい箱と小さいのにやたら重い箱の二つだ。何となく、大きいつづらと小さいつづらが出てくる昔話を思い出した。

Hレベーターにもカードキーが必要だつたり、セキュリティが凄い。内装は機能重視っぽくてシンプルだ。

そしてモダルルームのように生活感の無い部屋に通され、今に至る。

何しDKですか。延べ床面積どんだけ。マンションなのにリビングに階段があるつて一階もあるんですか。お家賃は聞きたくありません。

「そちらの部屋を、好きに使つて下さい。一般的な画材は準備させましたが、足りない物があれば藤埜に言つてください」

はい？ 好きに使えとはどういう意味ですか？

客用らしい空き部屋は作り付けのクローゼットとベッドと、そして内装にそぐわない作業机があつて、眩暈がした。

「あの、ひょっとして、まさか」

「このほうが効率がいい。仕事が終わるまではここに居てもらいます」

予想外だよ。まさかそう来るとは。イキナリ缶詰めなんか不意打ちもいいところだよ。いや、コスプレの覚悟があったわけでもないけど。

ドアを見たら、一応鍵はかけられるみたいだ。何かあつたら引籠ひつ。そうしよう。

「届いた荷物は貴女用です。日用品など、不足は無いか確認してください」

え。この大きいつづらですか。大きいつづらはハズレですよね。

開けてみたら、このワンピースのお店の服が数着。下着とナイトウェアまで出てきた。更に旅行準備っぽいポーチには洗面用具とスキンケア用品、バラの香りのボディソープとシャンプーリンスコンディショナーのセット。

ほら、ハズレだ。小さいつづらがアタリとも思えないけどね！

つづーかこんな物までいつの間にか買上げ？ うん、あたしが

試着室にいた間だらうと思つたが、なんでそれを今まで黙つてゐるんでしょうね。事後承諾といつてはこれ計画的じゃね？ 確信犯じゃね？

「……じゃあ、早速仕事します。ええ。可及的速やかに取り掛かります」

そして一刻も早く仕事を終わらせる。

#にのなな（後書き）

……ナニカを期待していた方はいらっしゃるでしょうか。

あと、『あたし』は、”確信犯”的使い方間違っています。

必要なのは7着分。

徐々にエスカレートさせる方向性が、露出。

お仕事のために大作家先生に詳しく話を聞いたら、そう説明された。

ええーとお。いかにも男田線な意見じやないかと思ひますが。

まあ、あたしは言われたとおりに描くだけですけど。

……でも、露出。エスカレートした、常軌を逸した、露出。

迷いに迷つて、あたしは藤埜サンに電話した。

「あの、ライトノベルの挿絵でヌードって、ありますか」

聞髪いれず返つてきた。

『阿呆ですか』

「うん。ですよねー。

「でも、先生の指示で」

『先生がはつきりヌードだといいましたか?』

いや、それは言われていないけど。

「常軌を逸した露出、って、ナンダと思します?」

はあ、と電話の向こうでため息が聞こえた。

『だからヌードといつのは安直過激なしちゃつ。……正直に申し上げて、私には、その「常軌を逸した露出」がどんなものか思いつきません。ですが、あなたがどんなものを描くのか期待しています』

おお?

今まで挿絵はパセリにもある物言いだつた藤埜さんが。

『一作目。第一稿のどこがどこ修正されたのか確認しましたか?』

スマセン読んできません。刷り上った本貰つて本棚直行です。

「ええと。矯正器具の記述を加えたんじゃないんですか?」

『逆です。主人公の描画を、むしろ減らしたんです。ですから驚きました。ご存知ないでしょうが、先生は、ご自身の作品は本文が全てだと仰つて、後書きも解説もつけません。その先生が、自分の作品で、その表現を、絵に譲つたんですね』

「……それって」

『ですから、あなたの描くものを楽しみにしています。できる限りのサポートはさせていただきます。頑張つてください』

電話の向こうで、ちゃんと本氣で激励してくれることが分かる。

大作家先生は、モットーを覆したんだって言った。

うん。頑張るう。ちゃんと、本氣で、頑張ります。

頑張る、と決めたものの。

何をどう頑張ればいいのか。

用意されていた画材はそこそこ揃っているけれど、やはり使い慣れたものが欲しい。

どうしよう。一度取りに帰つてもいいだらうか。

じうせなら一旦家に帰らせてもらつて、カンヅメは明日からじや駄目かな。

今日アレだけ振り回されて疲れたしね。

今思い出したけど、タジ飯まだ食べてないよ。気が付いちやつたらお腹ペコペコだよ。

つづーか大作家先生は「飯どうすんだ。

何となく、この家には食料とか生命維持に必要不可欠な物が欠けている気がする。

ビクビクしながら部屋を出て、大作家先生を探す。

探す。

うん。マンションって普通、人を探すような瓜さじやないと思つんだ。図らずもお宅拝見してしまつた。うつかり大作家先生の寝室まで見ちやつたのは失礼しました。

でも寝室すら生き物の氣配感じないつて、大作家先生本当に人間ですか。二酸化炭素吸つて光合成して酸素出してませんか。

リビング横のドア開けたら、先生発見。こゝが書斎らしい。壁一面の書庫にビビッた。

「どうしました」

ああ。小さじつつら開けてたんですね。紙の束は、それ資料ですか。＝画集らしきものあるようですが。何の画集？

「ええと。＝画材が、やはり使い慣れたものが欲しいんです。一度取りに帰りたいんですけど。それと、先生夕食はどうなさるんですか。あたしはここで缶詰めにあたつて、どうしたらいいんでしようか」

生き延びるために。

「そうですね。今から取りに行きましょうか。車を出します」

え？ 先生が車？ いやそれは申し訳ないです。

「いえ。そこまでは。ここまで持つてこよひつてんじゃありませんから」

ついでに、自前のお着替えとかも持つて来たいんです。あんなオサレなお洋服でお絵かきできません。作業着が欲しいんです。あなた見た目重視（誰に見せるんだ……いや……愚問か）な下着類も着用しありません。

そしてどうか外で「」飯食べてきりやおつかなーと田舎へ戻る。ハラヘシタ。

「普段はパソコンも使つんですか？」

「使います。最近はデータ入稿のほうが早いですし。でも、手書きでやりたい絵もあるんで、半々ですね」

「なら、やはり持つてきましょ。それとも「」でも買い揃えますか？ 機種を指定してくれれば取り寄せますが」

……大作家先生の金銭感覚がわかりません。

「使い慣れたものが良いので、持つてきます。今日はもう遅いですから、明日にでも藤林さんに連絡してどうにかしてもらいます。なので先生はお気遣い無く」

「遠慮は無用ですよ。この仕事に関しては万全の体制で望んでいただきたい。そのために必要な物は全部申し出でください」

なんでそんなにやる気なんだよ大作家先生。本業は純文学なんですよ。ライトノベルは気まぐれなんですよ。どうしてそこまでする必要がある。

「……じゃあ、お腹すきました。」飯食べたいです

正直に言つたら、大作家先生、ちょっと笑つた。今のは感じ良い笑いだつた。

「それは失礼しました。生憎、こここのキッチンはお茶を入れる程度しかできません。外食と『リバリー』、どちらがいいですか？」

はあ。お任せします。

つれて来られたのは上品かつ上質なリストランテだつた。イタ飯か。周囲に大作家先生が馴染んでいる。昼間のイロイロよりもよっぽど。

「……不思議なんですけど。どうして先生は、ライトノベルを書こうと思つたんですか？」

シーフお勧めのコースを頼んで、お酒は車だからと控えて、ナイフとフォーク操る手も優雅で。

なんつーか、これ僻み根性かもしれないけど、あたしとは次元が違うつてゆーか。

大作家先生は、苦笑した。

「そもそも、ライトノベル、とは何ですか。純文学とは。その違いはどこにあるんです？」

「うわあ…。また小難しいことを。

「私は、今でこそあんなマンションに住めるようになりましたが、最初の頃はバス無しトイレ共同の下宿でした。とある文学賞を取つて、今や出す本はほとんど売り上げ上位になる。図書館に行けば、私の本は当然のように置いてあるようになつた。しかし、賞を取る前と取つた後と、どちらも書いたものは自信作です。内容が飛躍的に変わつた訳ではない。中身が同じなのに、じゃあ何が違うんです？」

「ええと。……あたしはこゝ、どうしたらいいのかな。

背中に冷や汗かいてると、大作家先生は、目を瞑つて大きく息を吐いた。

「失礼。こんなことを言われても困りますね」

さらりと、大作家先生は話を変えた。

「うん。鴨のロースト、美味しいです。このハーブのソース、絶品です。はい、このお店『ザ・ガート』もお勧めなんですね。じゃあドルチエミストお願いします。」

大作家先生、本名何て言うんだっけ。

今度、こゝそり藤埜さんに聞いておこつ。

目が覚めたら、おしゃれなスタンダードライトと呴のこいカーテンが
目に入った。

……うん。夢だ。夢。

…………ついでにして欲しいな！！

「なんで」

いつの間に寝てたんだあたしは。昨日のオサレな春「一トワントンピースで寝てるって、何となく大失態の気配が。

よくよく考えて、昨日飯食べてお腹いっぱいになつた後、高尾先生のお車の中でウツラウツラしちやつたあたりを最後に記憶が無い。

状況証拠はばっちりだ。寝オチだ。

ここまで誰が連れてきてくれたのかなんてそんな少女漫画的なことは絶対に考えない。

ちゃんと服着てる。高尾先生は筋金入りの紳士だった。さつと食欲も睡眠欲も性欲も無いよ！

時計を見ると、5時チョイすぎだった。

じうじょう。

とりあえず着替えたい。お風呂はいりたい。でも他所のおつかいで勝手にお風呂なんて。

起き上ると、作業机の上にメモがあった。

『キッチンにパンを買ってあります。朝食は自由にしてください。家の中は好きに使って構いません。12時までは絶対に起きてください』

流暢な几帳面な字だ。そして睡眠欲はあるらしい。

至れり尽くせりです。お気遣いありがとうございます。

先生が12時まで就寝と分かったので、遠慮なくお風呂を使わせてもらひます。

……でも早く着替え取つてこないと、下着がアレしかない。

バラの香りの洗面セットを取り出しつゝ、ちょっとどどんとよつした。

お風呂は広くて、湯船も足伸ばせてゆつたりで、そしてホテルのバスルームのように高級感溢れるインテリアで、ばばんがばんばんばん、なんて絶対許されない感じで、やっぱりどんよりした。

最初はバス無しトイレ共同つて言つてたっけ。

銭湯とか通つてたのかな。風呂桶小脇に抱えてコーヒー牛乳飲んだりしたのかな。

考えると、ちょっと面白いかも。

編集さんって、便利屋じゃないよね。誠に申し訳ございません。

藤埜さんはここに管理人さんに顔バスマらしい。あたしはいつもかり外出でオートロックに締め出されちゃったけど、藤埜さん一緒に管理人さんがロック開けてくれた。

いつも大変ですね、て挨拶されてた。そーか。いつも大変なんだなるほど。

藤埜さん、Pの扱いが非常に丁寧で、接続もスムーズで、そこの電気屋さんよりもよっぽどだと思うよ。レンチやスパナが意外にお似合いで。今度ボルトとナットのセクシーについて語り合いませんか。

でもって、荷物やらPやらガサガサ持ち込んで大型モーター設置するのにフレームガンガン組み立てたり、結構物音立てるのに起きてこない高尾先生も凄いよ。

「あの。今更なんですが、高尾先生の本名って、なんて仰るんですか」

「Jやーっと、聞いた。

「奥羽隆生ですが……」

すっげ不審そうに、でもちゃんと答えてくれた。あ、そつだつた。
そつだつた。

「あ、えと。ペンネームでなく本名?」

取り繕つてみた。

「はい。本名です。……読み方は、『たかお』ではなく『ココウシヨウ』が本来らしいですが、先生は『たかお』で通していますね」

え。またお名前まで小難しい。

「『』実家はお寺なんだそうです。一人息子で、やはり寺を継ぐことを期待されていたとか」

「つお。お坊さんですか！ 似合わない！！

「勘当されたと、聞いたことがあります」

さやああ。すげー。凄いよ。勘当とか、この『』時世本当にあらん
だ。

「わて。設置はこれでいいでしょうか?」

大型のモニター、微調整までしてくれてありがとうございます。
なんか前より使いやすくなつたような気がします。

「お手数おかけしました。スマセン!」などとままで

「いいえ。コレも仕事ですから」

「いやかに仰る藤埜さんに、後光が射して見えた。

で、高尾先生、まだ起きてこないけど放置していくいいですか。

藤埜さんの、これで仕事がはがどりますね、ってフレッシュシャーとか、気にしない方向で。

リビングで落書きしてたら、低血圧って顔に書いた高尾先生が出てきた。

「一ヒー牛乳一氣してお坊さんの落書きの横に、寝起きのドアキュラの落書きも並べてみた。

うん。お坊さんよじドアキュラのまつが似合へ。

「高尾先生。主人公のラフ、いくつか描いたんで後で見てください。それでイメージある程度固まってから、コスプレのまつをやりたいです」

「注文は露出。やっぱりこの場合はロリ巨乳が求められてるんだらうか。

むしろ肋骨浮き出るへりースレンダーで露出のまつがくる気がするけどな、アタシ的に。

だってね、考へても見てよ、ボン、キュー、ボンなら服着てもアッピール充分じゃんか。むしろダイナマイツは隠してこそその破壊力

だ。谷間チラだけでその先を妄想するのが正しい姿勢だ。違つかね
青少年諸君。

……スマセンね個人的主張丸出しで。

そんなこんなで、描き上げたラフ、一押しはホネホネでベリーシ
ヨートだ。

「ちなみに、その心は？」

あれ。また心読まれた？

「えー、コスプレの自由度が。スレンダーなら寄せて寄せて上げて
揚げて盛つて盛り付けていけばどうにでもなりますが、ダイエット
と一緒に減らすのは難しいので。髪がショートも同じ理由です。ピ
ンク髪とか。どうせジラ。あとも一つ、女子中学生つてコトですが、
ピアスはどうでしょうか。エスカレートの度合にピアスの数で。
臍ピアスとか、コスプレのときだけ見せるよつた位置に」

痩せギスの娘が痛そうな位置にピアス。常軌を逸してゐる感じが『
露出』じゃなくても出せると思つけどな。ちなみにピアスは普通の
アクセサリじゃなくて、安全ピンとか鎖とか釘とかボルトとナット
とか。

高尾先生はしばらく手を睨んで、無言で書斎に消えた。

あ。牛乳瓶掲げた僧侶と寝起き吸血鬼も見られちゃつた。

誰がモデルとか、……バレてない、よね？

なんてゆーかさ。

作家とか漫画家とか、ある意味人間やめてるってゆーか病めてるつてゆーか。

人として必要なものが欠如してるんじゃないかな。

「ぐ、呉羽先生……、お願いです、一文字でも……」

先生は、他社のお仕事も平行していた。今日はその締め切りだつたらしい。

当然のように、原稿ができていない。昨日一昨日何してたんだ。言わずもがな、一昨日は矯正器具贊美してコスプレ服研究して、昨日は半日以上寝てたよね。

田の前に、非常時の藤埜さんと同種の生物がいます。あのコスプレ服の山、この編集さんには絶対に見せられない。

……にもかかわらず、高尾先生は書斎のデスクで微動だにしない。

眉間にしわ寄せて、宙を睨んでいます。

「お茶、いかがですか」

いたたまれないので、せめて編集さんにお茶を勧めてみた。

漫画家の修羅場は何度も経験しているけど、あつちは追い込みともなればアシスタント入つて大人数で半ばパニくりながらひたすら描くのが普通だ。

編集さんだつて、否応無しに手伝わされていた。

「 どうか。この場合編集さんは待つしかできないのか。それは精神的にもキツイだろうな。」

そして作家さんは、一人で、書くしかないんだ。

「…………恐れ入ります…………。あの、失礼ですが、お身内の？」

「 うぎやあ。そこはスルーしてくれよ。なんて説明したらいいんだよあたしのこと。」

「ええと。赤の他人ですが、契約で、とある仕事が終わるまでは口に住むことになつてます。お気になさりす。」

編集さん、すっげ微妙な顔した。「うん。『自由に』想像ください。

ラノベ書くの内緒らしいし、他社の人にはべらべらしゃべつて良いのかあたしには判断できない。」

必要なら、高尾先生が説明するだらう。

「 ともあれ、まだ何とかなる範囲ではあるんですが。……もっとケツカツチンなんていいくらでもありますしね……」

虚ろな目だ。やっぱそうな感じだ。

「氣を確かに持つてください。座つぱくまで後向センチか測るよつ、ほり、前向いてホール見ましょ、」

ぱき、と編集さんが固まつた。なんかマズい」と言つやつたのか。地雷か。

「前、前、前、は、はは、前、そうですね。ええ。前、まえ……、前つてどうですか」

余計なコト聞こました申し訳ござません。

明日の朝また来ます、と憔悴した編集さんが帰つていつた。

自分の食事はテリバリーで済ませた。先生、声かけても書齋から出てこないし。これは無理やり食べさせるトドカラつか。でも、あたしそここまでやる義理は無いと思うんだが。でも先生の財布でピザ取つた以上、あたしだけ食べるのはいくらなんでもな。

……つーか、ココで手料理作つて少しでも召し上がりつてくれない、が、少女漫画の常套だけど、それなら尚更、絶対に手料理なんかしないと誓つ。

フラグとかありえないありえない。

でも、やっぱ氣が引けるので、ピザと栄養ドリンクをトレイに乗せて書齋のドアをノックした。

「失礼しま～ス……」

「」セーツとジアの隙間から覗いたら、能面よりも無表情の先生が、天井睨んでた。『』。

「高尾先生。ご飯、どうしますか」

恐る恐る、トレイを差し出す。みる。

「……え、ここで飲食はしないことにしているわ」

あ、動いた。生きてた。

のつそつと動いた先生は、心ここにありらずでもコビングに出でた。

「あの編集さん、明日また来るって言つてました。あと、あたしのことは適当に言つておいたんで、後でフォローお願ひします。それと、いつのお仕事のほうはどうなんでしょう。あのラフで進めておいていいですか」

とりあえず言いたいことだけ。

高尾先生は片手でこめかみを揉みつつ、深く息をついた。

タイトル『苦惱の彫像』だな。

美形つて結局どんな顔しても美形なんだ。笑顔が綺麗なのは誰だつて当然、怒りや苦悶の負の表情すら鑑賞できっこその美形だ。

今度高尾先生モードにネーム考えてみようか。……少女漫画じやなくなりちやうか。

「……一つ、お願いがあります。あのピアスのアイデア、あれ、他で使つてもいいでしょうか」

#苦惱のまま、ポツリと先生が言つた。

「え？」

「あなたのアイデアですが。あれを見てから、どうしても今書いている話の登場人物にあのイメージが被つてしまふんです。リストカット常習の少女として書きすすめていましたが、リストカットよりもピアスのほうがしつくつくる。どう考へても」

え。ええと。

「……本当に、あなたのセンスは、……理屈だの理論だの計算だの、到底……」

ひょっとしてそのせいで筆が止まつちやつてたんですね。

え？ それあたしのせい？

……その、スマセ……？

「……つ全くつ、腹が立つつー。」

がたん、と高尾先生が立ち上がった。

……はへ？

あ。衝撃で栄養ドリンクのビンが転がった。けど、蓋開けてないから大丈夫だ。うん。

……うん。現実逃避だよね。

なんで苦惱の彫像が仁王像になつてんだよ。

ちょっと待て、それもあたしのせい？

あたしのせいだっての？

「なんなんですかあなたは！　のほほんと一言一言で、緻密に綿密に計算して構築した世界をあつたりと…」

ちよ、激昂する美形は迫力1・5倍だよ、何なんだよ先生サマ、持病のおこり？

「しかも、こつちが既に兜を脱いでいるというのに、当の本人はのん気に売れない漫画家です？　直感だけでやすやす人の上をいきながら、鳴かず飛ばずの現状を何だと思っているのか！　大体ね、あなたは生温いんです！　絵の仕事なら何でもと口では言いながら気乗りしない仕事は消極的。ただの仕事ですって？　『ただ』とは何です、作品を生み出す、それはいつだって真剣勝負でしょう、たまたまクソも無い！　しかも男のプレゼントを断る口実は『親の言ひつけ』、どこの小学生ですか、その上週に一度は親に飯をたかる、自立もできていない、あなた何年無駄に生きてるんです！　拳句、押しには弱くあつさり流されて男の部屋にまでノコノコ付いて来て！　よくも今まで無事でしたね、よっぽど過保護な環境でお育ちだ、ご両親はさぞかし心配でいつまでたっても親離れ子離れできない悪循環ですか！　どうせ漫画家になるのも反対なんかされたことないんでしよう、全面的に応援されて、もともと人並み以上には器用でちょっとの努力でそこそこの成果を出して、逆境に抗った経験も、それに打ち勝つたことも無いのですか？　許せない、断じて許せませんね、許せるわけが無いでしょう！　こんな覚悟も無い人間に自分が負けたなど…！」

え、あの、その、……息継ぎしてください……？

フシューフシュー、と湯気出しそうな勢いで、先生は大きく肩で息をした。

「さつさと腹を括りなさい！ そして相応の成果を出してもらいます！」

ビシイ、と指を突きつけられた。

ちよ、その、え？

「あなたは、この私が負けを認めた人間です！」

鼻息も荒く宣言された。

言葉を見るなら、多分敗北宣言だ。

なのに、宣戦布告に聞こえる。

あの宣戦布告の後。

血圧上がつたらしい先生は書斎に籠つた。

翌朝、前方を見失つてゐる編集さんが来たときには原稿は上がりつていて、編集さんは喜色満面原稿を持つていつた。

「そり聞いてみたら、元リスカ・現ピアス少女は作中ホンの端役だそうな。出番は一回、一言三言メインキャラと会話する程度。どう考へてもイメージ違つたからつて締め切りぶつちして書き直すほどの重要人物ではなさそつだ。」

なのに編集さんは、より良くなつた、とホクホク顔してた。数時間前は死にそうな顔してたくせに。

そうして、こつちのお仕事の一押し、ホネホネでベリーショートのピアス少女は、当然使えなくなつた。

……結果、今また「デザイン起」してゐるところなんですが。

「生易しいですね。常軌を逸するほどのは迫力がない

「ヌルいですね。もつと鬼氣迫る何かを表現できませんか」

「全くなっていない。狂氣がまるで感じられないですよこんなモノ

……キャラ違つてしませんか先生。敬語キャラは貫くみたいだけどね。ちょっとそんざいな敬語だけね！ 余計腹立つ敬語だけねー！」

ダメ出しの鬼と化した先生サマが踏ん反り返つていらっしゃいます。

「だつてだつて、ラノベで萌えキャラなんでしょう？ いくらなんでもこれ以上は」

「あなた、表現者が自ら枠に嵌つてどうするんです。私は逸脱しようと言つてこるんです。言葉は精確に理解してください」

うがああああー！ ……と叫びたい。

何なんですか大作家先生サマつてば、今まで餌のいらない猫十四五くらい被つてたんですか、急に化けの皮剥いだんですか。

「先生。今からでも紳士の仮面被つてください。この際、あの胡散臭いイケメンスマイルでも我慢しますから」

はん、と鼻で笑つこのは、一体誰だ。

「あなたにはコレくちこみよじりでしょ」

ちょいぢぢくない。遡け面にも程がある。

「……じゃあ、どいがダメでどつ直せばいいのか教えてくれたら…

「…

「手取り足取り教えてもらおうなんて小学生ですかあなたは。バツ付いた答案直すくらい小学生でもできたりんですけどね」

「ムッかあああああ！…！…と叫んでも罰は当たらないと想ひ。

「…言つてくれるじゃないですか大作家先生サマ！ よーしそつちがそのつもりなら良いいんだなどうなつても…！」

「…ひくなつたら藤埜さんが腰抜かすほどのおっしゃいのを描いてやる！ 良いんだなホントに…！」

「…じゅあ、集中して描くんで。ハフを半日後に提出します」

「…出て行け、ヒドアを指差したら、先生は一ヤリと笑つて出て行った。

何だよそのやれるモンならやつてみろな表情は。

「…ひそっ…！… その避け面、吠え面かかせてやるぜ…！」

「…唸れあたしの黄金の右手…！」

「…東都で物議を醸してやる…！… そして出版社が窮地に陥つても知らんからな…！」

集中するためにドアに鍵をかけて、あたしは作業部屋に籠つた。

先生曰く。コスプレ少女は、自傷ではない自刃行為。普通じゃない位置のピアスも大きく括って自傷行為の一種と捉えられないこともない。だから、ピアス案は最初からボツだつたらしい。

……となると。

教えて避けていたけれど。

自分を痛めつけないなら他人を、ならビート方向にもつてつちやうよ。

むしろコスプレ的には、アリだよね？

常軌を逸してゐるよ？ 確実に逸脱してゐるよ？ ホントーにやつちやつみ？

もう、いろいろなことビードラfftでイイヤー、な気分で、7枚のラフスケッチを描いた。

いつも清清しいまでにドギッキイ女王だ。

ちよつとソフトな革ジャケから始まつて、徐々にエスカレートね。途中でンジヨサマっぽいの通過してね。仮面も面白おかしくアレやコレ。

しかしミナサン、期待に背いて申し訳ないが、中身はダイナマイツじゃなくてホネホネなんだよ。肉感的から最も遠いバディでソレやるからむしろ痛々しさ半端無いよ。『——』『常軌を逸して』を描いてみましたよ。

描いて、自分でもこれは酷いと思った。もしこんなコスプレがイベント会場にいたら自分の上着を着せ掛けちゃうかもしれない。描いてて気分悪くなつた。

そんなのがラノベの主役張るつて、最早それラノベじゃない。でも大作家先生サマのはラノベ風と最初から言つている。風、なら良いのか？

しかし、これがもし本になつたとして、読む人いないうな気がする。少なくとも本屋で一度手にとつてパラパラと中身チラ見して、このイラストが出てきたら、絶対すぐさま棚に戻す。決してレジまで持つていかない。

……その前に編集ストップが確実か。

7枚描いて、その惨さに、逆に頭が冷えた。

なまじつか自分の画力が高レベルなもんだから（ここは謙遜しない）、この絵は見た人に不快感しか与えない。田を背けるだけだ。

先生の求めるモノは、多分、そんなものじゃない、はず。

考えて、描いた7枚、全部バッテンした。

挑発に乗ったとはいえ、半日後にはそれなりのものを突き付けてやらなきゃ『気がすまない』。『レジヤダメ。ダメダメ。

……一冊めは、既に話があつて、それを読んだからイメージが直ぐに固まった。

今回は、絵が先で、そのイメージで先生が話を書くらしい。絵に、ある程度の自由がある。その自由を最大限最良に生かせつてことだ。

うん。美術の課題であつたな。テーマだけ『えられて後は自由。絵とか彫刻とか表現方法すらも自由。

そーすつと、何をどうしていいかわかりません、なんて学生も出てきちゃうんだな。自由課題って、残酷なまでに学生が試される。

『表現のための技術は学べば良い。下手なら努力すれば良い。でも技術だけで絵はかけない』

突き放した態度だった油絵の講師の言葉を思い出した。そんなに昔じゃないはずなのに懐かしい。

必要なのは何かと聞いたら、自分で考えると言われたっけ。

集中して描いて、何枚も何枚も描いて、鉛筆がチビてどんどん無くなつて、それでも描いて。

『常軌を逸した露出』

「これならビードル、と、鉛筆を置いた。

ふつゝ、と息を吐いて顔を上げたら、先生が腕組してそこにいた。

「…………あれ？」

今何時だ。半日後ついにつだつたつけ。

「できましたか？」

先生が手を出すから、うつかりスケッチブックそのまま渡しちゃつたけど。

「…………確かにあたし、ドアに鍵かけた覚えがあるんですが」

なんでいるんだこの人。

「そんなもの、ここは私のマンションですからマスターキーくらいあります。ノックしても呼んでも返事が無いので、もしや倒れているのかと」

それはそれはご心配を。集中してたからね。時計を見たらあたし半日以上籠っちゃってたみたいだし。そこはスイマセン。でもその前に重大な問題があるよね。

「…………鍵かかる部屋だからカンヅメもOKしたこと……」

言つちやナンだが大作家先生サマよ、人を騙すのもいい加減にしたらどうだ。藤埜さんに訴えたらどうなるかな、どうにもならないかな。むしろ大作家先生が未婚女性手籠めについてスキヤンダルでも騒いでやろうかな。その場合あたしのダメージも大きいな。でもお堅い純文学の作家がP---って業界的にはどうなんだろうな。試す価値はあるかな。今に見てるよ大作家先生サマあたしは泣き寝入りするオンナじやないぜ。

混沌と暗黒の未来に思いを馳せていると。

「これは」

スケッチブックを眺める大作家先生サマが説明を求めているらしい。

「ですから、『常軌を逸した露出』です」

指差されているのは、野暮つたい制服を校則どおりに着たラフスケッチだ。

「等身大の自分自身を、露出」

「コスプレがキャラになりきることなら、究極の露出は、ありのままでの『自分』じゃないかな、と。

「…………なるほど」

だから、その手前の6枚は、ゴッテゴッテのコスプレだ。あのコスプレ専門店で見たディスプレイの鎧とか。顔もできる限り隠して、身体も分厚く作り物。中に誰かいてもいなくても同じだつてくらい

に。

「そこで突き抜けちゃえば、コスプレが逃避じゃなく自己表現になつて、将来デザイナーとかそっち方面興味湧いたり?」

あたしの知人の「コスプレーヤー」は、貧乏劇団で衣装デザインやってる。だからむしろあたしは、『自己否定でコスプレ』が分からない。あんな明るく楽しくコスプレしてるのに。

「……良くておとうます。そういうことなら……」

ブツブツと、先生がアツチの世界に旅立つた。スケッチブック持つたまま書斎に直行だ。

……どうやら合格点かな。

とりあえず、飯、風呂。そして睡眠。

なんかもうイロイロどーだつていいやーの限界点を軽く超えているので、遠慮せず大作家先生の財布で定食を出前してがつたり食べて、バラの香り充满するお風呂でふやけて、誰に見せんだお洒落ナイトウェア着て、結局マスターキーあるなら意味無いじょん鍵開けっぱなしで良いや、と、寝た。

三流写真週刊誌で『純文学作家の乱れた私生活!』のアオリ文句踊る大作家先生の巻頭特集ページ眺めて、ザマリロと高笑いする夢を見た。

正確だといいな。

「パパラッチのミナサン……ネタはここに転がりますよ……」

朝といつには毎よりな時間、リビングでふつかふかのソファで口々、口しながら落書きしてたら、大作家先生サマが書斎から出てきた。

どうやら先生は集中すると一心不乱に書き続ける性質らしい。徹夜明けで無精ヒゲの美形つて、妙な色気が……くつそつ、ケチつける所があるほうが人間可愛げがあるってもんだ。

つい、『おはようござります』より先に今朝見た夢のイメージが
髪髪と。

「パパラッチ？」

その言葉に、超嫌そうに顔を顰める先生に、ピンと来た。

「あ、先生、やつぱり三流写真週刊誌はお嫌いですか？」

弱点を見つけたようでちょっと嬉しくなった。

「あんなものを好きな人間の気が知れません。低俗な。しかも推測記事ばかりで正しくすらない」

ほえええ。低俗とな。「コシップなんだから、それは低俗である」とがアイデンティティじゃないか。

「そうですか？　自分に関係なきや、面白おかしい噂話程度だと思いますけど」

ねえ。芸能人の誰某がくつついたの別れたの。毒にもクスリにもならぬことどうだつていい話。

しかし流石は大作家先生。違うお考えのようだ。

「自分に関係が無ければ、ね」

不機嫌全開で、吐き捨てるように仰る。

「何かあつたんですか？」

この毛嫌い様は。

「…………言いたくありません」

珍しくゲンナリと先生が目を伏せるもんだから、つい、これ以上突付いちやいけないと仏心が。

「あつたんですね。追求しないで差し上げますので恩にきて下さい

優しいなあたしつて。

「…………」

その奇妙なモノを眺める眼差しは、どうこの意味でしおつか。

「じゃ、先生。」コーヒーいかがですか。自分の淹れた残りですけど

先生は、深々とため息を吐いて、頂きますと弱々しく頷いた。

本当にどうしたんだ。疲れてるのか。

疲れているときには甘い物がいいんだよ。

親切にもステイックシュガー5本投入してあげたコーヒーを、大作家先生は一口飲んで咽た。

何かを訴えている睨みつけるような眼光も、げほんげほん言いながらじや迫力不足だ。

「お水、いりますか？」

気を利かせたあたしがキッチンに行くより早く、大作家先生がそれを止めた。

「自分でやります」

……チ。水じゃなくお酢でも注いでやうとしてたのがバレたか。

まあいいや。第一ラウンドは、判定勝ちってことだよね。

三流写真週刊誌に頼らなくても、仇は自分で討つもんだ。

先生は、頭の中でアレコレ練つて、描き始めるまでが大変なんだ
ナビ、これ書き始めたら筆が早いんだって。

藤埜さんが教えてくれた。

ナビもな「一ヒーを淹れて、藤埜さんと先生サマが話してゐる。」
の調子で書き進めたら、優等生で締め切り前に原稿上がりそうだつ
てや。絵でイメージできると筆もノるみたいだ。

編集的要望としては、あのリツのとおりでませ。でも、絵面
をもつちよつと華やかに、だそつだ。

ナビやあね。一次元的には田め大きくぱつちり、手足もスラッシュ
美少女が求められてるんだろ? うじね。でもさ、先生の書くキャラ
つて、どこにでもいる普通のむじゅうパンフレットクスだらけの少年少
女、じゃないのかな。

華やかな容姿してるヒロインが皿口定でウジウジ歎きぐる、
て、それ、納得いかなくなー? なくなくない?

「……ヒ、思ひますナビ。先生もわづ思こませんか?」

先生に話を振つてみた。先生サマの鶴の一曲なら、藤野さんだつ
てぐうの音も無いだらう。

「そうですね。ですから、あのラフのイメージを壊さない範囲で、編集の意向を尊重してください」

……へ？

「大丈夫ですよ。今回は取り掛かりが早かつたので、締め切りまでは余裕です。先生の方は順調のようですねし、後は挿絵だけですね」

……ほ？

先生サマは当然の如く淡々と、藤野さんは上機嫌に、無茶な注文をぼやいて下せつやがりましたよ。

「ちよ、平凡、且つ、華やか、って矛盾してませんか？」

「どんだけハードル上げる気だ。無茶振りって言葉を知っているか。

「大丈夫です。頑張ってください」

「オイー」「ハハ」となんて無責任な励ましきくれるだ編集サマー！

「あなたは、どうやら追い詰められた方がいい仕事をするようつです。もつと追い込まれてください」

「なんつー」と言つてくれぢやうんだ先生サマ！！

「そうなんですか？ 緒峯さんは、プレッシャーに弱いタイプで中々成長できないと言つていましたが」

え？ オネーサンがそんなことを？

「踏みつけ方が甘かったんでしょう。麦ではなく雑草です。結構図太いですよ。いきなり連れて来られた他人の家で、すっかり寛げるようです」

しつつれーな！ 誰が雑草！？

「なるほど。確かに血色は前よりよくなっていますが」

そりゃ「口来てから」飯が美味しいからねー！ 外食と出前ばつかだけど、一人暮らしのときより食生活は格段に上だ。でも藤埜サンに言われたくないよ、ゾンビだつたじやん。

「これも作品のための投資です。珍獣一匹飼つたと思えばコレべら
い」

……チソジュウ。

「ちょっとちよつとちよつとちよつときから黙つて聞いていれば好き勝手なことをー！ 誰が飼われてるんですか！ あたしがここにいるのはオシゴトのためでしょー！ もーイイですさつさと描き上げます描いて終わらせます、そんでバイバイですー！」

憤然と『えられた作業部屋に戻つて、はた、と我に返つた。

……なんかあたし操縦されてないか？

平凡、且つ、華やか。

この一つを両立させるために、あたしは姑息な手段を使った。

つまり、キャラの容姿は平凡。むしろ地味。一応スタイルは普通に良いけど、顔立ちは可もなく不可もなく。

衣装とか背景とか効果で華やかさを表現。

……むしろキャラの平凡さが浮いてるけど、でも絵面は派手。

何しろ題材がコスプレだからね、いくらでも派手にできるつもんよ。

表紙カラーではゴージャスコスプレ衣装の主人公（でも顔は仮面）、あーんと、裏表紙でハンガーにかけたコスプレ衣装を体に当てる平圧主人公（制服、校則遵守）の背面。おまけに裏技、カバーを捲るとシンプル無地Aラインワンピースに裸足、でも可愛らしく微笑んでる主人公。はっきり言ってモノクロだけどおまけが一番良い絵、だつたりする。この絵は、文庫のカバー下には何もないという固定観念をものともせずカバーを捲って見る探究心溢れる冒険者だけが手にするご褒美だ。

どーだ、隠れたカバー下はともかく、表紙裏表紙だけでもネタバレだ。

文庫本体の表紙にもイラスト印刷するつてのも、あんまりやらな
いらしい。つかこのレーベルでは今までやったこと無いつこ。
いいじゃん初の試みで。

……別にね？ 表紙でネタばれても問題ないくらい面白い中身書
けばいいじゃん、とか、藤埜さんもちつたあ苦労しろよ、とか、考
えてナイですゾ？

描き上げた表紙と挿絵見て、大作家先生がまたしても完成原稿に
手を入れたこととか、別にガツツポーズなんかしてないし。

出来上がった絵を渡したときに、締め切りまで余裕あるならコレ
くらいやつて下さいよ、とお願いしたら、藤埜さんが酔を飲んだよ
うな顔したけど、別に喜んでないし。

晴れ晴れと二冊目のお仕事を終えて自宅に帰った。

やつとお風呂で熱唱できる、一応はこれでも遠慮してたんだ、は
あ肩凝つた、一流レストランも毎日だと飽きるよね玉子かけご飯が
食べたいな、と安心したのもつかの間。

パソコンおよび仕事道具一式を大作家先生んトコにおいてきちゃ
つたことに気付いて、自分で電車でPC運ぶわけにもいかなくて、
藤埜サンにお願いしたらどうせ三冊目も直ぐ取り掛かるんだからと
運んしてくれなくて、泣く泣く大作家先生ん家に舞い戻る羽目になっ
た。

……せめてあのキッチンでインスタントラーメンくらいは食べられるよ、アヒル、鍋と包丁とまな板とドンブリは持つていこう。

閑話 となる（特殊な）服飾店アルバイト、Aさん（20代 女性 特記事項・

もともと活動報告に載せていた小話です。

そのお客さんは、店に入る前から立っていた。

可愛らしい格好の彼女サンを連れてこんな所に来ちゃうつて、どんなツワモノかと興味津々に眺めていると、彼女サンを外に待たせたまま店内に入ってきて、これまたびっくりした。

超美形。

ヤバイヤバイ、私の最愛のルシフェル様（『星の数ほど抱きしめて（S.F.アクションボブゲ）』の悪役キャラ）の地位が揺るぐ。

3次元なんかに乙女のハートを持つていかれるわけには行かない。

『運命？ これが運命だというのか！』『神などに縋つても無駄だ！』

ルシフェル様の決め台詞を脳内で反芻して気を静めた。大丈夫、大丈夫、正気に戻れ自分。腐女子人生をルシフェル様に捧げると誓つたんだから！

深呼吸して、改めてお客様を見る。

うん、よくよく見ればスレンダーな体つきは、ルシフェル様のようないい匂の濡れ羽色の翼なんてどこにもない。彫りの深い顔立ちも薄い唇も、ルシフェル様の見るものを陶然とさせるパーフェクトフェイスには及ばない。

あの秘密はただの三次元。どんな美形だらうトイレに行く存在だ。

「よーし、今後は決して惑わされないぞ！」

握りこぶしで自分に言い聞かせていると、件の美形がカウンターに近づいてきた。

「いらっしゃいませ。何かお探しでしょうか？」

「うーん。近くで見ると着ている物も一流だし、ツクツクこの店に不似合いな客だ。冷やかしだらうか。

「一般的な『スプレ』は、どんなものでしょ？」

……うおうと。柔らかいテノール。これはエリック君（『星の数…』主人公の仲間その1、序盤で主人公の身代わりでルシフェル様の奴隸に…）の美声とちょっと似ている。

「…………し、失礼しました！ あの、服をお探しですか？」

一瞬美声に気を取られ、なんとも間抜けな受け答えをしてしまった。服屋で服以外の何を探す。

「はい。できれば、一般的なものから徐々に深いものまで、段階的に揃えたいのですが」

おおつと。この美形サン、初心者か。揃えるって、先ずは試しに一着でいいんじゃないの？

「そうですねえ…。お好きなキャラとか、ジャンルはござりますか？ 制服系なんかが最初はお勧めですけど」

そう言いながら、男子は皆大好き、SFロボットアニメ金字塔の軍服「一ナード」に向かおうとすると。

「あ、いえ。私ではなく、女性用のものを」

美形サンが手を振った。

……え？

…………彼女サンか！！ 外で待ってる彼女サンに着せるのか！？！

表のディスプレイに見入っている彼女サンに目を向ける。顔は良く見えないけど、可愛らしげにシフォンのワンピースだ。きっと顔も可愛いに違いない。

ディスプレイのプレートアーマーは2m近くあるから、比較して、彼女サンの身長は160cm弱だ。スタイルもよきやうで、コレはお勧めし甲斐があるということなのだ。

「プレゼントですか？ イベント用でしょうか。それとも……？」

お一人でお楽しみ用？ とは、あんまりあかりさまには聞けないけどさ。

「ああ。まあ、そのような物です」

「ひやあ肯定したよ臆面も無く頷いたよ彼氏がこんだけ惚気てたら彼女サンだつて恥ずかしいじゃん闇のことは秘事だつて…！」

つい、頬が緩みそうになるのを頑張つて引き締めてるナビ、成功してるだろうか。ニヨニヨしちゃってる気がする。

「やうですねー。ドは、こちらの制服はいかがでしょう。一昔前にはやつたアニメの制服ですが、根強い人気がござります」

襟のリボンはいろんな用途に使えるしね！

ふむ、と美形サンは頷いた。

「他にも、……こちらは今一押しの深夜アニメで、こちらは個人的に最高峰！の美少女アニメのヒロインの制服デザインで、……あとコレも、ゲームの人気はさほどではありませんでしたが制服が可愛いので、実際に着てみると楽しいかもしだせん」

「18禁Hロゲだけあって着崩れやすいデザインもお勧めポイントだ。

ふむふむ、と美形サンが感心している。

「後は、ですねー。こちらのコーナーは和装っぽいデザインのものがございます。やっぱり巫女さんは定番！ですし、くノ一コスもござります。コレは忍者アニメの定番で夏向きですね、鉢巻はあちらに各種ござります。それに、今店頭には置いていませんがお姫様系もカタログでご注文いただけますよ。あ、メイド服はあちらです。……あとはー、ファンタジーのアニメやゲームのキャラは、キャラも

種類も雑多で自作する人が多いので、アクセサリー系は取り扱っておりますが、完成の服は、多くはありません」

残念だ。この美形サンが邪神の神官コスで彼女サンが生贊の村娘役なら、そりゃー盛り上がりしちゃうだろっ!。

「ナースはピンクが一押しです!」

「婦警さんセシィはおもちゃの手錠つきです!..」

「あ、「レを忘れちやいけない、スクール水着! ちゃんと名札も別売りで」

「猫耳! しつぽ!..」

「コレがあれば猛獸使いも女王様も!」

……ちょっと、いや、かなり暴走した、と自分でも思つ。けど、お勧めしたほとんどをお買い上げになった美形サンは、滅茶苦茶オツトコマエだった! 清清しい漢だ! !

「これで向こう一年は飽きることが無いんじゃないだろうか。

やつべー、「レ、彼女サンも初心者だらう!」。

まさかチョーキョーされちやうのかな。逃げてーー! 彼女サン超逃げてーー! ! (笑)

しかし、本田の売り上げ計算が楽しみだ。いい仕事したな自分！

あ、でも宣伝のためにコレだけは書いておきたい。

当店は、アダルトグッズ販売店ではございませんですよ。あくまでコスチュームプレイに特化した服飾店です。

……ええと、誰に向かって言い訳してるんだ自分？

……どうしてこうなった。

泣きたい。マジで泣きたい。つづーか涙目になつてゐる。

目の前の地獄絵図からなんとしても逃れたい。なのに、ヘンタイ大作家先生サマがそれを許してくれない。

会場は空調もちゃんと効いている。なのにこの暑苦しさ、息苦しさ、不快指数の高さはなんなんだ。

ステージ上では、ボディビルの全国大会とやらが行われております。

「…………あの。なんでこんなモノを見物にきたんでしょうか」

客席にも、ダンベルがお友達みたいな人たちがいつぱいだ。

三番目のための取材です、と連れ出された記憶がある。今朝の話だ。遠い昔のような気が。いや、気が遠くなつてるんだ。

「ですから、取材です。次作は、ボディビルを題材に……」

「のあおおおおおおーー！」

叫んだ。叫びましたよマジ。』

「なに考へてるんですかラノベでショウライトノベルでショウライ
トって軽いって意味じゃないんですか軽い読み物なんでしょうなん
だつてこんな重苦しいもの持つてくるんですかありえないありえない
いですよ読み物つて読む人あつてのものじやないですか誰も読みま
せんつて信じられなーい！！！」

本氣で、大作家先生サマの胸倉掴んで訴えた。

「なにが許せないってあのナルナルした筋肉ダルマ！ オイリーに
光る小麦色の肌！！ 齒が命なのは芸能人だけで充分だろキラリン
口元！！！ あんな連中みんな脳内麻薬中毒なんですよ超人なんで
すよ人間超えちゃってるんですよ！！！」

会場内でこの暴言は流石に拙いと思ったのか、先生はあたしを引
っ張つてロビーに出た。

「そんなんに嫌ですか？」

涙目の訴えに、大作家先生も多少は思つところがあつたみたいだ。

「嫌です！ 鳥肌がホラ！」

なにが嫌つて不自然なムツキムキのマツチヨが胡乱な笑顔で決め
ポーズとか、そんなのそつちの倒錯した趣味の人だけで充分だ！！

「もお生理的にダメなんですトカゲや蛇や蛙が嫌われるのと同レベ
ルで嫌悪感です両生類や爬虫類と分かり合えますかいえ無理です
人との間には越えられない越えちゃいけない高くて分厚い壁がある
んです」

「ほう」

腕のトリハダ突きつけてやれば、大作家先生サマは面白やうにブツブツを見やる。

「なにが『ほう』ですかフクロウじゃないですよチキンですチックンとにかくあたし無理駄目あんな美しくないモン描けと言われても描けないあんなモン描く位なら大作家先生サマのヌードデッサンのほうがなんぼかマシ……」

「……ほう」

先生サマの声が僅かに低くなつたけど、気温もちょっと下がつたけど、今はそんなん問題じやない。

「なんでも描くから筋肉ダルマは勘弁して！ あんな人体の美を勘違いした不自然な物体なんで描かなきやならないのあんな益体も無い筋肉に価値は無い！！！」

コレだけは譲れない。誰にだって一つや二つ触れちゃいけないブラックボックスがあるんだ。

「……ふむ。 そんなに嫌なんですか」

「嫌です！ 超嫌です！！ ものす”ーく嫌です！！！ イヤとかいうレベル超えて無理です！！！！！」

涙目で訴えた。本氣で駄目なんだよ分かつてくれ先生。

「……ならば、是非、描いてください」

一ヤリ、と悪役の微笑で、変態避け面大作家先生サマが、言った。

#あさのこひこ（後書き）

作中の暴言は『あたし』がそれ通りでるところだけで、作者はボディビルに偏見はない……スマセーン。でも楽しくマッスルしていふ方々を誹謗中傷するつもりはないです。

あたしが本氣で拒否しているのに、マジ泣きなのに、大作家先生は訊いてもいない3作目について説明してくれやがった。

1作目は精神の、2作目は外見の、そして3作目が肉体の、『自己否定』とゆーコトらしい。

この3作目で自傷行為までも含めるから、2作目でピアスはNGだったのだとか。

ああそりですか。そんなりびつしてボディビルなんですか。ボディビルってむしろマッスル礼賛肉体サイコーじゃないのか。

「では、ジムに行つてみますか。ボディビルダーがどんな日常を過ごしているか。知れば認識が変わるでしょう」

この上ジムに行ってまでマッスルを見ると。

「先生。ホントにホンキで、マッスルなんですか？」

「当然本気です。ですが、主人公は筋骨隆々というわけではありませんよ」

え。

グズ、と鼻をすすりながら、変態逝け面大作家先生を見上げる。

「主人公はボディビルに憧れる女子中学生です。成長途中で鍛えたところで高が知れているでしょう」

…………卑く言って欲しかった。

「…………スマセンちょっと失礼します」

つづーかさ。今まだマッスル地獄と壁一枚隔てた会場ロビーなんだけどや。

「こんなところでマジ泣きのオンナと見てくれだけはイケメンがないや、注目浴びちゃうの当然だよね。

先生の言葉に一安心したら、周囲を見回す余裕ができた。そして興味津々な視線に気付いた。

先生に一言断つて、女子トイレに逃げ込んだ。

何たる不覚。大作家先生サマの前で無様に泣き出すとは。

手洗い場の鏡で見たら、なんとも情けない顔の自分がいる。

バシャバシャと勢い良く顔を洗つた。

氣を取り直して、氣合を入れ直して、ついでに化粧も直してトイレを出ると、ロビーの景色が一変していた。

会場内にいたはずの筋肉ダルマが、ロビーに溢れている。大会が終わったのか、それとも休憩か。とにかく筋肉のイモ洗いになつて

いる。

トイレから出られずに右往左往していると、女子トイレにも筋肉失礼、女性のボディビルダーさんがやつてきた。

……いるんだ。女人の人でもマッスルがいるんだ。盛り上がり始めた腕の筋肉。Tシャツの首がきつそうだよ僧帽筋。普通女子の胸は脂肪のはずだけソレはどう見ても大胸筋。その見事な大腿筋にミニスカートは……。

女子トイレも楽園ではなくなった。慌ててトイレを出る。が、そこの光景にひるんで足が動かない。

もし今、蜘蛛の糸が垂れてきたら。あたしは迷わず飛びついて登る。どんな頼りない糸だろうとの地獄から逃れられるなら。

「どうしました。遅いので様子を見に来たんですが

…………クモノイト。

……………びつじょう。先生に後光が。

華奢にさえ見える大作家先生サマは、まるで砂漠のオアシスだ。

比較対照がナニだと、たとえ変態でも逝け面でも、清涼剤となってしまう。なんて恐ろしい光景だ。

「先生。お願いです。出まじょう」

うつかり変態逝け面にときめかないうつじょ。

#あんなのあんな（ある意味問題アリ）です 読む前に深呼吸をお願いします先に謝ります

あたしがあまりにもげんなりしていたせいか、大作家先生はタクシेを呼んだ。

運転手さんに告げた地名は全く知らないけど、このまま帰らせてはくれないらしい。精神的疲労はピークだというのに。

車のエンジンの単調な振動と適度の冷房。うつかり、美大時代の忘却のかなたに追いやった記憶が。

「あれはあたしがまだピッヂピチの美大一年生だったとき」

「うなつたら、聞け！　あたしの恐怖体験を！－！」

コレを聞いてもなお、あたしにマッショを描かせる気になるかね？

油絵の具とか、アレコレ使う有機溶剤の鼻を突くにおいとか、ほこりとかカビとか、放置されたデッサン用の果物とか、いろんなモノが混ざった特殊な臭気漂う教室。

デッサン用の石膏像が無造作に乱雑に置かれていたり、製作途中のキャンバスが脇に寄せてあつたり、とにかく整理整頓とは程遠い空間だった。

基礎の「デッサン」では、毎回モデルさんが来て、ただひたすら素描を描いていた。速写クロッキとか、今でも悪夢に見るくらいだ。

そんな中で、頻繁に来るモデルさんのなかに、ボディビルダーがいた。

ノリノリでポーズするし脱ぐのも嫌がらないし筋肉だし、「デッサンモデルとしてはありがたい存在だったが、如何せんナルちゃんだった。实物以上にカッコ良く描かないと臍を曲げるのだ。

なんとか、美大生にも問題があるのだが、モデルさんを対象物として見て、人間として尊重することを忘れるときがある。

何時間も裸のままポーズさせたり。他科の学生が窓やドアから覗いても放置したり。

女性のモデルさんが泣き出しちゃつたりする場面もあつたりして。だからそんな中、多少扱いが難しかろうと、むしろ喜んできてくれるモデルは貴重だった。

「しかしヤツがつ、あたしのマッスルへの嫌悪感を決定的なものにしたんです！」

もともとマッキムキの筋肉は苦手だったんだけど。

ある日、いつもの如く制限時間10分のクロッキーでクロッキーになっているときに、地震が起きた。割と大きい地震だった。後から確認したら震度は4だった。

学生は皆動かなかつた。疲れ果てて頭が鈍っていたのだ。壁際に積み上げられた石膏像とかが落っこちて割れても、皆何となくぼんやりしていた。教師ですら、動けないでいた。前日提出の課題があつたのも原因だ。

しかしそんな中、ただ一人瞬時に動いた人物がいた。ムキムキモデルである。

ヤツは、裸だといつのに、外に避難しようとした。ソレはいい。別に止めないし間違つていない。

だが、ヤツと出入口との直線上に、偶々、あたしがいた。

最短距離で脱出しようとしたマッチョは、箱いすに座つたままのあたしに衝突し、ふつ飛ばし、自分も無様に倒れた。

一瞬の意識の空白を経て気付いたときには、あたしの上に裸マッチョが馬乗りになつっていたわけだ。

しかしそんな状況下、あたしは見てしまつた。見えてしまつた。

……スッポンポンのヤツのナニが僅かに反応していることが。

その恐怖たるや、筆舌に尽くしがたい。

叫んだよ。力の限り叫んだよ。命の限りに泣き喚いたよ。母親の

胎内から生まれ出でた時よりも魂の叫びだつたと確信している。

瞬間にヤツの股間を力の限り蹴り上げたことは、正当防衛だ。

友達の女子は皆同情してくれて、恐怖を分かち合ってくれた。しかし教師をはじめとする男性陣は、オトコのセイリは不随意だとか抜かしやがって、むしろケダモノマッチョの肩を持つ。その時股間を押さえて蹲るマッチョからの発言は無かつた。

その後の、女子の授業ボイコットやら、男女クラス別化運動やら、学年学部を越えての大騒動に至る発端となつた。

……聞くも涙、語るも涙の物語、その被害者たるあたしの心の傷は如何に深いか！

「わかりますか、男の先生にわかりますかあの恐怖が！！ 分からないなら一回ムキムキマッチョに押し倒されてくださいこの恐怖を実感してください……！」

話しているうちにエキサイトして、また涙が。

大作家先生は、なんとも微妙な顔で、詰め寄るあたしから目を逸らした。

所詮貴様も遺伝子XY、マッチョの味方か。ヤツを擁護することにするなら、それなりの覚悟をすることだ！

どんな言葉が、と身構えていると。

お約束のボケは、イタかつた。痛すぎた。

ターゲットの先生は平然としているのに、誤爆で耐性の無い通りすがりの運転手さんに致命傷を与えたらしい。

「ゴホン。運転手さん、ちょっとしたジョークですから。ちゃんと分かってます。今更そんな」

運転手さん、ごめんなさい。

イロイロ「めんなさい。

心底反省してる。このとおりだ。

「あ、あの、降ります。ね、先生、降りましょ、口々で今すぐ！」

大作家先生の腕引っ張つて、無理やり降りた。

大作家先生がお金出して、釣りはいらない、と言っていたが、運転手さんお金受け取る気力すらなさそうだった。とりあえず助手席に5千円札放り投げて、その場を可及的速やかに後にした。

降りてそのままずんずん歩く。

もー恥ずかしすぎる。

成り行きで見ず知らずの運転手さん【今まで暗黒の思い出を晒してしまったじゃないか。

大体あの運転手さんもずっと空氣に徹してたのに、なんであそこでリアクションするかな。

「エリに向かっているんですか」

空氣なら最後まで空氣で居てくれればいいのに、もしくは途中からでも存在主張してくれればいいのに。

「道、わかつてぃます?」

そしたらあたしだってあんな体張つたボケしないよ。

「いい加減止まつませんか?」

あれ、笑つてたよね、絶対笑つてたよね、運転できないくらいクリティカルしちゃったんだよね。

「……」のまま突き進むと、ホテル街ですが

もーあのタクシー乗れない、いや、あの運転手さんには一度とめぐり合わないだろうけど。

「子供の作り方、教えて欲しいんですか？」

ちょ、うつさいな、なに不穏な」と言つてんだよ大作家先生サマは。

「…………て、え？」

ええ？ なにか不穏なこと抜かしやがりましたか大作家先生サマ！？

「ああ。やつと止まりましたね」

明るい太陽の下、爽やかに似非紳士スマイルだ。

「」の際あなたの人格的成長を願つて生命の神秘を教えることもやぶさかではありませんが、ソレはともかく、駅は、あっちです」

……あたし、絶対忍耐強くなつたよ。滅茶苦茶スルースキル鍛えられたよ。

そのヤバい発言は聞かなかつた！ そして今の進行方向から120。くらいの斜め後方が駅だと示されても大人しく方向転換する。

「……早く駅向かいましょ」

もういいから。イロイロ「めんなさい」。あたしが悪いよあたしが悪いんだよ、謝るからさ。

もーやつさのことは無かったことにして、次行こうよ。

「いっちです。大通りに出れば、直ぐに駅ですから」

あたしの気持ちを汲んでくれたのか、大作家先生は、普通に道案内してくれた。

「……しかし見事な自爆でしたね。感心しました」

……時間差でキタ！！

「自爆しないです！！ あれは運転手さん誤爆しちゃっただけです！！ 大体先生が大人しく爆撃されてくれないのがいけないんです！！」

「想定内ですか？」

平然と仰る。

「ちょ、なんでそんなことまで予測済み？ 先生頭の中どうなってるんですか？」

「お花畠でないことは確かです」

「どーゆー意味！？」

「生物多様性を痛感しています」

ちよ、なんか小難しい」と言つて誤魔化そうとしてるー。.

「あなたにも分かりやすく簡単に言ひつい、『あなたを見ていると面白』」

「簡単に言ひすきだそれー!?

『あやあやあわめいている間に、駅についた。

大作家先生サマがさらりとあたしの分も切符買ってくれて、あたしは更なる自爆をしないよう、黙った。

大人しく、お行儀良く、一人で地下鉄乗つて。

結構混んでたけど、一人揃つて車両の中ほどに座れた。

ほつと一息ついたところで、先生サマが厳かに仰つた。

「先ほどあなたは、『わかりますか、男の先生にわかりますかあの恐怖が…！ 分からないなら一回ムキムキマッチョに押し倒されぐださーー』の恐怖を実感してください…』といいましたが」

「わざやあ。エキサイトしてるときの音葉つて、頭冷えてから聞かされるとちよつとな。

あ、先生の隣に座つてゐる学生さん、おもむろに音楽プレーヤー弄らなくとも。

「その恐怖なら、リアルに分かります。恐らくあなた以上の恐怖だつたと思いますが」

え？

「ええ？ ちょ、先生そんなこと張り合わないで下さいよ、先生がそんな……そんな、じょ、じょーきょーに、……まさか…？」

「やられてません。未遂です」

「えええええええ…？」

あ、前のつり革の〇〇をさ、お皿めが落つたりやつですよ。

「あなたの場合は、事故でしょ。それはあなたも分かっていると思いますが。偶々不幸なアクシデントだつた。その上で、事故だけ恐怖だつた、その気持ちを男性陣から否定されたからトライマになつたのではないですか？ その時悶絶していたモデルが即座に非を認めて謝つたとしたらどうです？ 悪いことをしたと頭を下げられていたら、ここまで引きずつましたか？」

え？ ……確かに、あの時、悔しかつた。

何で男のヒトたちみんな、あつちの肩を持つのか。

事故だ、わざとじやない、じょうがない、なのに蹴飛ばすのはやりますが、と口々に言つた。

怖かつたのに。なのに皆、股間押されてるモデルを可哀相だと底つた。

「まあ、その状況で状態で、彼は到底謝れなかつただらうとも思いますが……。とにかく事故であれ何であれ、押さえ込まれることが怖いところその心境は、分かります。だから否定などしません。共感します」

……。

何となく、気持ちが、軽くなつたよつな……。

「……私の場合、あれは、まだ一冊ほど本が出て、でも全く売れな

い時期のことでした……」

え？

先生、なにやら苦渋の聲音で、語り始めた。

『emergency emergency!! 読者様に、特に男性の読者様にお知らせです!! この先の先生の語りに不穏なものを探し取つた方は直ちにブラウザを閉じることをお勧めいたします!!』

当時、まだ全く無名で、風呂無しトイレ共同の狭い下宿にいた大作家先生は、近所というには少し遠い銭湯に通つていたそう。

昔ながらのオバちゃんが切り盛りする銭湯で、でも近くに繁華街があつて、酒に酔つた客が入湯を断られたり、刺青の客がいたり、それなりにイザコザもあるような所だった。

だから先生は、自由業の強みで毎晩の空いてる時間に通つうつにしていた。

やうすると、もともと地元の客が多い銭湯のこと、顔見知りも多少はできる。良く顔をあわせるなかに、ガテン系のオッサンがいた。

深夜から早朝にかけて現場で働いて、ひと風呂浴びてから帰るのが日課だったらしい。

え。なんかそれなりに混んでいたはずの車両が、微妙にこの付近、空いてないですか。

あれ？なんかみんな息詰めてる気配？

とある口。

いつものように先生が銭湯に行くと、偶々他のお客さんが全然いなかつた。男湯には例のガテンのオッサンと先生だけだった。

「……せ、せんせー…？　あ、あの、ですね…？　ちよ、そこいらで

「でも、当時私は、この顔ですから女性にはそこもてていましが、オトコにまでそう言う田舎見られことは無かつたんです。だから油断していました」

続行しないでくださいよ、あたしの隣の人、席立っちゃいましたよー？

銭湯のマナーに則つて、先生は、先ず洗い場で頭と体を洗つた。

すると、他がガラガラにも関わらず、ガテンのオッサンが隣に来た。

「や、やめましょう先生。ほ、ほら、電車つて、密室なんですよ、密閉空間なんですよ？ ミナサン、次の駅まで降りられないんですよ！？」

「それでも私は気付いていなかつたんです。話し好きな人もいますからね。世間話でもしたいのかと、適当に相槌をうつて相手していました」

「先生！ この状況にも気付いてください、先生を中心に半径一メートル、危険地帯になります！！

次の駅、まだなの！？ ちょっと区間長くない！？

頭と体を洗い終えて、先生が湯船に向かおうとした、その時。
なぜか足元に石鹼が。

すつてーん、とすつ転ぶ先生。

あいてて、頭打った、何でこんな所に石鹼が。

おい、大丈夫か兄ちゃん。

あ、ビックリ親切！」

いやいやこいつは。

(中略 でも大丈夫)

(中略 まだ大丈夫)

(中略 ギリ大丈夫?)

……。

「先生、タクシーは運転手さんお一人ですけど、電車だと他のお客さんいっぴいんです。誤爆が恐ろしい被害です、クラスター爆弾です」

笛を見据えて話し続ける先生は、懇願も聞いたやくれない。

「これは駄目かと諦めかけたとき……」

諦めかけたとき……？ ビックリした、どうなったんだ！！

ピシュー、『お出口は右側～右側ですか～ お乗換えは……』

え！？ 駅！？

やつた、駅だ！ みんな降りて！ 逃げ出して……！

なのに、誰一人動こうとしない。どうして？ 石化？

……いや、顛末を最後まで聞かないと逆に怖くて降りられないんだ！

聞くのも怖い聞かないのも怖い！ なんてホラー……！

何も知らずに乗り込んじゃったお密さんごめんなさい……！

『ドアが～閉まります』

「せ、先生……？」

「これは駄目かと諦めかけたとき……」

まわかのリペートお……！

いや、この流れなら、救いの手が差し伸べられるはず……！

「圧し掛かっていたオトコの体がグラリと……

救いの手は現れた。

デッキブラシ持った番台のオバちゃんだった。

「大丈夫かい！？」

その手のテッキブラシで、見事ガテン^{モンスター}系オツサンを成敗して、先^お_{姫様}^{勇者の剣}生を救出してくれた。

オバちゃんブラボー！ ハラシヨーー！ アンタがタイシヨー！
！！

どいつも無く、というか、車両中から、安堵のため息が。

「全く、前にもこいつひどく懲らしめてやつたのに、まだ懲りてないのかい！ もうアンタは出入禁止だ！ アタシの目の黒いうちは、一度と暖簾をくぐらせやしないよ！」

そう言つて、オバちゃんは男を蹴り飛ばした。強い。

前にも。

そうなのだ。このオトコ、痴漢行為の常習犯だった。そんならむしろ警察に突き出してほしい。

先生はふらふらになりながらも、オバちゃんにお礼を述べた。

すると、オバちゃんは豪快に言い放つた。

「アンタもねえ。そんな顔でのクズの好みにばつちり当てはまつ
ちゃつたんだねえ。そんな華奢なナリしてちゃ襲つてくださいと言
わんばかりじやないか。アツハツハ！ キレーな顔しちゃつて、ア
タシも若かつたらお願ひしたいね！」

アイタタター……

車両内、心は一つだった。先生除く。

「ひいつとき、なんて声かけたらいいんだろうか。

慰める？

なんて？

むしろ古傷抉つちやつたらどうしたら……？

「せ、先生。あの……」

沈痛に顔を伏せていた先生は、ふうー、と深々と息を吐いた。

「……ですから、私は、この体験を最大限生かそうと考えたんですよ」

はい？

「文筆業なんてね。身を削つてナンボ、自分ネタなんか切り売りしてナンボです」

へ？

「あの遺る瀬無さをぶつけた三作目が賞をとつて、おかげさまで風呂付のアパートに引っ越すことができました」

ええ？

「作品として昇華したため、私は変にトラウマになる」とも無く、むしろステップアップできたという説です」

あの出来事には、今や感謝さえしています。

……などと晴れ晴れと先生は仰った。

えええ～！？

車両内、今みんな目が点だ。」の一體感はナンなんだ。

「だってそうでしょう？ 賞を取るほどインスピレーションとモチベーション、根拠の無い矜持をそれと知らしめてくれたこともプラスです。以後は危険回避に気をつけるようになりましたしね」

ちよつ、あの、……ええ…ええええ～？

「ですから」

呆気にとられて言葉も無いあたしに、大作家先生は、厳かにのたまた。

「あなたも、是非、描くべきです」

……なんでそーなる？ ……？

「これから行くジムは、去年の全国大会優勝者が所属しているところですよ」

「え」

言われた言葉を理解するのに数秒かかった。

血の気が引く、って、『ういつ』ことだ。

「大丈夫です。私が一緒にですから」

にこやかに駄目押しする先生。

「大丈夫に聞こえない。先生が一緒に逃げ出せない」と脳内変換される。

「……せ、先生、あの、あ、あたし、お、お腹、お腹痛い、アイタタタ、ほんとーに痛い、痛いからこいで失礼しますっ！！！」

我ながらわざとらしい。でも本気でお腹痛いような気もする。

「そうですか。ではちょっと次の駅ですから、ジムのほうで少し休ませてもらいますか？」

そりや、こんな見え見えの言い訳が通用するはずも無いけれど。

「いえそんなご迷惑をおかけするわけにはいきません、アタシならダイジョウブです一人で帰ります帰れますから」

そのまま連行されたらどんな地獄が……。

「具合の悪い女性を一人で帰すわけにはいきませんよ」

「」の似非紳士！！

「じゃ、じゃあ、ジムのまづは後日……」

お願い。お願いします！！

「いいえ。折角都合をつけてくれているんですからね」

一人で行け！！

「じゃ、や、やつぱりあたし」

一瞬でも先生に同情したあたしが馬鹿だった！！

「では、血井にボディビルダーを大勢呼んで取材しますか？」

うひいいい！！

「…………今行けば、もう絶対行かないでいいって、約束してください……」

白旗振ったあたしに、変態避け面大作家先生（受認定）が、爽やかに笑った。

「そうですね。必要なことがきちんと取材できれば

……うそ臭い笑顔だ。約束なんて破る気満々だ。つつか、一言も約束とかしてねえし。

逃げられないようにがつちりホールドされて駅に降りたとき、車両内から妙に生暖かい眼差しが。

#わんのなな

もつや。だいさつかせんせえサマはさ。ジブンネタきりうつするんなら、そのままびーえるのれーべるにてこううしたりどうかな。

脳筋ガテンと理屈屋物書きなんて、いかにもありますわうじやないか。本能だけで押せ押せの脳筋に、引きずられる理屈屋。

そしてびーえる界に新風を巻き起こすんだ。期待の大型新人！
衝撃の問題作！！

「……その場合、挿絵はあなたにお願いすることにしましょう」

あーじゃあ攻はせめてスポーツマンでお願いしますマッヂョは嫌です受はそりやもー美形に描いて差し上げますから。

……て。

あれ？ 心の声に、返事が？

「……てればしー……？」

「全部口に出しています。妄想も大概にしてください」

これから向かう先が、ナニなものですから。妄想に逃げるくらい許してください。

「……じゃあ、ワンコ系編集者攻と文筆業美形ドS様誘い受で」

大作家先生はぴたりと足を止めた。

「黙れ」

あらやだ逝け面。でも今はマッチョの恐怖に勝る物は無い。

「黙つたら行くの許してくれるんですか。マッチョは嫌マッチョは嫌」

あたしがへタれてたからか、イタイ妄想があまりにもだつたのか、先生は駅を出た先の「コーヒースタンドに立ち寄つてくれた。

フランペチーノとベーグルサンドを買つてくれたのは、黙らせようといつも論見だらうか。

「……そんなに駄目なんですか」

食欲なんかあるはずも無く、目の前に置かれた美味しいそなそれには手も伸ばさないあたしに、先生サマが言つ。

何を今更。嫌だ嫌だとアレだけ言つたじやないか。

「駄目です。本気で駄目です」

訴えれば聞き入れてくれるかもしない、という微かな期待にすがつた。

「大体ですね、ウエイトトレーニングとこいつのことは、ですよ」

「ココは、頑張つて理路整然と、訴えてみよつではないか！」

「本来、肉体を鍛えるといふのは、目的があると思つんですよ。スポーツ選手が鍛えるのは、競技のためでしょ。野球なら、サッカーなら、柔道なら、短距離ランナーなら、卓球なら、ジョッキーなら、ピアニストなら、パイロットなら、自衛隊なら、忍びなら、暗殺者なら、勇者なら。その競技によつて、どこを重点に鍛えるか、どうこいつトレーニングが必要なのか、いろいろ考え抜いて、その競技に適している体に仕上げるわけですよね」

競技じゃないのも混ざつた氣がするけど。

「ですが、ボディビルは、本末転倒なんですよ。何かのために鍛えるんじゃない、鍛えるためだけに鍛えるんです。おかしいでしょそんなの！ しかもその鍛え上げた体は、例えば腕をまっすぐ体に沿わせて下におろすこともできないんですよ、筋肉がじゃまして常に肘を張った状態になっちゃうんです、人体つてそういうものじやないのに！」

「ゴホン。理路整然、理路整然。

「ヒトの体といふものは、非常に精密に美しくできているとあたしは思つんです！ 造形もさることながら、その成長が凄いんです。先生の手なんかいい例です」

「コレは前から思つていた。先生の手は高ポイントだ。

「まつすぐすんなり伸びた指、手荒れ一つ無い綺麗な手ですけど、

指の腹が平らになつていて「ペンダ」「がくつきり」。肉体労働とか家事とかまるで無縁の物書きの手ですよ。ホントこのヒトは書くことだけに集中してるヒトなんだと分かります。ついでに上体の筋肉が全般的に薄いとか、先生肩こり酷いでしょ、肩こりからくる頭痛は尾を引きますよ。それに腰の内筋もうちょっと鍛えとかないと年とつてから腰痛酷くなります。あと腹直筋、先生便通悪いでしょ。便秘はいろんな体調不良の元になります。薔薇の湯のオバちゃんじやないですけど、あたしも先生はもう少し鍛えたほうが全体的に健康になるだろうと思います」

……あれ？ 話がズレた。

「それは置いといて、あたしの手だつて所々インク付いたペン刺して刺青になつちゃつてるのとか、消しゴム握りすぎて親指直角に反つちやうとか、左手の小指外側紙に押し当てる癖があるから硬くなつてるとか、全然綺麗な手じゃないけど、あたしはこの手気に入つてるんです。描く手ですから。そんな風に、体はその人その人で作られるんです。スポーツ選手だって体型見たら大体何やってる人かって予想が付くでしょう？ そう言う風に鍛え上げられた体なら、あたしだつてカッコいいと思います」

先生聞いてる？ ちゃんと、一生懸命話してるんだよあたし。

「でも！ ボディビルは、その名の通り、ぼでいをびるでいんぐしちゃうんですよ。鍛えることだけが目的なんですよ！ 目的と手段がおかしいんですよ！ そんでもつて作り上げたその筋肉でやることは、たかが震度4で自分が逃げ出すだけ！！ ナルナルとポーズして自己満足！！ オリンピックは何のためにあるんですか！！」

……イカンいかん。エキサイトしちゃ駄目だ。理路整然。

「なので、あたしは、ボティビルといつもののがですね、全く！ 理解できないわけです」

「どーだ！ 多少イロイロおかしいけど、言いたいことは言つたぞ！」

言い切つて、折角買つてもうらつたフラペチーノに手を伸ばした。全部とけきつていた。

先生は、沈思黙考の彫像だ。

はあ。珍しく頑張つてしまつたからお腹すいた。生ハムとクリームチーズのベーグルサンド。先生のチョイスは外さないな。

しかしベーグルサンドって、顎が疲れるよね。会話しながら食べられる物じゃない。

あたしの言葉を咀嚼しているらしい先生と、ベーグルサンド咀嚼しているあたしと。

賑やかなコーヒーستانド。有線の軽妙なロッの声が上滑りしているなあ。

ただの薄味アイスコーヒーとなつたフラペチーノを最後まで飲んで、『じゅわじゅわ』ました、と手を合わせた。

「……先生。そろそろ帰つてきてください。」

そのまま、コーヒー スタンドで 2 時間が経過した。

……その間、あたしは、一回お手洗いに席を立ち、自分用にキャラメルマキアート、先生にも一応形ばかりはブレンズを買って、どうせ飲まないで冷めちゃうんだろうなと思いつつもミルクと砂糖を勝手に投入して彫像にお供えし、キャラメルマキアートを飲み干し、携帯用の小さいスケブに沈思黙考の彫像をスケッチし、通りかかりの店員さんに絵を褒められ、じゃあコレアゲマスと先生の絵を勝手に譲り渡して狭い店内長時間テーブルに居座っちゃう罪悪感を解消して、店員さんにお冷とお絞りサービスしてもらひつて、冷めたコーヒーもスケッチし、先生の手だけもスケッチし、顔だけのスケッチしたらまた店員さんがチョロチョロ覗いていたので二割増美形に描いた先生の肖像を進呈し、アイスになつたお供えのコーヒーを勝手に頂いて、再びお手洗いに行って戻つてきたら、先生が正気に戻つた。

「お帰りなさい。思考の迷路は脱しましたか」

なんとゆーか、あたしもかなり大作家先生に慣れたな。

「はい。有意義な時間でした」

先生。ジムのこと忘れてるといいな。

「それは何よりです。では時間も経ちましたし、お店出ましょ。とりあえず駅に」

「いえ、ジムに」

「……くつそう覚えてたよ！」

「……行くんですか」

「これは、やっぱり逃げられない、かなー……。

仕方ない。実際描かなきやならないとしても、主人公はマッスルじゃない女の子だ。背景に一匹一匹マッスルが紛れ込むくらいはどうにかこうにか。

ジムに行っちゃつたら、とりあえずマッスルは目に入らない、筋肉なんか透明人間。そこにいなものとしてスルー。自己暗示。

ダイジヨウブあたしは女優。握りこぶしで自分に言い聞かせる。見えない見えない。ダイジヨウブ。

……今直ぐ第三次世界大戦始まつたら、きっとあたし喜んじゃうな。ジムどころじゃないって。

「……種を明かしますと、今日は全国大会の開催日なんですよ。大会参加者なら当然先ほどの会場の方に行っていますし、同じジムの仲間も都合の付く限り応援に行っているでしょう。つまり今日ならば、ジムには受け付け程度にしか人がいないはずです」

明後日の方を眺めて、大作家先生が言ひ。……言ひ。

……え？

「……あなたほどではありますんが、私も別に好き好んでマッチョマンを見たいとは思いません。ええ。全く思いませんね。ですから、こういう日程にセッティングしたわけです」

……なんて言ったの？

「トレーニングマシーンなど一通りは知つておきたいので、取材は外せないのですが」

「つづーか。つまり、先生、自分も嫌だったの！？」

「先生、まさかあたしが嫌がってるの、面白がつてました…………？」

なんなの？ そう聞いつ」と？

「いいえ？ 面白くなんかありません。ですが、あなたは追い詰めた方がいい仕事をするので、まあ」

……『まあ』、ナンですか！

「実際、あなたのボディビルに対する認識は、かなり鋭いと思いました。手段が目的となってしまった、その辺りの矛盾は作中でも触れる予定です。先ほどの話を聞けば聞くほど、あなたには是非、『無駄な筋肉』を描いていただきたいと思いますよ」

楽しみです、と仰る大作家先生。

改めて、あたしは大作家先生の悪辣ぶりを思い知った。

当初の予定より遅い時間に訪れたジムは、ホントに閑散としていた。店番代わりにいたのが、こここの職員のトレーナーさん一人。
……一人でも充分暑苦しい人だ。

都内有数の設備とやらで、どうやって使うのかさっぱり分からない計測機器やらなにやら、モノモノしいマシーンがいっぱいだ。

先生は、案内してくれた中年のマッスル許容範囲ギリギリアウトなトレーナーさんと話し込んでいく。

「こんなもの見る機会はそうそう無いだろうから、あたしは一人写真を好き勝手に撮らせてもらつた。」

壁にマシーンの使い方の説明イラストとか張つてあるんだけど。参考にそれも写真撮つたけど。

……なんでこんなイラストまでマッチョで描く必要があるんだ。マッスル教か。

おひと。

先生が、なにせりマシーンに座り出します。

上からびり下りているバーのような物を引つ張るのです。

トレーナーさんが、万歳するポーズから肘を曲げて頭の後ろに手を下ろしている。先生がバーを持ったまま同じように手を下げた。

ガッション、と、ワイヤーでつながった錘が上下した。

なるほど。やっぱり動かしているところを見ないとな。

これはココの筋肉を意識してください、とか。トレーナーさんが解説している。

そしてまたポーズを変えて、ガッション。

ホウホウ、総合マシーンとやらは、コレだけでいろいろな運動ができるようになっているんですね。なるほど。

先生が姿勢を変えて、今度は足にフックを引っ掛けている。

ガッション。

へえええー。ですが、機能性を追及する日本人。一台で30通り以上のやり方があるんですか。

…………ところで、先生。さつきから一番軽い錘だけしか動いてないですよね。いや、先生がマッチョになつたら困りますけど。

「……ついでに家でできる腰の内筋鍛える運動教えてもらつたらいいかがでしょつか。腰痛対策に」

先生、書き始めると本当に机にかじりつきだしね。腰痛とかヘルニアとか心配した方がいいよねきっと。お腹回り鍛えると便秘も改

善するんだよ。後は食事だけだ。

……ちなみにあたしは、椅子がわりにバランスボールを愛用している。あの不安定なものにのっかり続けるのは結構筋肉使うのだ。あたしも一時期腰痛に悩まされ、先輩漫画家さんのお勧めで試してみたら、あらびっくり効くじゃん！とゆー。インドアな職業の方に耳寄り情報だ。酷くなつた腰痛には逆効果なのでその場合は病院に行つて下さい。

そんな健康情報を思い浮かべていると、トレーナーさんは、なにやら先生に耳打ちしていた。ニヤニヤと。先生が苦笑して首を振る。

「それ以外なら、「うにうストレッチも良いですよ。ゆっくり息を吐きながらしゃがんで、吸いながら戻る。7回5セシートを、毎日朝夕に」

と、トレーナーさんが珍妙なポーズで奇妙な動きを見せてくれたので、それも写真に撮つておいた。ラジオ体操第一の中にありそうな、変なポーズだ。

「まあ、ざつとは分かりました。あと、日常のことも伺いたいんですけどが」

「はいはい。聞いてますよ」

トレーナーさんは隅っここの休憩場所らしきベンチに案内して、いくつかのカタログとか缶とかを持つてきた。

「うわあ。プロテインとかいろいろ。

「食事とかね。参考までに、今回大会にエントリーしたメンバーの献立票がこれです。大会前のものがこっちで、これからは普段のものですね」

プリントアウトされた表には、カロリーや栄養素の細かい数字までぎっしり。とはじえ肝心のメニューはどういえば。

野菜とフルーツと玉子の丘畠と島のせせ畠、それに栄養剤とプロテイン。

……これが食事か。しかもこれ一食じゃなくて一日の分量なんだよ。

食材と薬物が横並びって、プロテインは食事なのか。このでつかり缶が一週間分って何の冗談だ。

「当然間食もしませんし、お茶の類も飲みませんよ。酒もやりません。水だけです」

トレーナーさんはなぜか鼻高々に胸を張った。

「ボディビルに必要なのは、自分を如何に追い込めるかという才能です」

……そりやね。確かにスポーツマンとか、追いかんだトレーニングするんだろうけどさ。

「ま、究極のマジですよ」

え。それ自分たちで言つたやうなんですか。

「あ、でも自分の肉体を苛めるつことはサドかな。まあ普通の人は中々理解できないよつですが」

……あれ。あたしそんなに態度に出してたかな。失礼しました。

カラカラと笑うトレーナーさんは、一般的にみんなそうですと事も無げに言つた。

「……じゃあ、なんでボディビルやつてるんですか」

あまりにも平然と云ひものだから、つい、不躾なことを聞いてしまつた。

「さあねえ。なんででしょうね。気が付いたらスクワットしてるような。『呼吸する』 = 『鍛える』みたいな」

……わつぱり理解不能だ。

「まあ、鍛えずにはいられないよつて生まれついたんですよ。でなあやこんな苦しこじとやつません」

「ああ」

ぽん、と先生が手を打つた。

「分かります。それは分かります。非常に」

えええええ！

なんで先生イキナリ理解示してるんですか！ 先生だつてマッち
ヨ見たくないつて言つてたくせに！！

「ありがとウザいました。非常に有意義なお話を聞けました。こ
れで、迷い無く書けます」

爽やかな笑顔でトーレーナーさんと握手なんかしてゐし。

「いいえ。じゅうじゅ。小説とかでボディビルのことを広く知つて
もううのも良いことだと思います。またいつでも来てください。：
…もつといふいろいろ教えて差し上げますよ」

最後だけこそひとと声を潜める意味はナンだらうな。あたしには
関係ない関係ない。不穏なものには触らずスルー。

……腰の内筋とか、言わなきやよかつた。小さな親切のつもりが、
巨大な迷惑を。

先生にびーえる妄想話ふつた罰が当たつたようだ。

主に精神的に疲労困憊で、ジムを辞した。

そりゃーもー、今日一日一生分のマッチョを見た気がする。でもこれからそのままマッチョを描かなきやならないんだよね……はあ。

駅までの道すがら、お仕事のためにも情報収集だ。

「先生。それで、今回はじめてお会いになる予定なんでしょうかボディビルに憧れる少女って、……想像できるか？　いや、世の中広いんだし実際いたら申し訳ないんだけど。

「お話をとおり、ボディビルに憧れて自分も鍛えよつとする少女が主人公です。家庭環境が複雑で、自分が女子であることを嫌悪している、という心理から、ボディビルに嵌るという設定ですね。肉体の否定といつも性の否定でしょうか」

「おおお。なるほど。その辺は分かります。分かりやすいです。そういうマッチスルが男っぽいものの象徴になるわけね。

「血口を否定して否定して、それでも否定できない自分を削りだすこと今まで追い込む予定です。……が、今日の話を聞いて、多少予定が変わりそうです」

へえええ。なるほどなるほど。

……で、絵のヒントは？

「自由に描いてください」

そー言われてもね、それこそ一番難しい注文なんだけどね。

「ええと。じゃあ、最初の家庭環境つて、どんな感じですか」

話す間に駅について、またしても何も言わずに先生が切符買ってくれる。

来るときの惨劇がちと脳裏をよぎる。いやいや、もうあんな最終兵器は出でこない、……はず。

今度は座れないくらいに混んでいた。ドア近くのつり革つかまって並んで立つ。

今、先生の半径2m以内に、人は5、6人だ。

あたしは盾になれませんから、最悪、隣の車両に逃げてください。お願いします。

先生は、来るときの悲劇なんか気付いてもいないよつて、普通に話を続行した。

「主人公の家庭は、片親ですよ。母親が家出して、父親と一人だけです」

ああ。

「小学生低学年で、母親に捨てられたと思い込んだら、まあ多少は性格も捻くれるでしょう。もともと勝気な性格なので弱みを晒すこともできない。必要以上に正義漢。幼稚な男子になんて負けたくない。自分がしつかりして父親の助けにならなければならない。自分に課すものが沢山ある。そのために強くならなければならないと思い込んでいる」

うんうん。

「しかし中学ともなれば男女の体格差というのが目に見えてくる。背の高さも力強さも」

分かる分かる。

「そこ」で、自分も鍛えなければならぬ、と考える

……。

「はい、先生。鍛えようと思いたつて、中学の部活にあるような運動じゃなくてボディビルにいく女子中学生は、いないと思つます」

「はい。分かっています。主人公とボディビルとの出会いは、なるべくインパクトのあるものにしたいと考えています」

にやり、と先生が笑う。ああ。もうなんか腹積もりがあるんですね。読者にサプライズですか。お金払って本読んでくれる人に、なんてことを。

「あれ？ ジャあ、その出来事のシーンって、挿絵はあります？」

「あつたまつがいいだらうと思ひますよ。是非描いて欲しいですね」

藤埜さんとも相談かな。実際文章書きあがつてからでも普通は間に合つんだし。間に合つよう進行してるはずだし。今回は先生前倒しに動いてるから実際の締め切りは大分先のはずだし。

「先生、それだけイメージはつきりしてゐるなら、あたし文章出来上がりから取り掛かつてもいいんじやないですか？」

「いえ。重要な脇役を、先に描いて欲しこと思つています」

脇役？ 今日は脇役にもスポット？

「どんな脇役？」

ナニその笑顔。

……悪寒が。

「震度4で逃げ出すボディビルダーです」

意識が飛んでいた。現実逃避とも言つ。

気が付いたら先生ン家の近所のお蕎麦屋さんだつた。

お蕎麦屋なのにカツカレーが超美味しきお店だ。

先生が天ざる一つ頼んでるといひで我に返つたわけで。

「あ、あたしカツカレー」

..... 食べ物が美味しいってのは重要だと思つんだ。

「...じゃあ、天ざる一つと、カツカレーを」

笑いを噛み殺しながらオーダー訂正する先生は、お店のオバちゃんも見ほれちゃうくらいだけどな！

「そんなんには騙されない。これは人の古傷抉るヅダ

自分に言い聞かせてみた。

「人聞きの悪い。古傷なんか堂々と晒せばいいと言つていいだけです」

鬼がいるよ。

「晒せりて。……やつぱり鬼畜な事言つてるし」

「克服したいなら正面から向かへばべだと書いてこるんです。今なら私もせばにこまよ」

.....。

先生。

今なんか、凄い台詞わざりと仰いましたか。

少女漫画的な。

「じゅやひ、あなたは問題に直面すると、一歩退く性質のようです」

え?

「身を退く、半歩下がる、顔を伏せる、目を背ける。体の重心が後ろに退くんです。そういう反応をする人物といつのは得てして、万事について逃げ腰だ」

ええ?

「積極的に物事にぶつかつていいく人間の反応は、顎を引く、身構える、見据える。常に前重心です」

.....。だつて。

「積極性といつものは成功体験の積み重ねですが、それ以上の失敗

を乗り越えた証左でもあります。失敗を失敗と思わず、立ち止まらず、方法を模索する。だからこそその結果です」

だからつて。

「ですから。今なら、私がいます。あなたが逃げ出そうとしたら、首に縄をかけてでも逃がしません。これを機会に、是非克服してください」

うへ?

「やつれと乗り越えてよつ良い物を描き上げるまで、許しませんか」

... ۱۵۰ ترازوی؟

「大丈夫ですよ。死ぬことはありませんし」

ありえないありえないありえないーい！！！

なんなの！なんなのこの無駄イケメン！！
一瞬トキメキかけた

この流れでこうクルか普通！！ ああ、変態逝け面大作家先生サ
では普通じゃない 全く普通じゃない

あ、カツカレーこっちです。天ざるそっち。

じゃあ、いただきます。

ヤケ食いじゃないよ。カツカレーが美味しいのがいけないんだよ。
決して何かを期待したわけじゃないんだから！！

一つのことに気を取られると、周りが見えなくなるタイプだ。と、自分でもやう思つ。

大失敗で痛感するつて、……人間、痛い目見ないと分からないつてことかな。

大作家先生のどうな指示を二の次にするなんて、我ながら後悔の「口のけすり出でこないよ。

アレから何年経ったのか。

忘却の彼方だと思つていた『震度4で逃げ出すボディビルダー』の面影は、描いてみればはつきりと思い出せた。

とゆーか、散々スケッチしたからね。

最早、手が覚えてる。……なんてことだ。

自分の画力に絶望する口が来るなんて。

どうして忘れていないんだ。忘れないと思っていたのに。忘れたと思っていたのに。

「若涵は後回しにしてください。顔と全身、ちゃんと描くよつ」「元より

センセイ。今あたし悲劇のヒロインな気分なんです。

この気持ちをネームにしたら、ひょっとして素晴らしい少女漫画がかかるかもしれません。

「それを現実逃避と言つんです。目の前の嫌なことから逃れようと、脳が勝手にほかの事を思考する。しかし、それが素晴らしいアイデアだと感じるのは、錯覚です」

「ひひひ……。ぐうの音も出やしない。

『S』変態逝け面大作家先生サマは、自分で宣言したとおり、あたしに思考すら逃げを許してくれなかつた。

そして強制されるままに手を動かせば、あやふやな所など欠片もない完璧な素描。

いつして見るとあのマッスル、全国大会に出場していた筋肉よりは劣つてゐるみたいだ。何となく、上体に比べて足の筋肉が弱いみたいだ。バランスが悪い。

……いやつ、マッスルの優劣なんて全く分からぬけどね――

「顔もきつちり描いてください」

先生サマ。

あたし先生に何かしましたか。

……いや、結構な態度だつた氣もしますけど、でも、ナンだつていつもあたしに関わるんですか。

絵か。

歯の矯正器具か。あれがあたしの敗因なのか。

今更時間を巻き戻せるはずもないしな。あのときの迂闊な自分を
どうにかしたいものだ。ドラえもん！

「現実逃避も大概になさい。そもそも、あの矯正器具のアイデアは、
敗因ではありません」

じゃあ何が悪かったっての。教えてくれたらうひょひくらタイムマ
シンでもヒッチハイクしてやり直すから。

「なら、生まれる前まで戻つて、母親の胎内から悟性と忍耐を拾つ
てきなさい」

……先生。舌鋒に容赦がありません。

「あなたに逃げる余地など『えな』こと言つたでしょ？

泣きたい。泣いていいですか。

「泣くのが喚くのが、やることは同じです。描け」

そんなこんなで、地獄の獄卒さながらのドリ逝け面に見張られて、何枚も何枚も、憎いアンチクショウの絵を描いた。

描いてると、あの頃の必死に描いてた自分を思い出す。制限時間10分地獄の速写とか。ちょっとでもデッサン狂つてると無言でスケブの右上にバツ描いてく講師とか。

とにかく、まともな技術身に付けたくて、頑張った。描きたいモノを描くために。

描きたいもの。

……つこんなマッショウが描きたいわけじゃないってのーー！

「なーにやつてんだろあたしつてば。」んなのナルナルしてるだけで美しくない、全くカッコいいなんて思えない」

イライラしてきた。

「大体ね、鍛えるつて、その筋肉有効活用しないでどうすんのよ」

ばき、と鉛筆の芯が折れた。

「その無駄なエネルギー青年海外協力隊にでも費やせつてのよ世のため人のために使えつてのよ」

さうだよ、自己満足だけで終わるようなモノに価値は無い！

「そんなもんに、どうしてあたしが煩わされなきゃならないんだ！」

折れた鉛筆先生に突きつけて宣言した。

「もーいいです！ 充分わかりました！！ このもんに煩わされる自分が馬鹿みたいですよ、丸めてポイです！ ポイ！！ この先マッチョだらうと筋肉ダルマだらうと人体標本だらうと平然と描きますよ描けます！」

大作家先生は、勝ち誇った顔で、頷いた。

「次は、教えられる前に自分で気付いて欲しいのです」

ピキ。

……馬鹿でスイマセンね！ でもあたしこんなネタもー無いし…！
次なんて無いし…！

くつやべ。

あのどいつの姿態避け面が、さあふんと画面を見てみたい。

とはいへ。

……どーしたものか。

今までに判断している先生の弱点は、パパラッチとマッシュチョだ。

うん。どんじょうもないね。

と、ゆーわけで。

他の弱点を探すことになります。

奥羽隆生観察日記。

初日。

朝。9時起床。起き抜けにコーヒーを一杯飲む。ブラック。かつてのスタイルックショガード入りコーヒーは相当なダメージを与えた

ていたんじゃないだろ？」「一度と同じ手は使えないだろ？」「

その後、書斎でお仕事。覗いたらすっげー目で邪魔つて言われた。

ムカ。

そのまま3時間籠る。

昼。散歩がてら昼食。今日は和食な気分だつたらしい。地鶏の照り焼き定食。

そのまま小一時間、公園や表通りを散策。美人さんの秋波は見事シャツトアットしたくせにティッシュ配りは3つも貰つてた。二つはあたしにくれた。……一つは自分用なのか。

帰つたら、先ずきつちりうがい手洗いして、また書斎にお籠り。

チラつと見えた感じ、先生は、アイデアを練つている段階ではほぼ脳内でのみアレコレ考へているらしい。書き始める前にざつとノートに大筋書き出して、後は原稿用紙だ。

……今どき、手書き。ポリシーなんだろうか。でも高級な万年筆とかは使つてない。普通のボールペン。

書斎に籠つてるとときは、お茶もコーヒーも飲まない。書斎には飲食物持ち込まないらしい。

夕。仕事がおしてゐみたいで、デリバリーのお惣菜屋さん。サラダ多め。一応栄養バランス考へてはいるのかな。でもその分量じゃ一日30品目には到底足りないけどな。せめて朝ごはん食べれば、もう少しバランス良くなりそうだけど。

『飯の後お風呂、で、また書斎。明け方まで筆つていたみたいだ。
付き合つてらんないからあたしは途中で寝た。

一〇月。

朝、10時起床。先生、一日25時間制なんだろうか。起き抜け
にコーヒー。ブラック。

そして書斎。

昼。ちゃんと12時に昼食。おしゃれなカフェ。でも食欲は無かつたらしい。ターキーのバケットサンドは、半分以上あたしの胃の中に消えた。コーヒーはおかわりしてた。一杯目にはミルク入れた。その後散歩。コースは決まってないみたいだ。昨日とは全然別方向。やつぱりティッシュ配りには引っかかっていた。

帰宅して、うがい手洗い、『一と二書斎。何がそんなに引っかかるのか、やつぱり筆は進んでないみたい。

夕。気分転換したいのか、外食。車でちょっと離れた海沿いの夜景が見えるおしゃれなレストラン。

しかし先生、こうこうと良く知ってるなー。いわゆる『テートスポート。

……別に、あたしに気を使つてこうこう連れてくれるような人じやないことは重々承知している。ってことは、自分が来たいトコ

に来てるんだりつな。

あたしはただのおまけ。だとすると、先生一人のときにも来てたんだろうか。

……皆さんにどんな田で見られていたのか非常に気になるところだ。うん、人目を気にする人じやないつてことも嫌つて程分かつてるけどね。

そして湾岸線グルッとまわって帰ってきた。ドライブしたかったのか。車内のBGMはテキトーなラジオ。音楽に拘りはないらしい。

そして帰宅。お風呂。書斎。そして多分明け方に就寝。

三日目

朝、11時起床。ブラックコーヒー。

今日はさつと部屋の掃除してからお昼。蕎麦屋。盛り蕎麦。常連さんにサービスって、サラダおまけしてくれた。オバちゃん、多分先生が野菜不足だと見抜いてる。

散歩は公園内をぐるぐる。でも帰り道にまたティッシュ二個ゲット。

帰宅してうがい手洗い。書斎。

夜、あたしが声かけるまで時間を忘れていたらしい。『飯はテリ
バリーデピザ。イヨイヨオシゴトセツバツマッテル？

お風呂。昨日一昨日よつも長め。湯船で寝たまま溺れてんじやないだろうかと心配になる頃出てきた。濡れた髪も乾かさずに、書斎。
……え？ トイレ？ もちろん何度も行つてるけど、流石にそこまでは記録しなこさ。こくらなんでも。便秘氣味だろ絶対、とか考
えてないデス。

……二日間の観察結果。

何とも収穫のないレポートだ。レポートとか、いつこの昔から下手だったんだよね。何書いていいのかわからない。

……弱点、このままで見つかるんだろうか。

無理っぽい気がする。

書斎に籠られちゃだつてしまつもないし。いまはあつとひの仕事片付けでもらわないと。

……よし。

スケッチブック片手に、書斎に突撃だ。

「先生！ 今回はナニに詰まつてるんですかー！」

ギロ、と睨まれたけど、口元で怯んだなるものか。

「書斎に籠つても、解決しないですー。一宿一飯の恩、返せせて貰おうじゃないですかー！」

一宿一飯どいつもじゃないけどね。恩つづーか強制だけどね。とにかく絵がイメージアップに役立つのなら、役立ててください。そして早く弱点を探させてください。

スケッチブックを掲げて、睨みあう事暫し。

「…………子供、です」

やつたぜ、先生が折れた！

「はいはー。男の子？ 女の子？ 何歳くらいですか。どんな感じで」

いそいそとスケッチブックを広げる。

オーダーは、素直な女の子。幼稚園くらい。転んで、泣くのを我慢。

おひおひ。なんだかありがちな。先生そんなシーン考えてるんですか。

「やつぱつやつ思こますか……」

ありがとうございます。

「今どきの子は、むしろ警戒心強いんじゃないですか。物騒な事件もあるし、保護者も注意してるでしょうから。むしろ通りすがりに声かけられたら誘拐犯扱いとか」

言いながら、いかにも誘拐されちゃうな可愛い女の子を描いてみる。親がたくさん手をかけて健康に綺麗に大事にされてるような。

髪はちゃんと結つてて、清潔な服。成長を見越して少し大きめ。靴も汚れたり踵潰れてたりしない。

「……ちょっと違いますね。元気よく駆け回つていそうな」

じゃあ、キュロットスカート。髪はポニーtail。

「習い事は、スイミング。前歯が一本抜けて生え変わる時期……って感じ?」

自転車は補助輪付き。でも、そろそろ外したいかなー。って頃かな。

子供用自転車に乗つてる女の子を描く。すきっ歯で大口開けて笑つてる。

「……もつ少し、ボーカッシュに」

んー、じゃあ、髪はショート。短パン。

膝小僧に絆創膏もサービスだ。

「お兄ちゃんがいるような？ そしたら服もお下がりかな。見た目、男の子に間違われちゃうくらいでいいですか」

んでも、頬の辺りに女の子らしさも残してみた。触りたくなるほっぺだ。

「…………元気良く駆けてきて、見知らぬ大人にぶつかって転んだとしたら、どうします？」

「この子が？」

「うーん。その大人が直ぐにごめんねと謝つて、立ち上がるのに手を貸せば、『大丈夫』って言うんじゃないですか？」

「不機嫌にいらまれたとしたら？」

「ほけつと突つ立つてるのが悪いんだ！とか？ 素直に、好意には好意を、悪意には悪意を返す感じで？」

ふむ、と先生が考え込む。

子供とぶつかって、睨んじゃうような大人か。

ふんふん、とそのシーンを描いてみた。

外だらうな。見通しの悪い角だらうか。それとも、建物から出てきたとかな。よし、お店のドアから出でたら、ドッカン。

軽い子供の方が転がっちゃって、ノーダメージでしかも睨んじやうくらいだから大柄な男の人かな。でも子供が脅えるほどには柄が

悪くない。子供慣れしてない独身男だな。そーすと、服とか無頓着でくたびれてる。無精ひげかもしけない。

子供が転んでも黙つて見下ろして、手もポケットに入れたまま。アオリの構図で子供田線の絵だな」。

勝手なイメージで描いてると、先生がじっとスケブ眺めてる。

「うーん。睨むつてゆーか、どつしていいか分からなくて固まつてる感じかな？ 大柄で無愛想、勘違いされやすいタイプ？」

ちよつと田元に困惑を足してみた。どーだ。

「……だから、なんですか?……」

「あ、スマセン。」注文は子供のまづですね

同じシーンを、今度は大人田線で描く。しりもちついちゃつた見た田男の子中身女の子。痛いけど我慢!つて顔。急いで、遊びに行く途中だったとしたら、ボールか何か持つてるかもだ。

うんうん。公園でお友達が待ってるんだね。ボール持つていく約束だから遅れたら大変だ。でも家でおやつ食べてたら遅くなっちゃつて慌ててたんだ。きっとお母さんの手作りおやつだ。ちよつと失敗作混じってる。

……よーし、じんな感じ?

先生に見せると、また、はあ、と頭を抱えた。

「そのシーン、密観も描いてください」

はいはい。じゃあ真横からの構図で。

さらさらと鉛筆を動かすのを、先生がじつと見ている。これで少しはオシゴト進むだろうか。

ゼヒ、さつさと天岩戸から出てきてください、そして弱点探しにあたしが付け入るスキをプリーズ。

「……これはなんですか」

ついに先生が、リビングにふらふらと出たきた。

そして落書きしてたスケッチブックを覗く。

「……牛乳好きの僧侶と寝起きのドラキュラと天照大神です」

全部先生モデルだけどね！

「……ふむ」

「うん。追求しないでください。

「コーヒー飲みますか」

「いいえ。自分でやります」

……やはりスタイルシユガーリー5本は大ダメージだったようだ。
先生は速攻断つた。

「で、お仕事終わつたんですか。編集さんとか来るんですか？」

なんかもうこのリビングのこのソファ、寝心地が気に入つてしま

つて、普段の落書きは大抵「」が定位置になっちゃったんだけどな。

「いいえ。散歩がてら、届けに行くつもりです」

「ああ。せうこうト「先生フシトワーカ軽いですよね。

「」の前の編集さんですか？」

あの前方不注意の。あの人にはちと顔合わせ、ひらい。先生が説明してなかつたら、多分盛大な誤解してるだろ？

「はい」

「お留守番します」

「駄目です」

「うわー、なんで駄目なんだよ。

「ついでに食事もしてきますよ。一々出直すのは一度手間です」

そんな手間は惜しむんだ……。

まあ、出版社まで行かないで外で待つてればいいか。先生が連れてってくれるご飯はいつも美味しいし。

……と、餌に釣られたことを、今後悔している。

うん。先生は届けに行くとは言つたけど、出版社までは言わなかつた。どこかで待ち合わせて可能性も当然あつたわけか。

駅近くのカフェで、あの編集さんと顔合わせひやつて、向こうもすっげー気まずそつな顔した。

普通にお茶飲みか時間調整かでカフェに入ったものと思い込んでいたあたしは、苺レアチーズケーキに今まさにフォークを差し入れよつとしていたところだった。

「い、今更、逃げらんない……。

「構わず食べていてください。直ぐ済みます」

先生。いくらなんでも、ちょっと礼儀といつものが。

先生は構わず編集さんに椅子を勧め、テーブルには妙な緊張感が漂つた。

「短編の原稿です。コレで、全部終了ですね」

「ありがとうございました。……それで、今後なんですが、……」

「申し訳ない。『J覧の通りですので、お話はまた後ほどに

にべもない。先生はスパッと話をぶつた切つた。

……先生。その編集さん、飲み物頼むびじりかお冷するきてないよ。カフェ入ってきて今まで一分経つてないよ。

あたしはダシにされたみたいだ。

……うまうま。この苺レアチーズケーキ、紅茶と良く合いますね。アーモンド風味のタルト缶って初めて食べました。先生は美味しい店良くじ存知だなー。

察するこ、この編集さんとの社とのお仕事はコレで終わらしこ。で、編集さんはせひとも次の仕事の話をしたい。でも先生は、今はそつちのお仕事を引き受けるつもりはないっぽい。はつきりすっぱり切り捨てないのは、とりあえず今のところは、だからか。

……うーん。

「うしお。あと一口でケーキ終わっちゃうよ。あたしは今時間を稼ぐべきかそれともさつひと食べ終わらせて席を立すべきか。

お皿を睨んでくると。

「美味しかったですか？」

不意打ちで先生が二つに話をするので、反射的に、力いっぱい頷いてしまった。

「すいーべー。」

そうしたら、先生サマが一コロと微笑まれました。あたしは学習した。この微笑は、危険信号だ。

「それは良かった。私にも味見させてください。」

と、フォーク持ったままのあたしの手をとつて、残り一口のケーキをブスリと口に放り込んだ。

「あ、ああーー！ あたしのケーキーー！」

最後の一 口なのにーーー。

「……少し甘すぎませんか

麿に付いた苺ジャム親指で拭いながら、先生が寸評を。

「紅茶と一緒にいただくのがいいことなんですよー！」

1Jのケーキへの海螺は許されんーー。

「ああ。やうですね。それなら

「そうですねじゃないですかーーのケーキーー！」

「では、また何かーー馳走しましょー。じつあえず、出来しちょーつか」
シレットは黙って、席を立つ。

……編集さん置き去りで。

「え？ でも

「行きましょー！」

……なんで腰に手を回すかな。距離が近すぎます。そしてその如

何にもな微笑みは誤解を量産しています。

わざと誤解をせんじよひつてんですか。

先生ほこのサブイボな芝居を、カフHを出でからもじまじく続けた。

「で、説明してくれるんですか？」

あたしは説明を求める権利があると思つけどね。

先生と一人で地下鉄つて、いやな思い出しかないな。一度あることは三度あるのかな。

今度は車両内空き空きだから、被害者はほとんぢないよー！

「見たとおりですよ。……あちらの仕事は当面請けたくなかったので、少し距離をおきたかったんです。ダシにして申し訳ない。ですが、中々上手くこきましたね」

上手くつて。先生は上手くやったと思こますけどね。

彼女にあまあまなラブラブ彼氏。基本、エスコート上手だし。見た目紳士だし。

問題は、彼女役があたしつて事だと思いますけどね。

つてゆーかわ。

「先生。あの編集さん、イロイロ誤解してると困りますけど」

「誤解させたんです。当面オソナに浮ついて仕事が手に付かないと思つて貰えれば上々ですね」

「うん、ソレはもうなんだけれど。でもね。

「あの。あたし、前に先生のトコでの編集さんと会つたじゃないですか」

「そういえばそれでしたね、と先生が頷く。

「その時、ですねー」

やつぱり誤解を招くようなことを、ですねー。

契約がどうとかいうとか言ったような気が。

あの時の発言と、今日の先生のベタ甘な態度と。

つなが合わせたらどんな誤解に発展するかなー……?

「先生。パパラッチ、お嫌いなんですね?」

嫌な予感しかしない。先生のみならずあたしもだ。

先生が三流写真週刊誌お嫌いなのは、自分がネタにされたことがあるから、だそつな。

確かに、著名な文学賞なんて「立派な肩書きとこのルックス、多少は話題になるだろう。しかし、それだけでもなかつた。

売れっ子作家ともなると、作品のメディア化とか当然そういうお話もあるわけです。先生には、例の問題の受賞作に映画化のお話がありましたとか。

出版社の意向とかアレコレいろいろあってお断りもできずに、さて企画ですいや、となつてから、問題が。

先生のお書きになるものは、はつきりキッパリ、エンターテインメント性に欠ける。人間の心理を深く抉る緻密で纖細な筆致は、映像化に向いていない。

監督にも演じる役者にも、そして多分視聴する側にも相当なレベルが要求されるだろうと、あたしでも想像できる。

なのに。

監督は痛快アクションムービーに実績をもつ中堅。主演俳優には話題作りのオーディションで抜擢された新人。原作にはないヒロイン役にモデル上がりのタレント女優。

先生サマはそりゃー憤慨なさつた。だらうな。作品滅茶苦茶にさ

れるのが目に見えている。

しかし出版社としてはメディア化はいい宣伝になるのだ。映画化作品と帯が付けば本屋では平台に山積み、公開間近ともなるとテレビでおおっぴらに宣伝できる。本の売り上げが桁違い。うつはうは。

んで先生サマも、一度は企画を了承してしまった以上これは仕方ない、と諦め半分納得しようとしたらしい。勉強になつた、今後は二度とこんな過ちを犯すまい、と。

しかし！ ジャジャーン！！ 更なる問題が！

映画化記念ぱーちーなんて最早ビーでもーいーやー、と、やる気無く、しかし無視することもできずに嫌々出席したら、ヒロインの女優さんが先生の美貌にノックアウト！！ 肉食系女子の猛アタック開始！！ 噙ぎ付けた記者さんが騒ぎ立てて、ハイ、巻頭カラー独占！！

その女優さんあたしも知つてる。あんな美人に言い寄られて振るつて先生どんだけ面食いなの、とか。自分に自信がなきゃこの美形な先生サマにはアタックできないよね、とか。フツー男の人的に、美人に言い寄られて悪い気はしないんじゃないかなー、とか。話のネタに、付き合っちゃつても良かつたんじゃね？とか。チラッと思つちゃつたけどさ。

出版社に抗議しても、誰だかバレバレだけど一応仮名、へらしい～ようだと憶測推測だらけの記事、名誉毀損には当たらないときともんだ。記事自体、主役は女優さんの方だしね。

んでも実際のパーティー会場で女優さんに付きまとわれてる先生サ

マの写真がばつちり使われていては、読む人がどう思うかなんて……そりやあなあ……ってことで、先生は大変困った事態に陥った。

そんな騒ぎの中、映画化のほうは先生サマにこひびく振られた女優さんが降板し、おかげでスケジュールが狂つて今度は監督が仕事押せ押せで撮影どころではなくなり、先生サマのあずかり知らぬところで、企画倒れとなつた。……なんつー杜撰なお話だらうか。

セキュリティの厳しいこのマンションに引っ越してきて、ゴシップなんぞ知らぬ存ぜぬを貫き、漸く最近になって先生の周囲が落ち着いたところだつたんだそうな。

そんな経緯で、先生サマは例の出版社とは距離を置きたかった。でもやっぱり出版大手だしイロイロつながりもあるし、はつきり敵にはまわしたくない、と。うーん、大人の都合つてやつだね！

……と、いづような説明を、藤埜さんから聞いた。

ことの元凶、大作家先生サマは、書斎でイロイロ電話を掛け捲っている。今後の対応に苦慮しているようだ。大体先生サマも迂闊なんだ、ダシにするならするで先に言ってくれれば、あたしだってコレコレこんなことがあつたのでそれは得策ではナイデスヨと感じたのに。

藤埜さんは、ライバル社と言つ以上に、その出版社には並々ならぬ恨みがあるようだ。金の亡者、作家を使い捨て、売り上げ第一、……後はなんだか、枕詞のように出版社名の前にマイナスの形容詞がアレコレくつつけていたのが大変印象に残りました。うん、

藤埜さんがどんだけソコ嫌いかは分かったから。あ、今更言つまでも無いけど、その出版社が例の前方不注意の編集さんトコです。

その「タタタ」のせいで先生サマがちょいと捻くれて業界に不信感持つちやつて、継続中のお仕事以外新規は断り続けるもんだから、今回名前変えてライトノベルつて企画も、ある意味リハビリつーか苦肉の策だつた。

有名萌え絵師こと「J」とベクビにしたのも、そういうナーバスな背景があつたから、先生の意向尊重が第一だつたんだつてさ。

今知らされる舞台裏。衝撃の真実。

そんなデリケートな状況下、おぼれる寸前で藁ことあたしが登場。うつかり先生サマの創作意欲刺激したもんだから、これは絶対逃がすな手放すな、とトップダウンの指令が出て、先生サマがいつでも直ぐ絵を描いてほしいという意向をポロリと漏らしたら、編集部一丸となつてあたしをカンヅメにする陰謀を企てた、と。

……黒幕は組織だつた。先生が主犯じやなかつた。いや、先生もコレ幸いと乗つかつた感はあるけどさ。事後従犯つてやつか。緒峯さんも一枚どじろじやなくかんでるっぽい。あたしの性格折込済みだ。

後はご存知の通り、押しに弱いあたしはあれよあれよと思つツボに陥つた。

そーゆー話聞かされた後で、おかげさまで先生も以前のように執筆できているようありますありがと「J」がこますとか。

最初っからダシにされてたんだ。

うつかり藤埜サン信用していたあたしつてば、どんだけ……。

「一先ず、様子見で」

書斎から出てきた先生サマは、開口一番、気の抜けることを言つた。

「ええー？ あんだけ人騒しといて、様子見？」

何なんだよ醜聞沙汰がどうとか言つてたのは。

「仕方ありません。今の時点で実際に何か記事になつたわけでもなし、芸能人でもない一作家と一般人女性がどうなると記事にする価値は低そうです」

そうか。悪い方にはばかり考えてたけど、大したことないのかもしない。だといいな。

「が、万が一のために、一応形ばかりは取り繕つておきましょう」

は。

なにをどうとつづくの。

「（）両親に挨拶に行きます。連絡してもらいますか

へ。

なにがどうしたやつなる？

あたしのおかーさんという人は、なんといつか、可愛い人だ。

実家の居間で、大作家先生サマを前にあたふたとお茶とケーキなんか出して、まああそつなー、それでなれ初めは？ なんて嬉しそうに話している。

先生サマも爽やかな笑顔で嘘八百、いつから先生とあたしがお付き合になんかしてゐるってゆーんですか。

説明してもらったし納得もしたけどね。

もし万が一記事になつたときに一番シヨックなのは両親だから、正式にちやんと交際してると先に語しておぐ。それなら記事になつても何かの誤解と思つてもらえるつてね。んで最悪の醜聞に仕立て上げられても、きちんととしたお付き合いですよと反論もできる。

理屈はわかるよ。……でも、他にもないお母さんを騙してゐるだし。お父さんまで騙すつもりだし。

「……んむつ、いいでしょお母さん！ そんなアレコレ聞かないでよー。」

先生もそこまで愛想振りまかなくてもいいじゃんか。その顔充分有効利用してゐるよ。

お母さんがお夕飯と一緒に、とか言い出す前に、何とか先生引つ

張つて居間の外に出た。

お父さんここまで遭遇させるのは嫌だ。お父さん前々から彼氏連れてきたら一発は覚悟しろって言つてる。むしろ手薬煉引いて待ち構えてるけど。

「一発ぐらー、甘んじて受けますよ。大事なお嬢さんでしょ」

「イヤイヤイヤ先生そんな漢前発言今全く必要ありません」

「.....必要でしょ?」

ホラ、と指差されて、居間のドアの隙間から覗く母親と田が合つた。

キラッキラしてゐし。ワックワクしてゐし。

「もお、この娘つたら恥ずかしがらないでいいのこー キヤ、お母さんが照れちやうわ!」

.....お父さん。このお母さんの暴走を止められるのはアナタだけです。

「おかーさん。とにかく、そんな訳で。あたしこそは仕事でこつち来ないけど、元気だから」

「私が責任を持つて、きちんと様子を見ます」

「先生余計な」と言わなくていいしー。

「こんな人がいてくれたらもうお母さん心配しなくていいわー。ちよつとほんやりな娘ですけど、よろしくお願ひしますね」

お母さん今アナタは愛娘を悪魔に売り渡しましたよーー。

「はい。いやらしく……自分は物書きの道を選んで親に勘当されましたから、……温かい家庭といつのは良いですね。少し羨ましい」

先生その鉄壁の猫胡散臭いことこの上ないからーー。

「まあああ

ホラお母さん口ロッヒと騙されてるー。

「いつでも遊びに来てくださいね！ 大歓迎よ！ あ、今度はすき焼きでもしましちゃうか、一人じゃ中々家庭料理も食べられないでしょ？ お庭でバーベキューなんていいかが？ 冬には鍋もいいわね！ む酒はいける口かしら？ お父さんの晩酌に付き合つてくれたら嬉しいわ」

「もーいいからー。じゃ、お母さん、もう行へね！ ま、先生もー！」

無理やり先生をぐいぐい押して玄関までがまた長い…。

「あ、これ持つていきなさいな。お母さんのビーフシチュー。ちゃんと器に移してチンするのよ？ これも。この前お料理教室で習つたの。梅シソのデレッシング。さっぱりしてなんにでも合つから。三食ちゃんと食べてね？ 面倒だからつけてご飯抜いたりしちゃ…」

「はいはこ分かった分かったありがと。じゃあまたねおかーさん！」

！」

玄関を出てからもまた…。

「あ、待って待って、これ今日焼いたパウンドケーキなんだけど」

「もーいーから…。じゃあねー！」

追いかけてくる声が無くなつて、ホッと息をつくと、先生サマがくすくす笑つてゐる。

「ああいう家庭で、いつも育つんですね。……お父様にも是非お会いしたかったのですが」

「どうこう意味だよ！」

「もう目的は済んだでしょ！　いいじゃないですかあたしのお母さんがどんなでも！　何なんですか先生あんな愛想振りまいちゃつて！　お母さんがタイプなら、残念ですけどあの両親未だにラブリーブですよ、娘のあたしが邪魔扱いされちゃうくらい」

「いえそれは。しかしあ父様は色々苦労なさつたのでは？」

だからどうこう意味をソレ。お父さんは未だに朝行つて来ますのチューしてくるくらいだ。お母さん前にすると鼻の下伸び切つてゐる。

「なるほど。夫婦のあるべき姿ですね。理想的な」

「もー子供が恥ずかしいほどのラブ・ラブ夫婦です。未だに恋愛中です。年甲斐も無く」

だからあんまり人に言いたくないんだ。恥ずかしい。

「そんな憎まれ口を。嫌いではないのでしょうか？ 素敵なご両親です」

……そりやね。恥ずかしいけど、嫌いなわけじゃないし。

「あんな素直な方を騙すのは心苦しいですね。…羨ましいと思つたのは本心ですよ」

「……変な記事が出なければいいんです。ソレを祈つてください」

ホントね。お母さん、先生のこと気に入っちゃってたんだから。これで実は…なんて、言える訳がない。

お母さんガツカリさせるのが一番嫌だなあ。

とか思つてたら、帰りに寄り道でキラキラしいお店に連れて行かれた。

店員さんが次々とお勧めをトレイに取つて見せてくれる。ダメだ。まばゆさに眩暈が。

「先生が選んでくれたのが良いです」

早々に戦線離脱した。セールストークとか催眠術だアレ。ドレもコレも素晴らしいお品物です。ハイ。うわっ！」のHンゲージリングなんて真剣に選ぶ気になれません。

お金出すの先生だし。先生が自分の嘘にいくら出すのかの問題だ。

……嘘のために婚約指輪までいらないと迷ひけどね、ひとつ一かじまでもやつむやつむしろ先生、後からビビツする氣だらうな。

よひよひと一歩下がつて眺めていたら、先生はハートにカットされたピンクサファイアのリングをお選びになりました。ああそう。周りには小粒のダイヤ。そりゃあこ立派な。あ、お値段は聞きたくありませんよ恐ろしい。

ハイハイ、指のサイズは9号です、どうこうわけかピッタリですか、お直しの必要がありますか。

「」のデザインは結婚指輪もお揃いである。一つ重ねると違った趣に、ほー、へー。

ええ？ なんで結婚指輪？ え？ なんでソレまで？ あ、セツトでお安く。違う、いらっしゃですから、むしろ不要ですからー。ちよ、先生そこには頷いちゃいけないトコじやー！

うえ？ 婚約指輪だつて内側にイーシャルなんか入れたら返品できぬじやないか、やりすぎじゃね？ 先生サマビ！」までもやるの？

「……私も、あのお母様には、非常に罪悪感を刺激されたところです」「

お店出でから、先生サマがボソッと仰った。

「口まで準備しておけば、確かに万が一の時にもお母さも安心ださう。」

うさ。ういのおかーさん最強かもしない。

#あなたのじゅうつな

上手いこと自分を騙せれば、この状況、少女漫画なシチュエーションなんだらうな。

美形の作家。同居。婚約指輪。更に逆境もスペースだらスキャンダル。

しかし現実はさう甘くないってことだ。

第一に、お互いがお互いを異性と見ていない。致命的だ。

この先どうあっても甘い展開は無い。ありえない。

現に今だつて、大作家先生サマは容赦なくマッチョの絵をこ所望だ。

うん。先生の書くものは、尊敬する。凄い。

けど人間としての大作家先生サマは、……なんつか、人間として、やはりちょっとしたな。24時間7日間付き合つにはメンドクサイ人種だと思うな。

つまりは、先生の才能に惚れても、人間性には惚れられない。いつも藤塙さんレベルで惚れ込んでやれば、人間性なんかどうでもよくなるのかもしない。

……やつぱりワソコ編集×美形D.S作……。

ゲイン、と脳天に衝撃が。

「…私もあなたの絵の才能は非常に評価しますよ。負けを認めたと言ひのは本気です。が、その妄想に付き合ひ気はありません」

そりや わうですねー！ あたしだつてリアルに先生と藤埜さんがピーだつたらちよつと引く。

「でも表向きフイアンセの頭、拳骨で殴るつて酷くないですか？」

「表向き婚約者でホモ妄想繰り広げるのは良いんですか？」

だからさ。克服したとはいえ、やつぱりマッシュチョは描いても楽しくは無いわけですよ。現実逃避ですよ。

「……じゃあ、口口であたしの友人の実話を」披露いたしましょうか」

ギロリと先生が睨むもんだから、手は動かしてるよ。んで口も動かすよ。

お友達のBちゃんは、イワコル隠れ腐女子だ。

見た目は、全然オタつぽくない。おしゃれに氣を使っていてスタイルもいい。そしてどっちかってーと肉食系だ。

そんなBちゃんが彼氏をゲトしました。

彼氏のこサンはちょっと地味田な草食系。しかしBちゃんの見る目は正しい。Bちゃんが少ーし見た目に手を加えるとあつという間に垢抜けた爽やかサンに変身した。

Bちゃんといつ素敵な彼女と、客観的にも平均以上の外見を手に入れ、こサンは自分に自信が付きました。

すると仕事も上手くいきます。ますます自分に自信が付きます。もう恥じることなくめ！

素敵な彼女は積極的であれこれリードしてくれます。エッチだつて上手で色々してくれちゃいます。こサンは何の苦労もなくいい気持ちにさせられるわけです。

何でもかんでも男が仕切んなきゃヘタレとか文句言つちひう他の女子とは違います。なんて素晴らしい彼女！

もつこサンはBちゃんの言ひなりです。彼女の言ひ方によつてすれば間違いない！コレは最早崇拜！！

……そこまでこサンを手懐けたBちゃんは、オモムロにいり切り出します。

『……ホンシトあなたって素直で従順で、理想の受だわ。ねえ、今度素敵な彼氏をゲットしてみない？ 僕様でドSな鬼畜攻。きっとあなたの隠された才能が開花するわ。私、一皮向けたあなたも見てみたい』

(「口で先生サマがそんな馬鹿な男がいるんですかと突っ込んだけど、実話だ）

もちろん、Bちゃんには鬼畜攻の心当たりがあるのです。

しかし、Cサンが途中で正氣に帰つて、断固拒否した。まあ当然だな。

Bちゃんは、それならもうアンタ用なしよ、とあっさり別れた。
…Bちゃん的には当然だな。

……Cサンがその後どうなったのかは知りません。草食系女子に癒されてるといいなと思います。子ウサギちゃんゲットが上手く行かなければ一次元に逃げ込むのが次善かもしれません。オンナはCりごりだと男に走つたら、ソレはそれでBちゃんの思ひ壘。

「……とまあ、男女間には、さまざまな悲劇喜劇が起につくるわけですよ」

「それが実話なら、Cが馬鹿すぎるのと、Bが酷すぎで恐ろしそぎます。時々女性が、男は女の気持ちが分かっていないと嘆きますが、女性だって男の内面を無視している」

「ですから男女間といつもの話、計り知れない溝があります。相互理解なんて幻想です。お互い想い合つてる男女でもそうなのに、ましてや偽りの婚約者の間で、たかがBし妄想ぐら」

「田歩讓つて脳内で止めるならまだしも、口に出すのは止めてください。地味にダメージです。おだましくて悪夢につながれやうです」

「薔薇の湯の出来事も糧となさる先生です。せつと男男間の壁も克服します」

「……あなた、そんなに私が嫌いですか」

「誰がそんな」と言つてるんですか。先生の作品は尊敬しています。先生の文才だけは尊重します。こんなDOS変態避け面とその場しおぎとはいえ婚約だなんてあたしの人生終わつたとか、考へてませんから」

「……それは、イケメンつてといりだけは評価していただいているんでしょうか」

「なに間抜けなこと言つてんだ大作家先生サマ。言葉は精確について自分で言つたじやん!」

「漢字です。逝け、画、です! 見るものに不幸を呼ぶシリツってことですか!」

「…………」の顔で色々苦労もしてきましたが、やつは評価は初めてです!」

「うん? 先生サマ自分の顔別に好きじゃないよね? 何をショックつけてるんだ?」

「万万が一の時には、責任を取ることもやぶさかでないと考えてい

たのですが……そこまで

「なんの話ですか？ とりあえずはとぼり冷めるまでは大人しくお仕事でしょう。ほり、できました」

小話を披露しているうちに、マッシュルの絵が完成。トレーニングマシーンでフツハツの図。

うん。良い現実逃避だった。あ、Bちゃんの話はマジだから。そ
ンヒロシク！

そんなこんなで半引き籠もりでオシゴト中。

藤埜さんが雑誌片手にやつてきました。

……ええ～？ そんな早く記事になるものなのかな。あ、でも新聞とかは前田のこと記事にしてるんだし。不可能じゃないのかな。
……などなどビビッていたら。

「とりあえず」の呪は大丈夫でした」

ですって。そんなら愚わせ振りに入ってくるな。

「やはり記事にする価値は低いといつことでしょう。しかし、穴埋め的にネタを確保していることも考えられます。じばりくは様子見が必要かと」

藤埜さんと先生が、難しい顔で今後について話し合っている。

……多分あたしも当事者だつ。なのに建設的な意見は期待できないと思われているのか、全く話に入れてもられない。

仕方ないので、『ゾンビとゾラキュラの深刻な相談』を描いてみたら結構ハマッた。ゾンビと僧侶はミスマッチだ。モンスターはモンスター同士相性がいいらしい。

『最近、右足が腐り始めたんですね。ドラキュラさん、^{エンバーミング}遺体処理の相談なんですが』

『ドレドレ、ああ、これは酷い。防腐液が足りなかつたんですね。一度腐り始めたらもう諦めるしかありませんよ。塩漬けにすると多少は長持ちしますが、その代わり干からびます』

「うん。深刻な相談だ。

出来上がりに満足して顔を上げると、二人がじつちを見ていた。

「え？ 防腐剤？」

はあ、と先生サマがわざとらじいため息を。

「何を言つてゐるんですか。今度、こちらの小説雑誌でインタビュー記事を載せることになりました」

藤埜サンは、紙面を1ページ分確保したらしく、先生のちょっとしたインタビューを掲載する枠だ。

うんうん、と頷きながら、藤埜さんも補足してくれる。

「その中で、私生活について軽く触れる質問もします。ハッキリとでなく匂わせる程度に」

そうですか。そういふ対策は、専門家にお任せします。

「……でも、うちのおかーさん、絶対記事読むと思います……」

そんな雑誌が出たら、きっと大騒ぎしちゃうな。

『 もうあ、これってどうこいと? もう一人の間ではそんなお話を
がでているの? 大変! 準備だつていろこのあるのよ、結婚とも
なると。あもづこうしたらいいかしら。』

「ふふ、図に見えるようだ。

『 結納とか、お式はどうなの? 節田節田の行事は大事にしなきや。
あ、お母さんつこでお着物仕立てちやおうかじり。明るこお色の
礼装が欲しかったのよ。どう頼みつけ。』

……大変だ。

「先生。違う方向に問題が大きくなります。程ほどこ。ゼヒやり過ぎ
ないようつにお願いします」

先生サマは、分かつていてますと領いてくれたけど。ホントに分か
つてるかな。

「ふふ。お母さんこもちゃんと釘刺しておかないとかも

……後、お父さんにもお母さんの暴走を止めてもらわないとかも
しない。

基本、インドアな人間だから、スケッチブックさえあれば何時間でも時間は潰せる。

……しかし、迂闊に外に出ないほうがいい、とゆー制約は、逆に外出したいという思いを煽るよね。

リビングで、最早あたしの指定席と言つても過言ではないふかふかソファから立ち上がって、背伸びを一つ。

やつぱり散歩くらいはしたい。書斎のドアに向けて怒鳴つてみる。聞こえてるかな。集中してたら返事はないだろうけど。

「先生？」もしかしてあたし一人なら、ふらふら外に出ても大丈夫なんじゃないですか？」

先生サマと一緒に問題なんジャン！

そこの「コンビニ」でもいい。外の空気が吸いたい。あー、ついでに本屋に行きたいな。今月の新刊つて何があつたっけ。

そう言えば×切ヤブリ常習の漫画家先生ンとこ、最近ヘルプアシ行つてないけど大丈夫なのかな。

大作家先生のお仕事以降アシとかの話がまるで来なくなつたのは

オネーサンの差し金なんだうつけど。今更気付くあたりホントあたし迂闊だな。

頭の中で外出コースを思い描いていると、先生サマが書斎から出てきた。ちょうど区切りの良い所まで執筆できていたらしい。

「……却下です。あなた一人で、もじびいじぞの記者に捕まつたら対処できますか?」

想像してみた。

……イマイチ、想像力が。あたしがマイクを向けられるような状況つてのが、どうにも現実味がない。

「だから危機感が足りないと言つているんです。危機管理というものは最悪を想定して対応を考えるのが基本です。警戒する理由があるのにそれを怠るのは愚かというより他ない」

……だからや。イチイチ言い方がね。

「そう言つところが、人間性を評価できなってゆーんです」

「それは申し訳ない。…まあ、文才を評価してくれているなら、私はそれで充分満足です」

ぐあ。他人の評価なんか気にしませんつてか。

「うつわー、平均以上の人人が言つと腹立つなー」

憮然と文句言つたら、先生サマがニヤリと笑つた。

「せひ。 平均以上の評価は頂いているようですが？」

先生サマ。 最近本性見せ過ぎじゃないですか。 最初の巨大な猫は何処に行つた。 胡散臭い爽やかエセ紳士は。

「……そんなこんなでストレス発散したいんです。 先生は外行きたくなりませんか」

「書いている間は気になりませんが。 では夜ドライブでも行きますか？」

「この際、先生一緒にでも我慢します。 外に出たいです。

「お仕事の都合が付くなら、じゃあ連れてってください」

モー、ビーだってイヤヤー。

夕方にお仕事切り上げた先生が約束どおり車出してくれて、ドライブ行くつもりか知らないけどドライブに出発した。

少し遠出しますか、なんて呟いていたから、……遠出、ってドレ
くらいが遠出なんだるうか。

コンビニで飲み物とお菓子買って、長距離の構えだ。帰つてくる
の深夜かな。もともと育つ張りだから別にいいけど。

……が。

世間的に、今日は週末だつたらしい。自由業つて曜日の感覚がないから気付かなかつた。

首都高がブレー キランプで真っ赤だ。

「……動きませんね」

「そうですね。この先のジャンクションを過ぎれば大丈夫でしょう渋滞で、でもドライバーがイライラしてないなら、なんてことない。

「どう行くんですか？ 渋滞情報が……、ほら」

情報表示板で、首都高のほとんどが赤やオレンジに染まつている。

「海側とか真っ赤ですよ」

時間的に金曜の終業後、遊びに繰り出すパークにあたつちゃつたみたいだ。

「……ですね。行き先を変更します。山の方に」

「山？」

渋滞で動かないのをいいことに、先生は運転中だとこうのにギアをパーキングにしてカーナビを操作した。

「ピッピと変わった画面を見ても、頭の中の地名が付いていかない。ど」「行くって？ 山つて、山つてドコだ。

行き先設定されたカーナビは、次のジャンクションを左に行けと指示している。

方向音痴なあたしは、地図を見ても現在位置すらよく分からない人間なので、つまり行き先について推測しようなんて無駄ってことだ。

「ど」「行くんですか？」

素直に聞いたのに。

「答を人に聞いては面白いしないでしょ」「？」

……つむぎ。

「少しば自分の頭で考えてみなさい。自分の行き先なんですから」

はいはい。えーっと。このジャンクションでー左が東北道? だからー?

山方面? つて、こんな時間から行くドライブで山つて、どりしゃ。

早々に答を諦めたけど、再び先生サマに聞くのも癪に障るので、話題を変えた。

「で、二冊目、進行具合いかがでしょう？ 前から書いてるんだか

ら、それから見えてきたんじゃないですか

前の車のブレーキランプほんやり見ながら、ペットボトルのキヤップを開ける。ついでに先生の分の飲み物もホルダーに置いといた。

「そうですね」、後一日一日で書きあがります

ほうほう。それは凄い。

「締め切りまで大分余裕があるじゃないですか。なんて優等生な。じゃあ絵もそろそろ始めちゃつていいですね」

頷く先生サマに、頭の中で段取り考えた。

書きあがつたら読ませてもうつて、主人公のラフ上げて、藤埜さん交えてデザイン決めて……。

「そういえば、結局ラフ描いたのボディビルダーだけですけど。主人公ってどんな感じ?」

前に聞いたのは、片親の家庭でちよつと捻くれて、でもアレコレ頑張っちゃう主人公だった。

「……そう、ですね。外見で言つなら、ビニにでもいる女子中学生でしょ。むしろ庇護が必要に見える女らしい容姿で、自分の姿を嫌っています。無頓着を装つて、清潔ではあるものの地味でラフなものばかりを身に付ける。当然ズボンだけです。制服のスカートも嫌つていて必要なとき以外はジャージ」

ふんふん。中身は可愛いのにモサダサな格好ね。

「特に病弱ではないけれど、食生活がインスタントなど偏っているので健康でもありません。成績はそこそこ良い方だけれど一番ではない。運動も女子の中では良い方」

「あー。近くに、成績でも駆けっこでも勝てない男子がいるんですか」

んで、主人公の目の仇にされちゃうのが常道だな。でもその男子、実は主人公にラブってのが少女漫画だ。

「いえ。個人ではなく。成績面や運動面、あるいはクラス内でのまごめ役とか、それぞれ上を行く男子がいるわけです」

……少女漫画の王道が否定された。否、その皆が主人公に矢印なら逆ハーベ成り立つぞ。

「主人公はコンプレックスを抱えて悩みますが、最終的には、それぞれに負けているところも勝るところもある、と納得します」

え？ んで、誰かとイベントは発生しないの？

「その辺は全部主人公の環境に過ぎません」

「うん。そつかー。……ライトノベルと少女漫画じゃ違うよね。

「……思うに、……いくら少女漫画でも、その発想では……」

はあ、とため息つかれた。なんかすっげー憐れまれた気がする。
……悪かったなどうせあたしは売れない少女漫画家だよ！－。

話す間にジャンクション過ぎて、先生の言つた通り、渋滞が解消された。

それで？ じゃあ物語はドコで展開するのか。

「そこで、ボーティビルが絡みます」

ああ。はい。マッヂョが。……震度4で逃げ出す、例の。

ありえないありえないありえない。

「先生。 大いに不満があります」

片手を上げて、粗筋説明中の先生サマにモノモウス。

先生サマの作品にケチ付ける気は毛頭無い。しかし。

「コレばっかりは譲れません。どうしてマッヂョがそんなにオイシイ役なんですか」

大雑把な説明によると、マッヂョが主人公にとつて憧れポジショ
ン。許せない。

「最終的には転落しますが?」

「それでもです。あんなマッヂョ見て『ステキーカツコレー!』
とか? ナイナイ」

断固拒否の姿勢を示したあたしに、先生サマ、頷いた。

「地の文では客観的な面を強調しますよ。格好良いと思い込むのは
主人公のみ。最後には勘違いだと気付きますよ」

飘々とハンドル捌きながら囁く。

「でもやっぱ物語は主人公視点で進みますよね？『カツコいい』扱いで終盤まで？」

「まあ、多少は。しかしその辺主觀と客觀のズレを『ミカル』に表現します。主人公の視野が狭くなっている部分でもありますし、丁寧に」

……うーん……。

「……でも、あのマツチヨを『カツコよく』は……。その、何だかんだ言つてですね。描く時は、対象を好きでなきや良い絵にはならないと言つのが持論なんですが。どつか一点でも感情移入して妄想でも何でも膨らませて、愛ある絵にしなきゃなんですよ」

うん。前回酷すぎて自主的にボツした絵は、愛の欠片もなかつた。

「そこは、実在の人物と切り離していただけると助かりますが。出来上がりを読んでもらえたら、印象はかなり違つだろ？と思います」

やつぱり引き気味なのがバレバレなのだろう。先生サマも慮つてくれたらしい。けど。……ホントかな……。

「…メインのキャラって、それぐらいですか？」

「ですね。後は主人公の父親と、親友、幼馴染くらいです

ん？ 幼馴染？

「幼馴染つて、男の子？」

「はい。主人公に一方的に嫌われている」

「ンでもその子は、主人公嫌つてないんですね？」

「お？ 今までの一作ともラブに要素皆無だつたけど、ひょっとして？」

「幼馴染は、主人公の両親のゴタゴタも全部知っています。そして、主人公が意固地になつていると分かつていて。何となくどうにかしてやりたいとは思つてゐるけれど、どうしていいのかも分からぬ。男だというだけで毛嫌いされて、イライラしています」

「おおー！ それですソレ！！ 青春！ 幼馴染一押しじゃないですか！」

真っ向否定された少女漫画の王道が！

「主人公の感情としほ、男である幼馴染が羨ましい。嫉妬ですね。ですから、性差を容認できれば最終的に良き理解者、友人ポジションで收まります」

……がっくり。

「なんか、先生の話つてラブはないんですか。胸キュンな展開は」

ライトノベルの読者層なら、少しごういはそつ言つて展開あつてもいいんじゃないかなー。

「泥沼の愛憎劇なら一度テーマにしたことがありますか」

「ソレ胸キュンじゃないし」

初恋の甘酸っぱい恋愛的な爽やかな話はないんだろ?」

「わつですね。なら、四作目にわつ言ひ要素も入れて見ますか?」

「できるなら、ぜひ。やっぱりブリ要素もあつたほうが楽しいです
よ、あたしが」

挿絵のお仕事的にな。デキデキ類染めけり少女とか。

ホラあたし少女漫画家だしー。(主張)

先生サマは、わかりました、と請け負つてくれた。やつた。

「大まかに構想はあるんですけど。恋愛要素も、……入れよつと思え
ばいけるでしょ?」

切り良く話もまとまりた所で、先生サマの操る車は高速道路のイ
ンターを降りた。

あれ、ドロドロ。結構な距離走った気がするけど。

高速を降りたら、いかにも山だつた。

普段灰色ぱっかりの景色を見慣れているから、夜に生い茂る木々なんてちよつと怖い。昼間ならスケッチのし甲斐があるのでπ。

「ええーと、田的地區？」

「こじも山付近、ではあるよね。ビード、と思つたら道路標識があつた。……いろは坂？」

…うう？

ちよつと遠出、のエリアが広すぎるので関東はみ出しあつちよつちよつといふじやないの？

「……先生、『ちよつとお出かけ』で、最長どいまで行つた事ありますか？」

財布と鍵だけ持つて出かける程度つて、どんなんだ。

「学生の時分には、それこそ国内なら何処へでも行きましたね。流石に真冬に北海道に行つたときには着の身着のままだったことを後悔しました」

「先生、意外と行き当たりばったりな人ですか？」

それこそ意外だな。きつちりしてそうなのに。

「計画しなくともどうでもなる部分は、流れに任せのほうが良い場合もあります。はつきり目標が見えていれば、結構間違わないものですよ」

……。

「先生って時々お坊さんっぽいです」

「こんなお坊さんが説法してくれるお寺なら大繁盛だらうな。……先生の実家のお寺ってどんなところだろ？」

「……私の家の話、聞きましたか」

「ぐいーん」と急カーブに差し掛かった。シートベルト握つて踏ん張る。

「はい。……スママセン、勝手に」

前後にいっぱい車がいて、みんな結構なスピードでカーブに突っ込んでいるのが凄い。地元の人かな。

「別に隠していませんから。…勘当されたことも、自由させてもらって感謝しているくらいです」

またまたぐいーんと。遠心力つてすごいな。

「…………」Jの前お母さんに言つてた事はなんだつたんですか……」

Jの耳で確かに聞いた。温かい家庭がなんとか。

「一般論です。傍で見る分には良いものだなと思いますよ。自分がその一員になれるかどうかは別問題です」

ぐいーん。

「……先生、殺伐とします」

なんちゅーかさ。先生サマって、生き物の気配が薄いんだよね。
寝室覗いちゃつた時も思つたけどや。

「分をわきまえていると云つてください」

意味が分からん。

ぐいーん。

頭が回つてきた。先生サマよく平氣だな。こうこうのハンドル握つてれば平氣つて聞くけど、運転免許持つてない人間には分からぬい感覺だ。

「人の事より自分はどうなんです。曲がりなりにも一人暮らしで家を出て自立しているつもりなら、自分の家庭を作ることも視野にあります」

ぐいーん。

「……ええーと。ぶっちゃけですねー。そのうち可もなく不可もない見合い相手と結婚するか、生涯独身か、その程度だらうと思つてますけどー」

「うえ。気持ち悪くなつてきたよ。コレが昼間で晴れてれば、周囲の景色も綺麗なんだうけどさ。

「それ」「意外です。あなたは恋愛や結婚に理想を抱いているタイプかと」

「いや先生サマ、夢や希望があるから少女漫画家なんですけどね。でも理想と現実もよーく分かつてますよ」

ぐるーん。

んでも正直、実在の男の人には夢は見ないかなー。だつてほら、あのマッチョの一件でもさ、男性陣誰一人理解を得られなかつたし。
……先生以外。

「ああ。そつか。だから先生男の範疇除外なんだ」

謎は全て解けた。先生といつて平氣なのは、そつとひつことか。

ぐいーん。

「いろは坂つて殺人的だな。

「先生。気持ち悪いです」

もつとスピード落としてくれればいいのに。なんで周りの車もこ

んな速さで。

「大丈夫ですか？」

大丈夫じゃないです。マジ気持ち悪いです。

これは坂つてヤツは九十九折の山道で、途中で具合を悪くしても路肩に止めて休めるような道幅なんてほとんど無い。とゆーかつかり停車なんかさせられない状況だそつな。

先生サマは大変気を使いながらも、せほびスピードを緩める」となく坂を登りきった。

なぜなら、週末のいろいろは坂ともなると、イワヨル峠を攻める走り屋さん系が大勢いて、つまりあたしがのん気に地元の車だと思つていた車はほとんどが攻めに来た車だそうだ。

大抵は一般車に対してそこそこマナーも良いらしいけど、やつぱりヤンチャな連中もいない訳ではない。無用な面倒事を避けるためにも、車の流れに逆らわず通り過ぎるのが一番、とゆーことで。

……先生サマよ。ならなんで「こんなトコに来たんだ。知つてたら避ければいいじゃんか。

視界がぐるぐるする。吐き気も酷い。

ドライブでこんな悪路誰が想定する?

つつーか先生が平然としてるのもなんだか理不尽だ。あたしがこんなに酷い目に遭つているところに。

「ちゅうと車止めてください。もー吐く。マジ吐く。胃液どひるか
内臓まで吐きそつ」

ハッキリ言葉にできたかわからないけど、唸つて言つたら先生、
もづけよつとの辛抱ですとかなんとか。とりあえず一番近いところ
に、つて言つたから、聞こえてはいたんだろつな。

もー吐き気をこらえるだけでイツパイイツパイで、いつの間にか
車が止まつたとか氣付いてなかつたけど、先生サマが一度車を降り
て、しばらくして戻つて来た頃には、こみ上げる酸っぱいモノも少
し静まつた。

「大丈夫ですか？ 部屋を取れましたから、歩けます？」

あー。車降りられるのか。助かつた。

差し出された手に縋つて、フラフラする頭をどうにかこうにかス
ッキリさせようと辺りを見回して、へえ、て田を見張つた。

レトロな瓦屋根の、でも立派な建物がある。控えめな照明が、雰
囲氣良い。凄く良い。

くわいじんな体調じゃなきゃスケッチするのに。せめて写真。和
服美人がいれば尚良し。

……と思つて見ていたら、和服の中年の女性がいた。おお、良い
感じ、……違う、アレはイワユル仲居サンだ。

「お連れ様、いかがですか？ 宜しければ、車椅子かストレッチャ

ーを「利用になつますか」

……え?

「いいえ。支えれば大丈夫です。案内を」

「はい。」しからず。お部屋、今ご用意致しておりますので、直ぐに横になつていただけます。市販のもので宜しければお薬をお持ちいたしますが、いかがなさいますか」

……なに?」とだ。

「一先ず休んでみて、それでもどうにもならなかつたらその時お願
いします」

「かし」まつました

吐き気を堪えつつも必死に考える。今何がどうなつてゐる。

先生サマに支えられつつ歩む先は純和風の立派な建物で、中に入
れるのは実はちょっと嬉しい。黒光りする太い柱とか、年代を感じ
る。赤じゅうたんのロビーとか畳敷きの廊下とか、趣のある建物は、
ちょっと本氣でスケッチしたい。ええい何でこんなときに吐き気と
戦わなきやならないんだ、スケッチブック寄越せ。

「先生、ここ、何処ですか」

「大丈夫ですか? 直ぐに部屋ですからもう少し頑張つてください」

「部屋つて何、それよりスケブくださいスケブと鉛筆」

「はい？」

「なんて雰囲氣ある廊下！　このレトロな空氣、歪みのある板ガラスと木の窓枠、抑えた照明、さいつこいつの景色が田の前に！　吐いてなんかいらんない、ぶつ倒れてる場合じやない」

吐き氣より景色だ。

「……大丈夫なんですか？　まだ顔色は悪いですが」

「顔色が何、この趣ある廊下で誰が吐くかってんですよ、この景色を見られただけでのいろいろは坂登った甲斐があります」

大正浪漫な廊下に心奪われていると、脇からくすくすと笑い声がした。

「お気に召していただいたようで光榮でござります。この建物は、当ホテル創業以来、当時のままの趣を残しております」

案内してくれていた仲居さんだ。

「細かい意匠も、全体のバランスが素晴らしいです！」

ありがとうござります、と懇懃に頭を下げる仲居さんは、しかし流石客商売だ。

「廊下は逃げませんし、具合がよくなりましたら改めてご覧いただきたく存じます。お連れ様の仰るとおり、まだお顔の色が真っ青です。先ずはゆっくりお休み下さい」

ハツキリキツパリといわれ、有無を言わざず部屋に通された。

具合が悪いことで先に床を用意してくれていたらしい。そんなに酷い顔色してたのか、妙な押しの強さで布団に押し込まれてしまった。

「…………今更確認なんですが、先生、ここって何処ですか

見回せばホテルの和室で、しかも上等なお部屋であることは間違いない。床の間の掛け軸もなんか曰くありそう。

「こりは坂を登つて近場のホテルです。予約もなかつたので空いている部屋を適当に

……車を止めると言つたのは、とつあえず路肩でもビードモ、という意味だったのだが。

「…………でもこの建物見られたので、モロモロ良じとします」

も一建物中見て回りたい。他のお客さんとの迷惑になるかな。怒られちゃうかな。

横になつてみたら眩暈がして、やつぱり血の気が引いていたみたいだから大人しくしてゐけど。でも小一時間も休めば充分だし。

「つべづべ、絵のことなんですね

感心したように先生が言つ。

「先生だって人の事言えるんですか」

自分だって、所構わず思考の迷宮に迷い込むくせに。

「…ですね。このホテルは、文豪が定宿にしていて、ゆかりの品なども残されているそうです。ロビーに展示コーナーがあるらしい」

はいはい。

「あたし大丈夫ですから、行つてきたりどうですか。何かあつたら仲居さん呼びますから」

先生サマはいそと出て行つた。

……近場のホテル。

近いのは嘘じやないかもしけないけど、でもわざわざ二ヶ所を選んだ可能性は高いだろうな。

……。

でも、一部屋ですよ。

泊まつちやう氣なんですか先生サマ。

警戒する理由があるのにそれを愈るのはビードルだよーだと言つていたのは先生だと思つんだが。

…まあ、突発的に出てきたんだし、わざわざ追つかけてくる記者もいないだらうし、いいのかな。

お布団に寝転がつたままバッグ引き寄せて、常に持ち歩いてる小さいスケブを引っ張り出した。

今見た廊下と、この室内と。簡単に線を引く。

「うーん。やっぱ、細かいところがイマイチ見えてなかつた。もうちょっと休んだら、スケッチしに行こうかな。

眩暈が治まるまで、と思つて畠をつぶつて、……畠が覚めたら、早朝の空氣だつた。

ぼけつと見回すと、壁際に寄せた机で先生サマが書きものしていた。ひょっとしてこの人ずっと執筆してたのか。

「……オハヨー『ざい』います……？」

背中に声かけたら、はつと振り返る。

「ああ、……今何時ですか」

起き抜けのあたしに聞きますかそれ。

枕元に置きっぱなしだったバッグから携帯電話取り出すと、早朝5時半だった。

「5時半……。運転に支障があるので、チェックアウトまで少し休みます」

先生はこめかみを揉みながら、もう一組並べて敷かれてた布団に潜り込んだ。

……なんだろな、この状況。

……。

まあ、いいや。

あたしは自分が寝ていた布団を上げて隅っこ寄せると、枕元に放り出したままだったスケッチブック持つて、館内探検に出かけた。

うん。やっぱり歴史ある建物は良い。

ロビーにはホテルのパンフレットが置いてあって、それによるとこの建物は明治に建てられ、何度か増改築を経て今のようになったらしい。

6時も過ぎると、従業員が忙しく立ち働くようになつて、のん気にスケッチしてもいられなくなつた。

仲居さんが気遣つて、大浴場はもう開いてると教えてくれたから、朝風呂に行ってみた。

お風呂の脱衣所も、レトロなステンドグラスがあつたり使い込まれた籠が良い感じだつたりで、他にお客さんがいなければスケッチできるだらうと長風呂して人が切れる頃合を見計らつたけど、ボチボチ人が入れ替わり立ち代りで、逆上せそうで諦めた。

部屋に戻つたら、先生まだ寝てゐるし。

……ホント、何なんだろな、この状況。

その後は、普通にチェックアウトして、ボチボチ観光したりもした。

中禅寺湖沿いの道は走っていて気持ち良いし景色もよかつた。竜頭の滝は『滝』というイメージとちよつと違つたけど涼しげで気持ちよかつたし、華厳の滝は流石というか圧巻だった。先生サマが『夜の華厳も良いんです』と残念そうに言つたから、昨日の田的池はココだつたのかと分かつたけど。

んでも有名な神社仏閣は素通りで、アレレ、って感じだ。先生ママのガイドマップには東照宮も「荒山神社も中禅寺もないらしい」。

時間があれば戦場ヶ原も良いんですが、と言いながら、老舗らしい湯葉割烹のお店で『』飯食べて、東京に帰った。

うん。『』は小旅行だ。

これから先生ママと外出のときは気をつけよう。出かける前に田地を明確にする必要がある。

……流石に昨日の服のままなのはね。一応ちよつと気になるよね。

そんなジュー・ジツしたウイークエンドでリフレッシュしたら、お仕事ですよ。

先生は三作目をほぼ書き上げていて、早速藤埜サン交えて挿絵のお話。

「えーん。やっぱマッショの出番が多い。何でこの主人公マッショ崇め奉っちゃつてんの。視野が狭まつてるってこういうことか。読みながら突っ込みを入れ、ウェイトトレーニングにのめり込んでやう主人公に早く正気に帰れと念じ、見守っちゃう周囲にどうにかしようとイララし、空気で終わっちゃった幼馴染に未来があるよとエールと送った。

今回は、如何にマッショを面白カッコよく描くかが課題で、もともと可愛い系の主人公は視野狭窄の度合いを前髪で表すぐらいで特に捻りがない。

ちょっとつまらないので、空気で終わる幼馴染始めクラスメイト男子一同を乙女ゲー並に各タイプ取り揃えてみた。こーゆーのに見向きもせずマッショに走る主人公。バッドエンドまつしぐらだな。

それでも、トレーニングしてメリハリボディを手に入れちゃった主人公が、ラストでは自分に似合う可愛い服着るシーンにはリキ入れたし、表紙の背景でポージングしてるマッショは描いてる内に多少は可愛く思えてきたし、前回から引き続きカバー下にも気付いた人特典なイラスト入れた。

そんなこんなで、締め切り余裕で、3冊目のお仕事が終了。

次のお仕事までは間が空くから、先生サマが4冊目に取り掛かる頃に連絡くれるることで、数ヶ月ぶりに自分のアパートに帰った。

……うーん。あのソファ持つてきちゃ駄目かな。すっかり「ローロ」口具合が気に入ってしまった。

……どうして、こんな……。

ペラリと捲った手書き原稿。まだ途中だといつそれを読んで、愕然とした。

『高尾紅葉』の4冊目。自己否定を一貫したテーマに、精神と外見と肉体を否定してきたシリーズ。

4冊目は。

まだ結末の無い4作目は。

4冊目。年に4冊つて言われたり、普通3ヶ月に1冊計算だよね。

前回が大幅に締め切り前で上がったことを計算に入れても、そろそろ次取り掛からないとやばいんじゃないかと思つ。

次に取り掛かる頃に連絡するって言つてたのに。

「……なのに、何の連絡もない……」

久々に自分のアパートに帰つて、しばらくは羽を伸ばしたし、オ

ネーサンはあたしが自由の身なのを知っていて、助つ人アシの話や雑誌のカットを回してくれたから、ビフォー大作家先生な日々を過ごした。振り回されることも無く何事も自分のペースでできる。自由ってスバラシイ！！

……が。

4番目、どうなってるんだろうか。

先生、また行き詰まってるんじゃないだろうな。

藤埜サンに連絡してみようかな。

……自ら進んで大作家先生サマのところに行くのは、ちと抵抗がある。

なにせ、お母さん騙ぐらかしてくれたおかげで、実家に顔出すと必ず先生の事を聞かれる。根掘り葉掘り聞かれるのが嫌で、最近はアレコレ言い訳して実家に行つてない。

そうすると、当然お母さんのご飯が食べられないわけで、先生ママにおいしいお店連れまわされた舌は、コンビニ飯も自分の料理も不味いと文句を言つ。……餉付けされた。

自分の貧しい食生活を反省し、ちよつと気合入れて自炊しているんだが、料理はなかなか上達しないし。指切るし。商売道具の指になんてことを！ くつそつそれもこれも全部先生のせいだ！！ と癪癪おこしてもアパートに一人じやむなし。

先週になつて、大作家先生サマのインタビュー記事が載つた雑誌

が送られてきて、巨大な猫被つた爽やか笑顔の大作家先生サマが、当たり障り無い質問に当たり障り無い回答をしていた。

しつと左手に指輪嵌めてるし。プレイベートも充実してますなんて応えてたし。充実つてなんだよ一人で執筆に没頭できますつか。

その記事のおかげでお母さんの長電話に付きましたわされる羽田になつた。どうしてくれよ。

そんなこんなで、自分から直に先生に連絡するのは嫌なのだ。

でもお仕事気になるし。最初のときみたいに超特急で描く羽田は嫌だし。

進み具合、確認するだけなら、いいよね…？ 大丈夫かな…？
とビクビクしながら藤埜さんに連絡してみた。

そしたら、直ぐに先生のマンションに行つてくださいってさ。

何だよやっぱ先生詰まつてたのか、と、とつあえずスケブ抱えて先生ン家にお伺いして、そして。

「今、半分まで書きあがつています。読んでください」

と、原稿を渡された。

え？ 先生つて、完成するまで人に見せないんじゃなかつたの？ 人に読ませるときにはもう完成形であるべきつてモットーじゃなかつたの？

まあ、言われたなら読みましょう。

どんな主人公かな。どんな風に描こつか。

……そう思いながら読み進めて、読み進めるほどに、血の気が引いた。

4作目の主人公は、画家を目指す少女。

……これは、この主人公は、『あたし』だ。

子供の頃から絵が好きだった。

つたないクレヨン画でも母親に見せれば喜んで褒めてくれた。褒められるのが嬉しくてどんどん描いた。

描けば、それなりには上達する。

周囲の大人は日々に褒めた。子供にしては上手い。小学生にしては上手。

そうやって、自分は絵が上手いんだと思い込んだ。

絵に自信があつて、ただ漠然と、将来は絵描きになるのだと考えた。

中学では美術部に入った。そこでも、教師が教える基礎基本を直ぐにモノにして、どんどん上達した。

一年生にして、中学生の美術コンクールに入賞した。

鼻高々で、どんどん絵を描いた。描くことが好きで、描いて褒められることが好き。

3年になって、初めて壁にぶつかる。上手だけど、絵の技術は中

学生レベルを超えているけれど、それだけ。コンクールでも、一番にはならない。

描く」とに疑問を持つ。

何で描くのか。何を描くのか。何のために描くのか。

一度疑問に思つたら、今度は、何も描けなくなる。

中学生の女の子の話。

書きかけの4作目。

「テーマ自体はありきたりでしょう。よくある話です。」
「いつから、かつての何も考えずただ描くだけだった自分を否定していくわけですが」

先生が、読み終えたのを見計らつて口を開く。

何を言つて居るのか、耳では聞こえて居るのに、よく分からぬ。

「どんな風に、呪きのめしてこうかと、思案中です」

……呪きのめ……。

「何を否定するか。どうまで否定できるか。そして、この主人公が最終的にどう結論を出すのか」

……なにを、先生、そんな淡々と言つてゐる。

「……私は、それが知りたい」

……。

悪魔を描けつて言われたら、今の先生の顔を描く。

神様の絵を描けつて言われても、多分、今の先生を描くだらう。

そうだ。

先生の書く話の中では、先生が、唯一絶対の創造主だ。

……だからつて。

「だからつて、何であたし！？！」

こんな、人を丸裸にするような真似、していいはずが無いじゃないか！

「言つたはずです。あなたは、私が負けを認めた人間だと。……一度負けたからといって、以降蕭々と頭を垂れるとは限りませんよ」

爽やかエセ紳士スマイル、でも、目が、怖い。

「そしていつも言つたはずだ。さつさと腹を括れ、相応の成果を出

せ、とね

穏やかに笑つてゐるだけのはずなのに。

「こんな覚悟も無い人間に自分が負けるなど許せない。……才能だけに胡坐をかいて、そこの成績で満足するような人間に用はありません」

先生が、畳み掛ける。

「私は、仕事として執筆活動をしている。金を稼ぐという意味なら、確かに作家活動を仕事と言つてい」

エセ紳士スマイルすら止めて。

「ですが、例え一銭も稼げなくとも、例え誰一人読む人がいなくても、例えあれば物狂いだと後ろ指差されても、死ぬ瞬間まで、書くことを止めません。私は書くために生きているんです。それが私の覚悟だ」

それが神への誓いであるかのように真摯に。

「あなたに問います。……何故、描くのか」

最後だけ、まるで甘い嘘言でもれかのよつて、問い合わせを紡いだ。

田の前に、ことと、とコーヒーが置かれて、我に返った。

そして自分も悠々とソファに座つてマグカップを口元に運ぶ先生。

「…………」

白昼夢、じやないよね。わざわざのアレは現実だ。だってあたし原稿手に持つたまま。

「現実逃避はそれぐらいにしてください」

……ああ。どうせなら頑真つ白になつたままフロードアウトしたかつたな。無理か。

「逃避つーかですね。思ひもよらない」とこきなり言われて、思考が追いつきません」

原稿読んで、この主人公があまりにも自分に似ているからびっくりした。主人公の行動を予測して外さないくらいに、自分の思考回路と重なる。

「んでもあたしは中学生じゃないし、画家を田指してるんじゃなくて漫画家だし、別に今描けなくなってるわけでもないし！」

「うだよ、一瞬勘違いしたけど、この主人公があたしのわけが無

い。例えモデルにしたとしても、キャラクターとあたしは別だ。

「……そこから否定しますか。まあ構いませんが」

「や、だから、これ、色々違つしちゃうですね」

先生が、コト、とマグカップをテーブルに置いて、身を乗り出した。

「そうですね。色々と違います。あなたはとっくに成人しているけれど中身は精々高校生レベルの甘つたれだ。漫画家を目指しているのではなく一応デビューはしているわけですし、今、絵が描けなくなっているわけでもない。ですが、……ネーム、というんですか。漫画の下書きの下書きだと聞きましたが。そのネームは、どうなんですか？」

ぐ、と言葉に詰まつた。オネーサンだ。情報源はオネーサンしかいない。

「……数ヶ月。私はあなたがスケッチブックに落書きをしているところは何度も見ました。ですが、漫画のストーリーを考えている素振りは一度も無い。……いや、一度はあったか。ボディビルダーを描けと強要した時に、現実逃避にチラッと口にしていたけれど、でも実際その後ネームに取り掛かつてはいないでしょう

「そんなことも、あつたかも知れない。

「あなたは、今、漫画が描けなくなつてている。違いますか？」

「……違わない。最後にネームを仕上げたのは、確か先生の挿絵の

話が来るちょっと前。それだって、自分でも全く納得できない、どこかで聞いたような話のツギハギみたいな、苦し紛れに捻り出したもので。

それの前も、前も、ずっと、自分で何描いてるのか分からぬようなものばかり。

「しかし、小説やゲームのミニマリック化の話は断つているとか。あくまで自分のオリジナルに拘っているんですか？」しかし、仕事なら何でもやる、と口では言つ。何がしたいのか良く分かりませんね」「

オネーサン、そんなことまで話したの。

「ですから、あの主人公は、私が観察したあなたを『フォルメ』したに過ぎません。特徴は捉えていたでしょう？」

……観察。

思わず先生の顔を見たら、無表情に、こっちを見詰めていた。

「……まさか、先生、口で仕事をしてカンヅメしたの……絵が問題なんじゃなく観察が目的？」

なんて失礼な！ ノゾキか？

「いいえ。当然、絵も欲しかった。あなたの絵には、見るものに納得させるだけのレトリックがある。しかし、恐らく描き手であるあなたは、その辺りを意図していない。無意識にやっているものどうと推測できる。あなたはほぼ直感だけで描き上げていますからね」

…………え、ええと。

「例えば、役者の演技には定番の手法といつものがある。動搖を表すのに呼吸を乱す、これは平素から呼吸をコントロールしている必要がある。安定した呼吸が乱れるから、見る者はそこに動搖を見出すのです。役者は最初稽古でそれを意識し、本番では無意識にできるほどに体に叩きこむ。そこまでやらないと演技してこると云々しきが出てしまつからです」

「ちよ、ちよっと待つてください? あたしにも分かりやすく。

「あなたの絵は、その稽古の段階をすっ飛ばしている。こきなり本番で通じるレベルで、実際通用してしまつた。……稽古をしていいから、自分が何をやつてているのかを分かつていないので

「待つてつてば。いや、なんか深刻な話だつてのは分かるよ? 先生サマが真剣に話してるのは分かるよ? でもさ。役者の話と、漫画の話と、違わない?

「先生。途中からお話を聞いて行けてしません。要するに、あたしが黙りつて話?」

「そもそも、レトロックって何? って辺りから、もう振り落とされてるんだが。

「先生サマ、ちよっと呆れた顔して、『めかみをぐりぐりした。

「…………要するに。あなたは馬鹿で、恐らく私も阿呆だといつ話です」

イグノーベル賞を取つた犬語翻訳ツール、あれは偉大な発明ですね。言葉が通じないというのは致命的だ。

先生サマは両手に顔を埋めて咳いた。

……回りくどい例え話しなくても、何を言いたいのかは分かる。本当は、言われなくとも分かってる。でもさ。

でも。じゃあ、考えろつて、……ムカデは考えたら一歩も歩けなくなるんじゃないの。

説明するまでも無いですが、レトリック 修辞法。言葉を効果的に使って適切に美しく表現する言語技術。文学上の技巧表現。
……先生はこの場合、絵の表現での技巧といつ意味で使っているようです。

イグノーベル賞は、……知らない人は調べてね。（え）

……先生しゃべりすぎじゃね？

田の前のコーヒーが冷め切って、先生も顔を覆つたままで動かない。

「やつ方を考えないと。帰納法か演繹法か……」

ブツブツと、なんか言つてゐる。

といふえず。

「……先生が、アホつてことはなこと思こますナビ」

思ったことを口にしてみた。

「分かつてます。あたしが駄目つてこと。本当ほもうずっと分かつてた。でも認めたくなかったから考えなうことにしていました」

湯気もないカップのコーヒーの水面を見る。ちょうどザイン性の高いルームライトを映しこんで見える。

「ちょっと待つてください。駄目、とはこの場合何を指しているんですか」

先生が、顔を上げて身を乗り出す。

「だから、あたしがです

ムカ。嫌なことをわざわざ言わせないで欲しい。

「それは違いますね。あなたが駄目なわけではない。あなたの何が駄目なのか。そこを突き詰める必要があります」

……ああもう。先生サマはイチイチ。

「だから… 漫画が駄目ってことです… 技術ばっかりあつても駄目なんです！ 絵が描けるだけじゃ駄目…」

つい、怒鳴ってしまった。ずっと心のどこかで思つていて、でも否定し続けてきたことだ。

「皆がワクワクして面白くて感動できる話が描きたいって、思うだけで、全然駄目で、だから、……だから、ずっと、それだけは考えないよ」として

駄目じゃない、頑張って描き続ければ、自分が諦めなければ、そうすれば二つかはって思い込もうとして。

先生がティッシュ取ってくれた。遠慮なく鼻をかんだ。……泣いてないから。涙なんか拭いてないから。

「あなたが否定するものが一つ分かりましたね」

微笑んで言うものだから、一気に頭に血が上った。

「なんでっ！ 知りたいからって、そんな、あたしがどうだうどう

「

「関係あります」

先生が更に身を乗り出すから、その分身を引いたらソファの背に当たってしまった。間にテーブルがあつてよかつた。…と思つたら先生サマがあるついと立ち上がってテーブルに膝をついてまで身を乗り出してきた。いくら膝の高さのカフェテーブルとはいえ、乗りあがるのはお行儀が悪いよ！

「ほら。あなたは、いつも時、身を退く。押されればそれだけ引いてしまつ」

付け込まれるだけです。

……とか言われても。

逃げ場を探して左右を窺つたら。

「逃がさない、と言つたはずです。首に縄をつけてでも逃がしません」

それ、今じゃないし。マッチョの時の話だし。

「考えるヒントは、今までに充分すぎるほどあった。だから、考えなさい。あなたが、あなた自身の結論を導き出すまで」

先生は、歯んで呑めるよつて言つて、あたしの上から退いてくれた。

「どうして、描くのか

考えろって。

なんで描くのかって。

そんなの、描きたいからだ。

だって気が付けば描いてるんだからしあうがないじゃないか。手元に筆記具が無くても、頭の中では見るもの全部が絵になってる。

言葉を聞けば絵が浮かぶ。音楽を聽けば絵に変換される。

「…そんなの、わかんない。なんでかなんて知らない

先生が、正面から移動して隣に座った。真っ向から見られるよりも圧迫感が無くなつて、だから、言葉がするつと出た。

「先生は何で書くんですか。書くために生きるつて、じゃあ生きる目的はわかつたけど、書く目的はなんなんですか。言葉つて何かを伝える手段でしょ?」

誰一人読まなくともつて、そんな覚悟、誰も受け取つてくれない言葉でもいいの。

「何で書くことなんです。他のなにかじや駄目なの? どうしてかって、そんなの口で言えるようなことなの? 説明できるんですか?」

……もしかしたら先生サマなら説明できるのかもしれない。

「描かずにはいられないんだから、しょうがなにじゃない」

じつと両手を見た。もしこの手が、なんて考えたくも無い。筆を口で銜えて絵を描く画家もいたつけ。うん。この右手がもし怪我でもして動かなくなったら、左手でも、足でも口でも使う。

「……先生が、書くために生きるって言つなら、あたしは、……描いてないと息できない、みたいな」

口元したら、スコーンと納得した。

そうだ。呼吸するみたいに、受け取った刺激を絵にして吐き出す。泳ぎ続けなきや息できない魚みたいに、描けなかつたら死ぬ、……とまでは言わないけど……いや、描かない自分を想像すらできない。

「やうひですね」

先生が、よく出来ましたとでも言つよつに頭を撫でたからびくつとした。え。なにこの距離。いつの間に。

「あなたはいつだってスケッチブックを手放さない。いつだって何かを描いてる。何故描くのか。簡単だ。描かずにいられないから」

あのジムのトレーナーと同じですね、と付け加えられて、愕然とした。

いや、ちゅ、それは！ 同じにされたくない！ 改めて思い出す

と確かにあのトレーナーさんが言つてたことと一緒にだけ、でも全然違う！！！ 違わないかもしけないけど、でも断じて違う…！

「その芯を見失わなければ、後は余計なことを殺さ落としていけばいいでしょ。例えば、なぜ少女漫画なのです」

「HINTかよ… 気を逸らしといて切り込むあたり先生取り調べの刑事サンですか！？」

もつ虚勢とかどうでも良くなつて、だから、素直に応えた。

「……ええと。好きな漫画があつて。だから、あたしもあんなのが描きたいナー、と」

「え。口にするといかにも子供っぽい動機だ。単純な。

「いいんじゃないですか。最初はみんなそのようなものでしょ。ですが、あなたの適性は、多分少女漫画ではないですよ。少なくとも物語を構成する、といつ部分では致命的な気がしますが」

「…………もう少しありさへ」と容赦して貰ださ。

「…………構成が駄目なら少女漫画に限らず漫画全般駄目じゃないですか」

「やつですね。しかし、適性だけで物事が決まるわけではない。適性が無くともやりたいことを選ぶ人も大勢居るでしょ」

うん。

「ですが、商業誌では難しいでしょうね。仕事としては成り立たない」

……だよねー……。

「……でも。あの、あたしは高校生のときに、雑誌の新人賞に応募して、それで佳作に入つて、オネーサンが担当についてくれて、ずっと漫画描いてて。美大に行つたのも漫画のために、……漫画を描くつてことしか考えてこなくて。だから、今更」

「今更、『大人になつたら何になりたい?』を考えるのは無理だと?」

……先生サマはイチイチ全くグサグサと。

「そうじやなくて。他の道があつたって、あたしは、この道を選びたいんだってことです」

だつてまだこの道が無くなつたわけじゃないんだから。細くて頬りなくともまだ先があるんだから。

「ふむ。他の可能性は選びたくない。また一つ否定するものが見えてきた」

……先生と話してると、ぐちゃぐちゃに絡まつてゐるいろんなことが、ぱっさり断ち切られていくみたいだ。

はつきり田標が見えていれば、結構間違わないものですよ。

気軽に言つてた先生の声を思い出す。

芯さえ見失わなければ。

うん。

あたしは、ただ絵を描くことが好きで、絵を描いていられれば良くて。でも、描かされるのは嫌なんだ。

……仕事をえり好みしてたのも、そこだ。自由度のあるカットなら請ける。でも原作付きは制約が多くていやで、マジチョは描きたくない。

それが分かつちやうと、仕事と口では言いながらも、結局好きなことを好きなようにやっていただけって分かる。

先生が、甘つたれだと言つのも当然だ。

あたしは、『仕事』なんてしてこなかつたんだから。

「そこは、私も同じです。好きなことをやって、それが偶々仕事として成り立つた。それだけの幸運な人間です。売文稼業と割り切ついたら、仕事を整理したりしない」

……ああ。そうですね。大作家先生サマはね。

「……自己否定、といつのは」

省みて考え込んでたら、先生が声音を和らげてポツリと言つ。

「過ぎればただの馬鹿ですが、成長のためにには必要なものでもあり

ます。自分のここが嫌だと思つ。だから直そうとする、より良い方へ努力しようと/or>する。正しく自己否定ができれば、その人は成長するでしょう」

歯並び矯正少女もコスプレ少女もボディビル少女も。先生の話の中で、みんな最後には笑顔だった。

「今回、いつもより低年齢の読者層であることを考慮して選んだテーマがそれでした。……しかし、二十代女性にも応用できるようですね」

「ムツカ。一瞬流石大作家先生サマと尊敬しかけたのに。最後に茶化すように付け加えられて、ポイントマイナス。

「あなたがあくまで少女漫画を選ぶのか、描くことなら別の手段もあるのか。後はじっくり考えればいい話です。ですが私としては、今後私の本の挿絵はあなたを指名したい。その余地だけは残しておいて欲しいと思います」

……うん。結論がどうなるにしても、描くことは大前提だし。

先生の小説は、正直、面白いし。描かせてもらえるなら、それは光栄なことだ。

じいん、と、してたら。

「さて。4作目ではもう一つ課題があったんですよ」「

スルリと首に冷たいものが巻きついた。

「ちよっとじつをしてください」

へ？

隣から先生が両手を伸ばして、何か首にかけられてる？

「できた。念のため聞きますが、金属アレルギーなどはありますか？ チタンのチェーンなので、アレルギーはでにくいらしいですが」

首元を触つたら、これは、チェーンと、……指輪？

「この前の指輪です。先日受け取つてきました。あなたは手に指輪などしないでしょ？だからチエーンもおまけです」

「……え？ って、あの、エンゲージリング？」

そういうや、そんなものもあつたな。つかアレ本当にイニシャルまで彫つたの受け取つてきたのか。

……いや、今問題なのはそこじゃない。

「なんで今あたしの首に？　ちよ、先ず一旦外して、これ、え？
なに、どうなつて…？」

慌てて外そと留め金探つたら、……これどうなつてるの？

「ちょっと変わったアジャスターだそうです。脱落防止に頑丈なタ
イプで慣れないと外しづらじょうですが、外さなければいい話です
よね」

イヤイヤイヤイヤ、そづじやなくてですねー

先生サマ、なんて胡散臭い爽やか笑顔なんだ。危険信号過すぎる。

「4作目、恋愛要素が欲しいと言つていたでしょ。この件は、作
中どう決着をせるか未だ思案中です」

うへ？

「そんなことも言つたかも知れないですが、それは作中の話で！
その時あたしは自分がモデルとか知らないしー 恋愛とか意味わか
んないしー それにこのHンゲージングって嘘つこじょー！」

チヨイ待て！ いくらあたしでも嘘はできませんー！

「本物です。なんなり鑑定書も見せましょーか？」

「違うー… 意味が違うー。」

なに寝ぼけたことを言つてくれるんだ先生サマ。

睨み付けたら、余裕の顔で笑われて更にムカついた。分かっていてボケやがったな。

「小説にかこつけていますが、本氣ですよ。信じられないのなら、いくつかの証左がありますが」

へ？

「考へても見てください。私が、仕事の関係者とはいえ、誰でも彼でも自分のテリトリーに入れる人間だと思いますか？」

え？

「あ、むしろガード堅そうな感じですけど」

「でしょ？ では、何故あなたをわざわざここに住ませたと思いまますか？」

ええ？

「……イラストのため、……と、観察のため……？」

何を言い出すんだ大作家先生サマ。

「そのためだけに、半ば拉致するようにここに連れて来る必要は？ 時々呼び出すだけでも用は足りたとは思いませんか？」

……。

嫌な予感しかしない。ちょっとその辺で黙ってくれないか先生サ
マ。あたし今すぐ立ち去るから。

立ち上がろうとして、両肩を押さえ込まれた。寝心地抜群のこの
ソファ、今はそのフカフカつぷりが邪魔だ。

「逃がさない、と何度も言えれば分かつてもらえるのじょうか

ヤバイヤヴァイ。この体勢はやばいって。

退く、って、つまりこーゆー危険があるってことですね。実地で
理解しました。今後は押されても退かずに前のめりを心がけます。

「『』両親も応援してくださっているようですよ。先日はお母様か
らお電話をいただきました」

「え、それ知らない！ なにそれ！？」

「あの雑誌を『』覧になつたようですね。これからプロポーズをした
いんだと言つたら、激励されました」

おかあさああああん！！！ つか何でお母さんが先生の連絡
先知つてんだ！？ あのハイテンションな長電話はそのせいか！？！

いやそんな追求は後回しだ。

今はこの危険をどう回避するかが最重要課題。

#れいじの、るべ（後書き）

……先生実は自分から告白したことが無い人。

「先生。あの。確かに、暖かい家庭は、傍で見る分には良いけど自分には関係ない、てなことを言つてなかつたですか」

確かにこの耳で聞いたぞ。

「言いましたね」

「それって、つまり、先生は結婚に夢も希望もないって意味ですよね？」

「やうだと言つてくれ。結婚とか家庭とか、先生サマがまさかそんな。

「いえ。むしろ理想があるから、書くために生きる自分には分不相応なものだと思つています」

両親にとって良い息子ではありませんでしたし。

自嘲する顔は、そりゃー鑑賞に値するもんだけどな！　でもこの至近距離で見たくないよ危険物つて張り紙で隠したいくらいだ。

「しかし、あなたなら大丈夫だと思つたんですね

ちよ、ビーウー言い草だ！？」

「大丈夫つてなにー？ そんなんで指輪とか、変でしょーー？」

ただのファッショニングじゃない、この指輪、体裁はエンゲージリングなんだ。そんなものを受け取れるはずが無い。ピンクサファイア何カラットあつた、小粒のダイヤ散りばめたデザインで台はプラチナ、ホイホイ首にぶら下げられるかーー？

「何度も言いますが逃がすつもりは無いのド、そこは諦めてくください」

首に縛つてそう言つ意味なのかーー！！

「あたしはだから恋愛とか結婚とか夢も希望もあるんです

お父さんとお母さんみたいなイチャイチャはいくらなんでもだけど。でもちゃんと恋愛つてものに憧れが。

先生サマが至近距離でまつすぐ眼を見るから、田を逸らしたりつぶつたりしたら大変なことになりそうな気がする。

蛇に睨まれた蛙の図だ。

いやいやいやいや、待て違うとの捕食関係の例えは今洒落にならない。

「そのうち可もなく不可もない見合い相手と結婚するか生涯独身かその程度だという、夢や希望？」

「うわ、そんなこと覚えてないでトセーよー！」

なんで嘘でも高学歴高収入高身長な結婚相手募集とか言わなかつたんだあたし！

……その方がもつとヤバイのか。大作家先生サマは紛れも無く高学歴高収入高身長おまけにイケメン。

「あなたはじつやけり男性恐怖症といふか嫌悪症といふか、異性を忌避する傾向があるようですが。『男の範疇除外』の私なら可も無く不可もないでしょ？」

「ちよ、まさかそれ気にしてたとか言わないで下さいよ、そんな車酔いで朦朧としてうつかりポロッと言ひつけられたよ！」

「うつかりポロッと本音を言つた、ですよね？ 流石にここまで意識されないとなると、どうしてくれよ？ かと思つたものですが」

……こへりなんでも具合の悪い女性に無体を働くわけにも行きませんし。

「つて今すんげー不穏なことほぞいた！…」

「私は今までにも何度も意思表示してきた。それをまるつきり無視してきたのがあなたでしょ？」

「いや、そんなん知らないし…」

「マジ知らん。意思表示つてなんだ、そんなの欠片も無かつた！！

「ではハツキリ言いましょう。私はあなたが欲しいんです」

……え、……うえええー……？

「…………先生。」Jの状況で、Jの体勢で、その台詞で、その言い方つて、……なんかイロイロ間違つてます

「…………訂正。正直に言つ過ぎました。あなたが好きなんです」

ちよ、正直なのかよ！――！

「…………いやなんでも雖然としていると、先生は身を起しして、ついでにあたしも引き起ししてくれて、普通に座つた。

「…………ちよつと待つてください。これでも緊張しているんです。立て直しますか？」

拳を額に当たして、苦齒している。

「…………あれ、ひよつと見て今、逃げるチャンス？」

JN一いつと一〇〇三ほど移動したら、手首をつかまれた。

「だから、逃がしません」

今、田え瞑つてたじやんがどうして分かつた！

「最初から説明します。聞いてください」

意を決したように、先生サマが顔を上げた。

うん。手握られてるから逃げないし。だからJの最近距離でなく

ても話はできるよ。日本人的なパーソナルスペースつてもんはね、もーちよつと距離感をダイジにね。

「つまりは、一田惚れなんです」

「先生。辞書貸して下さい」

「『一田惚れ』とは。一度見ただけで、ほれる」と。ちょっと見ただけで好きになること。…という意味です」

……先生の言つてる一田惚れって一般的な一田惚れか。他にトンでもない意味が隠されてたりしないのか。

「最初に、原稿を読んで物語の世界に入り込んで、主人公と一緒に泣いて笑う、あなたのその素直な感情に好感を持ちました。その後、キャラクターを非常に的確に捉えていることにも感心して、文章以上の説得力あるイラストを見たときに完全に落ちたんです」

やつぱり矯正器具が敗因……。

「ええと。つまりそれは、イラストに惚れたってことですね？ 絵、ですよね？」

「イラストも当然ですが、先に読者としてのあなたがある。……あの時、ただ素直に物語を受け入れてくれていると感じたんです」

……。

そういうや、あの時先生は捻くれてたんだっけ。砂漠で一杯の水の恩つてやつだらうか。

「その上、創作意欲を刺激してくれる絵を描ける。こんな人が一番に私の書くものを読んでくれて、いつでも絵を描いてくれたら良いのに」と思いました」

「先生。やつぱりそれを一日忘れていつのまおかしいです。だつて異性として惚れてるわけじゃないし」

「うん。恋愛要素はどこにも無い。」

「私は、書くこと生きることだと誓ったでしょ。つまりは、一生を共にしたい。そう思つたんですね」

先生。一生を誓つその前にいろいろ段階があるはずですよ。

「これがもし男性だつたら如何ともし難いですが、幸い年齢的にももううどい女性だつたので、もう結婚するしかないかと」

「飛躍つぶりが超絶技巧だなーー！」

「どうしよう。最初の印象は間違つてない。大作家先生サマは変だよ。変態だよ。」

「後は、じつやつて外堀を埋めるか」

「先生そつ言つときは普通先ず相手の意向を確認するんですーー。」

「なんだ大作家先生サマ、いろいろメンドクサクなつてきた、ちよつとマジ黙つて欲しい。」

「あなたの担当の、…緒峯、と言いましたか。彼女が、真っ向から挑むと必ず逃げられると断言したもので」

オネーサああンー！ 余計なことを、つづ一かもしかしてその後の拉致とカンヅメの糸引いてたのはまさか！－

「しばらく一緒にいて警戒心を解いてから押しの一手で落とせ、と言われました」

「先生それ絶対オネーサンに騙されてる！ つかあたしも騙されてる！ 諸悪の根源が判明した以上、先生はこんなとこりで油売つてないで田悪に立ち向かうべきです！－」

だから私の手を離して！ 田え覚まして！－ いつもの冷静なへ理屈屋はどこにいったんだ！－

「色々協力してもらひて、感謝してますよ」

「協力つてナ－！－ 色々つてな！－」

「恋愛においてはあらゆる手段が正当化されるんでです」

「セーユー話なの！－？」

「あれこれ言つたところで、田標はまつきりしている。私はあなたが欲しい。それだけだ」

先生は捕まえたままだったあたしの手を、すっと持ち上げて。

……手の甲に、く、く、く、く、くがくつ付いた！－

#あこじゅ、なな（後書き）

「いろいろ説教臭い」と書いてた先生サマにも弱点はある。

……先生の著作、真っ向ストレートに志麿がテーマってのは無い。

やめて……ええ……！

先生マジ凶悪すぎるからそれ……！

中身はどうあれ先生サママは紛れも無く美形、それがあたしの手に、
キ、キキ…キ…、言えるかこんちくしょう……！

「……落書きで、何度か私を描いてくれていたでしょう？ 実は嬉
しかった。あなたは性格上、強請もされないで嫌いなものをかいだ
りしないでどうか？」

え。儂侶ヒドリキュウと天照、ばれてた？

いや、そうじゃなく、……ええ？ あたしそんなつもりはない！
確かに落書きでわざわざ嫌いなもの描いたりしないよそりゃそう
だろ、だからってじやあモデルにしたから好きかと言わわれれば、そ
りゃー先生サマへりこの顔貌なら、誰だつて描くだろ？！

「私のそばについてくれませんか。不自由させない程度には甲斐性も
あるつもりですが

どうじょり。

泣く。

マジ泣く。トリハダが。

少女漫画的展開だ。超イケメンが手にちゅーでプロポーズ、見開き大コマで花と恋描とキラキラグラストシーンだ。

そんな王道のはずなのに。

確実に王道じゃない落とし穴がある。

……主にラブとかトキメキとか胸キュンとか。

「……先生。念のために確認したいんですけど。……先生の言う結婚つて、メリットデメリットで計つてませんか？」

泣いていいかな。人生初の告白＆プロポーズ、なのに。

「打算する結婚が無いとは言いません。いや、むしろ相手の経済力とか考えずに結婚のほうが多いかもしません。でもですよ？　昔の政略結婚じゃあるまいし、打算だけ、つてのはどうかと思うんです！」

「ちが……」

何か言いかけた先生サマ遮つて続けた。頑張って、自分の右手も

取り戻した。

「わっ きから聞いてると、先生が読者として絵描きをしてあたしを非常に評価してくれてる」とは分かりました。そこは実に光栄なことだと思います。でも！」

ひ、退くもんか！ がんばれあたし！！

「執筆の邪魔にならないとか絵が役に立つとか一緒にいて大丈夫とか、そーゆーことだけで、ソレって友達でも一緒にやないですか」

うん。先生サマのプロポーズが、どうにもトーンチンカンな気がしてしょうがない。そうだよ友達だよ。

「あたしは、少女漫画みたいな恋愛に夢も希望もあって、だから、け、けけ結婚とか、無理です」

ハッキリキッパリ、言った！ ちゅうといつぱすかしいこと言つたけど…… よくやつたあたし……

ちょっとと勝利が見えてきたとこりで、敵も然る者、先生サマの顔つきが微妙に変わった。やばい。勢い込んで続けた。

「あ、あのー！ いつでも絵描きますよ！ 読むのも！ 何なら近所に引っ越してもいいです！」

先生サマは何考えてるか分からぬ顔でジーっとあたしのこと見てる。どうしよう。

「どうせ甯つ張りだから夜中でも平氣です！ 電話一本で呼ばれて

飛び出でてしまふから……。」

ジ——と見られてる。

「だ、だから、あの、……」

イカン。涙出きた。どうもみの。

頑張つて堪えてたけど、耐え切れなかつた涙がホロッといぼれた
り、後は止まらなくなつた。

だつて、だつて、おかしいよ。変だよ。先生サマほどの美形なら
選り取りみじりじやんか。なんで選りにもよつてあたしてそんなこ
と言つて、

絵が欲しいなら、いつだつてちゃんと描くし。挿絵の話とかあれ
ば超頑張るし。

えぐえぐと、しゃつくりが止まらない。鼻水も出てきた。

はあー、と先生が深くため息ついた。

……スマセン。止まらなくなつちやつたんです。ちよつと放つ
といてくれればいいですか。つづーかずつと放つといてくれてい
いですか。

「焦つて申し訳ない」

ゆつたつと背中に腕が回され、落ち着かせるよつとポンポンと
叩かれた。

え。先生のシャツに鼻水付いちやいます。

「「」の挿絵が終わってしまつたら会える口実もなかなか無いので、気が急いていました」

背中をトントンと子供みたいに拍められて、ひょりと、しゃつくり治まつたけど。

「……早すぎました。先ずお友達から始めましょうか」

あ。うん。そうだよ。うだよね。お友達だよお友達。

「……うわわ……」

鼻詰まつて変な声出た。うん、って言いたかつたんだけど。

「ふ、うん、しょーです、け、結婚とか、おかしいし」

お友達。うん。それなら安心。

「絵のために引っ越してはくれる訳ですか」

「え、あ、うあい」

とつあえず、涙は止まつた。まだ鼻はぐずぐずだ。

「物件を探すのも大変です。友達だといつなら、ルームショアしま
しょ。どうせあの部屋は使つていないのでからひつみちうどこ」

「あい、うん、そんなら」

「うん。ルームショアか。そつか。そんなら。あ、でもお家賃いくらだ。」

「それで、追々本気だと分かつてもらいます。忍耐には自信がありますから、そこは信用してください」

「ん？ え？」

「うえ？」

「恋愛に夢も希望もあるところなら、叶えるべく努力しましょ」

「……え？ あれ？ あれれ？」

「段階を飛ばして申し訳ない。あなたが中身も中学生レベルだとつかり失念していました」

「へ？ あれ？ お友達、だよね？」

「せんせ…？」

「身を引ひつとしたり、わざととられた。」

「……忍耐には自信があるんですが。完全に安心されてしまつのも癪なので」

「これだけ、と耳元でせわやかれて。」

……ほっぺに、何かが。

「今はね」

……上下座。やつぱり十俵際でうつむかひり。

スマスマセン作者への罵聲雜談受付中。

例えば

今、リンゴが欲しい。リンゴを買いたい。

なのですが、モリンガが売っていない。

そんな時横から、こちらのリングは一個千円ですよ。百分の一です！ お安いでしょう？

百分の一なの！ 安い！ 千円なら買える！

おかしくない？

結婚这样一个十万元的戒指，摆在我面前，我却选择了与你同居。我买了一个十万元的戒指，却买不起一个十万元的家。

あれ？でも、そもそもあたし最初っから「リンク」欲しがつてないよ？

騙されてる
？

高尾紅葉の4冊目は。

|画家を目指す少女は、あれこれ技術に拘つて本質を見失っていたことに気付いて。素直に描きたいものを、感動をそのままに描くことを思い出して。当たり前すぎて意識もしなかつたことに気が付かされて、そうしてまた絵を描き始める。

気付くきっかけをくれるのが、ヴァイオリンでプロを目指す男子で。既に海外のコンクールなんかでも活躍しちゃってるけど、やつぱり競争に疲れてて。その男子も、主人公に会って、自分がただ音楽が好きでヴァイオリンを弾き始めたことを思い出す。

お互い原点を確認して、考えすぎてぐりゅぐりゅに絡まつて見えなくなつてた芯の部分を、絡まつた糸を断ち切ることで取り出した。そして、それまでの道で頑張ろうつて、ホールを送つて、……そのまま別れちゃうんだな。男子は音楽で留学しちゃうし。主人公は日本で美術専科の高校に進学だし。恋愛要素は、予感だけ残して発展せず。

でも最後、男の子のソロティビューコードのジャケットを、主人公が描くつてゆーエピローグがついた。

最後の1冊は、今までの3冊と違つて、主人公をギリギリまで追い詰める自己否定じゃない。否定するだけじゃない、自分が自分を認めるっていう部分を丁寧に描写してた。

身に付けた技術は無駄じゃない、多彩な表現が出来るようになつたんだ。コンクールのための勉強は、楽曲の理解を深めるのにも必要だ。

より自由に、自分の世界を広げるために。技術も勉強もただの手段で、目標さえ見えていれば、見失わなければ、手段に振り回されない。

そんな風に、完結した。

挿絵はね。

うん。主人公以外は、いい出来だと思つよ。男の子が河川敷でヴァイオリン弾いてるシーンとか、音が聞こえそぞと藤埜サンに褒められたしね。

問題は主人公でね。

先生サマに何度もダメだしされて、しかし一度自分がモデルとか聞かされちゃうと、どう描いていいか分からない。

こればっかりは、いくら先生サマに言われてもどうしてもダメで。んで、じゃあ、これが自分なら。と、ふと思いついたアイデアをね。

「…………それが、これですか

ラフスケッチを、ビクビクしながら提出です。もー再提出何度目だか。

「手、だけとは」

「はい。手だけです。

鉛筆や絵筆を持った右手。スケッチブックやキャンバスを持つ左手。それに描いてる途中の絵。ヴァイオリンのスケッチとか河川敷の夕景とか、まるで描けなくてぐけやぐけやに描き潰した紙とか。

描き手の目線です。鏡がなきや自分で見えないじゃん！！ 小説が主人公一人称なら挿絵だつて主人公の目線で良いじゃん！！

「……なるほど。あなたらしいと言えるかもしません」

「だつてね！ 顔とかどうしていいかまるつきり考えられないんだもん！ 課題で描いた自画像思い出すよ。アレはえつぐい課題だつた。

「これなら、他のカットもすべてスケッチブックに描かれた絵のようにして合わせましょう」

先生が、頷いた。おお。合格？

「挿絵全部、主人公が描いたスケッチという演出にします。既に描き上げた分は、予告や他に回せばいい」

え。折角藤埜サンに褒められたアレは、せめて隠れたカバー下あたりにして欲しいな……。

ともあれこれで、最後のお仕事にも田処が付いた。後は描くだけ。うん。いい絵に仕上がる予感。

よつし、と気合を入れなおして、自室で、……先生のマンションの、あたしの部屋に、こもった。

先生は、ルームシェアを言い出してすぐ、本当に引越しその他あれよあれよと手配して、今、あたしの大事な画材その他家財道具一切合財が、ここにある。不要なものは捨てたからこの一部屋で充分なんだけど。

あの時、主人公のモデルとか、いきなり婚約指輪とか結婚とか、テンパッてパニッてるときに譲歩した条件出されて、思わず頷いたけど。

詐欺の手口じゃないか？ 先生立派に詐欺師になれるよ？

……んでも、ソファはフカフカだし、飯はおいしい。

このマンションは賃貸でなく実は分譲だそうだ。ローンもないって、先生の印税収入どうなつてんだ。恐ろしい。

だから、管理費の一部を払わせてもらつてるだけで、お家賃は0円。ルームシェアってそういうモンだけ、と疑問に思わなくも無い。

なんか、こー、……あたし凄い得してん？

実は、このルームシェアには非常に嬉しい特典が。

あたしがネームで構成に詰まつてると、先生サマがアドバイスしてくれるのだ。そうだよね、先生サマは話作りのプロだ。あたしが詰め込みすぎでアレモコレモと考えすぎて肝心のテーマが埋没するんだとか。読者がストーリーを理解するために必要なポイントとか。流石先生です。拝んじゃいます。

ひょっとしてオネーサンよりも的確な指導をしてくれてる気がする。

オネーサンは、あの後問い合わせたらあっさり自供した。曰く、あたしがいつまでも鳴かず飛ばずだから、売れっ子作家との仕事は刺激になると思った。一冊目の後、先生があたしに興味持つてたから、これ幸いと暗躍したって。

…………ひょっとせつ方つてもんがや。ショック療法とか言われても
さ。

あたしの連絡先住所が変わったことを告げるヒンマコと笑うんだから。性質が悪い。

でも、この挿絵が終わったら、またネームを見てもりひつ約束だ。

あたしの出した結論は、少女漫画も頑張る。で、それ以外のお仕

事も積極的に請ける。とにかく前向きに頑張る！！

……挿絵のお仕事に限つては、なんちゅーか、先生サマ専属的な扱いっぽいんだけどや。

先生の本の挿絵が好評で、イラストレーターについての問い合わせがいくつかあつたらしい。けど

あたしは今回のお仕事の契約とかちゃんと確認してなかつたんだけど。先生サマが偽装ペンネームなのにあわせて、実はあたしも名前を伏せてたみたいだ。……献本もらつてたのに。イラストレーターの名前つてカバー折り返しとかに小さく載るだけだから見てなかつたよ。どうせあたしの名前なんて売れてないんだから伏せる意味あんのかと思うナビだね。

その名前での挿絵は、先生と組むときだけにしてくれって。そしたら、結局あたしは実績の無い漫画家だし？ 名指しのお仕事なんかこないし？ …とゆーことで結果的に先生の本だけ。

先生も、当初一年の予定だった覆面ラノベ作家を今後も継続する。ライトノベルつてジャンルの自由度が良いらしい。そうだよね、一口にライトノベルつて言つても、読み捨てから本気で読み解きたい傑作まで、いろいろあるし。

当面は漫画を頑張るから、仕事量的にはこれでちょうどいい。だって先生の挿絵はそれなりに大変だ。先生のご注文も厳しいけど何より編集的意向とのすり合わせが。ライトでキャッチーな萌え絵つてもんについて先生と話し合いたい。

そんなこんなで、結局、やつてることは今までとあんまり変わっ

てない。

けど気持ちが全然違う。

描きたいから描いてるんだって。ある意味開き直つたといふか。

周りと見比べて落ち込んだつてしょうがないし。……「デビュー作がいきなりヒットとか、高校生「デビューとか、いつぱいいるけど。

あたしはあたしのペースでやるしかないし。卖れたいから描くわけじゃないし。……ちょっとは卖れたいと懇うつきもあるけど。やっぱ評価されると嬉しいと思つね。

....ニヤニヤニヤニヤ、だから、ぐりゅぐりゅやがねたって、し
よつがなこしー！

前のめりに頑張る！

○

10

…………。

……いろいろ棚上げしてゐる問題は、ね。

あ、例の醜聞騒ぎは、これもオネーサンの陰謀だつたらしい。どんだけ暗躍してたんだろうか。逆境もスペース！つてオネーサン……あたしも他人事ならそう思う……。あたしには大きさに言つてたけど、実際、一般人が記事になることはほとんど無いんだつて。だから心配無用。……藤埜サンもグルだつたんだよ。オネーサンに脅されて協力させられてたとか言い訳してたけどホントかな。脅すつて何。

……プロポーズ云々のほうは。

先生の態度は今までとほとんど変わらない。あれ以来、変なこと言わないし。

だから多分、絵とか読み手とか、一緒に住んでればいつだって応じられるから、それで事足りたんじゃないかなー、つて思う。

でも書斎に籠る時間がちょっと少なくなつてその分リビングで寛いでいることが多くなつたとか、ご飯連れて行つてくれるときにドライブや遠回りな散歩が増えたりとか、時々思い出したように服買つてくれたりとか、ちょっとしたスキンシップが増えたとか……もう慣れたけど。慣れちゃつたけど。慣らされたとも言つかも知んない。

首輪、もとい、首にかかるつてる指輪は、未だ外れてない。

「Jの留め金外れないんだもん。鏡見ながら弄つてみても首元じゃ良く見えないし、これ知恵の輪じゃないかと思う。先生にお願いしても取つてくれない。実は外し方知らないんじゃないかと疑つている。

オネーサンなら取れるかもしけないけど、オネーサンに頼む度胸は無い。これ以上ネタを提供したくないじゃないか。指輪なんて知られたら。恐ろしい！

だから、あたしが本格的に居候になつただけで、今までと変わつてない。

うん。変化なし。

だから、問題なんか無いってことだよ。

無いよ。ナイナイ。

……『デスヨネ先生？

共同作業？

当初の契約のお仕事は、無事に……いろいろあつたけど何とか無事に終わつた。

そして新たなオシゴトです。今度は最初つから契約ちやんと読もう。絶対。

いつも先生と一人のリビングに、今日は藤埜サンもいる。ちょっと違和感。

先生は、今度は一冊読みきりじゃなくてシリーズを計画中だということ。最初つからキャラクター・デザイン織り込んで話を創りたいんだって。キャラ原案くらいの位置づけであたしも参加する。……責任重大とか、プレッシャーとか。いやいや、前のめりをモットーに！！

なので、そのための企画です。

「前の4冊で高評価を得ていますから、数年がかりのシリーズも大丈夫です」

「おお。藤埜サン大きく出たな。

「やはり主人公の成長を書きたい。語り手は高校生の少年、メインのキャラクター数人の群像劇。学校が舞台」

先生が、眉間にしわ寄せてます。

ふむ。学校が舞台か。部活動かな。

「熱血スポ魂とか?」

あんまり熱血なのはどうかなー、と聞いてみたら、先生は首を振つた。

「いえ。打ち込むものが見つからずにフラストレーションを抱えて
いる」

ほつほつ。

スケッチブックを広げて、鉛筆を取る。

「んー。優等生じゃない。ゲーセンとかで時間つぶしからやつ。でも
普通を逸脱するほどの度胸もない?」

ちよつと悪ぶつてる感じに書いてみる。服装とか少しだらしない。
でも見るからに不良!ってほどでもない。

「ああ。雰囲気は」んな感じです。語り手役には観察者の意味合いで、……」

先生が横に来てスケッチブック覗きこむ。膝に広げてるから、覗き込まれると……顔近い。慣れたけど。

「冷静に見届ける役割なら、メガネ?」

「冷静、ではないですね。古典劇などではしばしば道化が進行役に

なります。そんな役回りで、一歩引いた所から皮肉にアレコレ言つ……、しかし否応なしに巻き込まれて、気付けば主人公の一人になつてゐる、進行するにつれて、自分が動かざるを得なくなる」

「うん。その姿勢だとあたしの耳元でしゃべつたやつになると、ですよ先生サマ。気が付いてくれないかな。

「あ、じゃあ糸田だ。いつも笑つてるような、でも実は笑つてない細目で、それでいやひつて時開眼しちゃうんだ」

オレはそんなキャラじやないつてボヤきながら窮地で友達助けちやうんだよ。ありがとうつて言われたら一度としないつて顔背けるシンデレ。

「……な感じ？」

斜に構えて片手はポケット。背は高いから周り良く見えるよー、でも足元の石に躊躇しそう。

そのまま、主人公たちについてあれこれ聞きながら何枚も描いて、気が付いたら藤埜サンがいなくなつてた。

「あれ？」

はた、と顔を上げた。

「とつぐに帰りました。キャラクターが決まつたら連絡することになります」

「あ、はい」

先生が「一ヒー淹れてくれた。……先生サマの淹れる一ヒーはおいしい。何でだろ?」

「今日は男の子ばっかりなんですか。女の子のキャラはなし?」

描いたのは全部高校生の少年だ。友情、努力、勝利! ……な話だらうか。

「一応考へてはいるんですけど……恋愛要素をどうするかが決まっていないので……」

キタよ、恋愛! 前は期待だけをせといて発展しなかつたし!

「ラブ! 脳キュン! ……とおもお! ……ゼヒやつましう! ……」

そしたらヒロイン思いつきり可愛く描くよ! -

「どうしようかなー、今つてあげたい小動物系? 小悪魔ちゃんもいいなー」

ワクワクと、スケッチブックに向き直った。やっぱ華のあるおんにやのこは描いても楽しいし。

主人公複数なんだから、ヒロインも複数でよくない? いろんなタイプいたら嬉しいよね! -

「つきつけと女の子描いたら、先生が隣に座つた。」

「……今、恋愛をうまく書ける自信がないのですが……」

先生が、マグカップテーブルに置くと、ふかーく息を吐いた。

「え？ なんですか。先生なら大丈夫ですよ！」

藤埜サンに勧められて、今、苦手なハードカバーを読んでいたりするわけですが。

純文学ってエグイ話ばかり、という先入観を、見事ひっくり返された。先生の書くものは、やっぱり尊敬できる。

「……あなたに協力してもらえたし、書けそうな気がするんです」

頭抱えなくともいいじゃん、協力ならいくらでもするし。つか、ちゃんとお仕事なんだから、あたしの仕事でもあるんだから最大限やるよ？ 前のめりをモットーに！

「いぐらでも協力します！ 頑張つて恋愛書きましょう…」

鉛筆握つて宣言したら。

先生サマが、フ、と笑った。

「あれれ？ 久しぶりに見る逝け面だな……？」

「恋愛は、一人ではできないんですね？」

え？

「Jの指輪の意味、忘れてはいませんよね？」

そん、と首にかかるチーンを撫で上げられて。

「ひやあー、ゾワつてなった、ぞわー。」

鉛筆とスケッチブック落つことした。

「そろそろ、忍耐も限界です」

え？ か、顔近い！ ちょ、密着してない？

あれ？ なんかデジャヴ？

「協力してくれると喜ぶなら、私と、恋愛、してください」

耳元でささやかれて。

……唇に、何かが。

共同作業？（後書き）

『萌え絵師への道』ENDです！！

ありがとうございました！――

18歳以上のお客様にお知らせです。
ムーンライトノベルズの片隅に、作者が暴走した小話を投下しております。

心の広さには自信がある。

雑食だ。

妄想ドンと来い。

エロも好物。

肉体的にも精神的にも18歳以上である。

という方は、宜しければ『http://novel18.yosetu.com/n2589u/』を覗いてみてください。

横道。（前書き）

活動報告に書いたやこしょのおじいと藤埜サン視点。

「大した量じゃありません。直ぐです」

呉羽先生の威圧的な物言いに、イラストレーターは臆した様子で原稿に手を伸ばした。

普段は穏やかな口調の先生が、初対面の相手にすら投げやりな態度だったことに驚いて、咄嗟になんのフオローもできなかつた。

まだ若いイラストレーターは、言われたとおりに原稿を読み始めたものの、眉を顰めている。

悪い先入観で作品を読んで欲しくないと思つたが、もう手遅れだつた。

難しい顔をしてゆっくり読み進む様子に多少の申し訳なさを感じつつ、せめて3人分のコーヒーをテーブルに供した。

作家としての『呉羽隆生』は、真摯にストイックに作品を生み出す秀才肌で、紡がれるストーリーは、時に深く、時に優しく、人間の心理を探る。

世に『呉羽隆生』の名を広めたのは三作目、とある文学賞を受賞

して一躍脚光を浴びたが、自分は最初から『呉羽隆生』を知っていた。

本として最初に出版されたよりも前の、雑誌に単発で載つた小作。原稿用紙にして百枚程度だらう短編が、『呉羽隆生』との最初の出会いだった。

犬の散歩をする老人の話。公園で繰り広げられる何氣ない日常。それだけの話だ。

なのに、気付けば繰り返し繰り返し読んでいた。初読の印象は、正直覚えていない。それでも不意に流麗な文章が思い出され、読み返したくなる。読めば読むほど新たな発見がある。違うものの見方に気付かされる。そんな話だった。

その頃の自分は、念願の出版社に就職できたは良いが、希望の文芸編集とはまるで違つて営業に配属され、腐っていた。

目の前のことの大切に着実にこなすことを、教えられた。

『呉羽隆生』はその後も、言つては何だが地味に作品を発表していく。出版された一作目、二作目は、静かに深く人間を描くもので、誰しもが経験する不条理と矛盾がテーマだった。禅問答にも似た問い合わせの文章。読む者の心の中に答があるのだと、その解答は人それぞれだとただ肯定する潔さが、胸に突き刺さった。

しばらくして念願かなつて文芸に配置換えになつた。『呉羽隆生』は他社でしか作品を発表していなかつたけれど、できるなら『呉羽隆生』の作品に携わりたいと強く願つた。

漸う出した『呉羽隆生』の三作目は、今までとはガラリと変わったスケールの大きさで、しかし人間を冷徹に見詰める筆致はそのまま、極限の深層心理まで抉り出していた。

この作家に何があつたのかと衝撃を受けた。

その三作目が、その年、賞の候補に挙がり、そして選ばれた。

人間としての呉羽隆生を見たのは、その授賞式の時だ。

フラツシュを浴びて静かに微笑む青年が『呉羽隆生』と、俄かに信じがたい。それくらい作品でのイメージと本人の容姿がかけ離れていた。

著者紹介で、年齢はまだ若いと知っていた。だが思い描く文学青年のイメージとは、まるで180°。ちがう。

洒落たスーツをスマートに着こなしたモデルのような端正な青年だった。受け答えにも立ち居振る舞いにも品があり、年齢以上に落ち着いた雰囲気で。

勝手ながら、地味で大人しい人物像を思い描いていた自分は、一度興ざめしたのだ。『呉羽隆生』に裏切られた気分だった。

それでも『呉羽隆生』の本が出たら必ず読んでいたし、雑誌も必ずチェックした。

生きた人間の心を表現することでは、当代随一の作家だと評価していた。

文芸での仕事にも多少慣れたころ、編集部内の飲み会で作家の話になつたときに、酔っ払つたあげくに『呉羽隆生』について熱く語つた、らしい。酒に飲まれていたので覚えていない。

が、その翌日、編集長がそんなに好きなら当たつてみる、と一つの連絡先をくれた。

そこからは、自分でも可笑しくなるくらい必死だった。女性を口説くときにもここまでという熱意で猛アタックした。

編集の立場で接してみれば、呉羽隆生は厳格で真摯で、作品どおりの人物だった。外見に惑わされた自分を恥じた。

初めて担当した『呉羽隆生』の作品は、穏やかな日常を優しくつづった小作で、何度も何度も繰り返し読んだ犬の散歩をする老人の話を髪髪とさせた。

イラストレーターは、どうやら文字を読むのが遅いらしい。目線が何度も同じところを行つたり来たりして、その分文章を味わつて読んでいるように見受けられた。

最初はしかめ面で読んでいたが、徐々に物語りに引き込まれていく様子が如実だった。

その手の内の原稿を窺わずとも、クルクル変わる喜怒哀楽の表情で、物語のどのシーンまで読み進んだのかわかる。

まだ3分の1程度、この調子なら読み終えるのに一時間以上かかるだらうと軽食を用意して戻ったとき、気付いた。

先生の空気が、柔らかくなっている。

先生は、主人公と同じ表情になつて物語に没頭しているイラストレーターを、じつと見詰めていた。

唐突に理解した。

自分は、編集という立場で原稿を読んでいた。ただの一読者として物語に没頭できる立場ではなくなっていた。

評論だの批評だの評価だのそんなものではない、ただ、綴る想いが誰かの心に響くかどうか。

作家が物語を綴る、原点ではないだろうか。

今、目の前の人にはこの物語が確かに届いた。そのことが今の先生にとってどれほど重要か。気付かなかつた自分を内心罵倒して、百面相するイラストレーターにこつそり感謝した。

平素、充分すぎるほど礼節をわきまえている先生が、最初投げやりな態度だったのには理由がある。

先生は、受賞以降、爆発的に売れはしないものの、順調に良い作

品を世に送り出し、出版不況にあつて売れつ子作家と呼ばれるまでになつた。

それでも先生はストイックに、独自の世界を深めていた。

そんな折、先生の本に映画化の話が持ち上がつたらしい。他社のこととで詳細は分からなかつたが、その大手出版社の過去の映像化作品などを見るに、いかにも商業ベース、派手な宣伝キャンペーン重視で、肝心の中身は原作ファンからすると噴飯物の出来も多い。もちろん良いものもあるのだから一概には言えないが、やはりその話を聞いたときには危惧が先に立つた。

結果的に、悪い予感が当たつてしまつた。

事の顛末は、腹が立つので詳細には説明しない。だが、この一件で、先生が業界全体に不信感を持つてしまつたことは致し方ない。

その後先生が、他社を含めて、新規の仕事は請けず継続中の連載だけに絞つて、しかもそれが終わると新たな連載は断つていると聞いて、焦つた。

もしかしたら、このまま筆を折つてしまつのではないか。

いや、書くだけなら、別に出版業界にこだわる必要はない。むしろビジネスの都合上制約が多い。

もし先生が業界に倦んでしまつたのだとしたら。

作家『吳羽隆生』が、消えてしまつのではないか。

その可能性に恐怖して、ない知恵を絞つて、ビックリかして先生を引き止めたいと思った。

編集長や同僚にも相談して、苦し紛れに出した企画が、名前を伏せて別ジャンルのライトノベル。

全く乗り気でなかつた先生に、拝み倒すよつにして一年間の猶予をもぎ取つた。

グズ、と鼻をすすつて、ペラリと原稿を捲る。イラストレーターは、妙齡の女性にはあるまじき顔で泣くのを堪えている様だ。終盤の別離のシーンだろうか。

コレだけ素直な表情を見せる成人女性も滅多にいないだろうと、感心してしまつた。引き結んだ口の端が震えている。

「ひそりティッシュの箱を前に置いたが、多分気付いていないだろ？」

横目で先生を見やると、読者の反応を見逃すまいとするように、じつと見詰めていた。

その口元が僅かに笑んでいて、……先生は、大丈夫かもしけないと思つた。

そして、イラストレーターが最後の一枚を読み終えた。

開口一番何を言つのかと、つい身を乗り出してしまつたが、彼女は間を置くよつこ、ティッシュで鼻をかんだ。

……この年の女性が人前で堂々と鼻をかむのも、そういうれば珍しいような。

ほう、と目を伏せて息をついて、彼女が口を開いた。

「はい。スカートは膝下10cm、了解しました。是非とも色は紺じやなく黒にしたいと思います。スカーフは縁です。リボン結びじやなくタイにして。髪の毛はストレートロングを後ろで一つに結わえて前髪はパツツン、眼鏡は黒縁」

物語の感想は、と身構えていたら、挿絵についての話だった。

「ついで作中にはないですが、前歯に矯正器具つけていいですか許可を求めながらも、その口調から拒否されるなど思つてもいいのだと分かる。

先生が、黙つて満足げに頷くのを見て、苦し紛れのこの企画が成功するのを確信した。

後日、上がつたイラストを見て、正直舌を巻いた。

文章を受け取ることに慣れている自分が、無意識にビジュアルというものを軽視していたのだと知つた。

同じよひにイラストに魅入っていた先生が、急に原稿を手直しする、と言つ出した時には驚いた。

しかし、添え物に過ぎないと思つていたイラストがこれほどの説得力を持つなら。文章での説明が不要になる。余分な説明をそぎ落とせば、もつとテンポの良い展開になる。

『じみじみした編集部の隅の空き机で、先生は、むしろ嬉々として完成原稿に線を引いていた。

……あの『呉羽隆生』に、完成原稿の手直しをさせた。

イラストレーターは同期の緒峯の紹介だったが、来歴を詳しく聞いておこひ。

「……で？ その後どうよ？」

騒がしい居酒屋は緒峯の指定だ。地方の酒が揃っているところと緒峯の馴染みの店らしい。正直、酒にはあまり強くないのでも良い。

「その後、とは？」

その表情で何が言いたいのかは分かっているが、すんなり答えるのもどうかと思うので、聞き返す。

「やあねー、あの一枚目作家のことに決まってるじゃない！ ウチの娘に余計なことしてないでしょうね？」

同期の緒峯は、基本、酒に飲まれるような真似はしない。普段は上手に酒を飲む。が、例外がある。非常に機嫌が良いときと、逆に機嫌が悪いときだ。前者は笑い上戸で周囲に酒を勧めまくり、何人も潰す。後者は、絡む。

今日はどうやら機嫌が悪いらしい。そもそも、緒峯がずっと面倒を見てきたらしい漫画家を、いちばんの都合で急に引っ張ったのだから。

「大丈夫だろう？ 先生はおかしな真似はしないよ」

揚げ出し豆腐を突付きながら、ソコだけはきつちつ主張しておく。

「ふうん？ どうだか。未婚の女の子引つ張り込む時点で、充分おかしな真似だと思つけど？」

「お前だって協力してたじやないか！？」

不満げに言われて、思わずマジマジと見返す。

先生が彼女についてあれこれ質問するのに、丁寧に答えていたはずだ。仕事のために近くにおきたいという提案にも頷いて、それなりにうすれば良いと、こう言つてはアレだが、いろいろ策を弄したのは緒峯本人だったはず。

「そりゃあねー。理性では、あのイケメン作家センセーとの仕事は、良い刺激になると想うわよ？ あわよくばコレで一息に成長してくれたら、と思う。……でもね！」

ドン、と拳を叩きつけられたカウンターが響く。

「…………フフフ…………あのイケメン、あの娘の意思を無視して仕事以上のちょっかいに出したら、一一度と皿の皿を拝めないようにしてやる……」

「……」

その地の底から響くような咳きに背筋を凍らせつつ、揚げ出し豆腐を頬張ることで、聞こえない振りを貫いた。枝豆入りの餡が旨い。ふむ。豆腐と枝豆の意外なコラボだ。ママメメしている。

脳裏に、原稿を読んで感情のまま百面相していた様子を思い描く。確実に、彼女は隠し事が出来ない性質だ。

一度と田の田を挾めないってどんなだ。知りたくない。そのときは自分も一蓮托生だうつ。

……先生。自分は先生を信じています。女性に不埒な真似は一切しないですよね。しないで下さい。絶対に！

温くなつたビールで、嫌な予感を紛らわせた。

「……一応、彼女も同居には異論は無い様だぞ。仕事用について、パソコンや画像材やら運び込んでたからな。嫌ななりそこまでしないだろ」

電話を貰つて車で荷物を運んだのは、今日の話だ。先生のマンションで、特に遠慮した様子も無かつた。

「だからねー、あの娘、ホンシト素直なのよ。仕事のために必要ですーつて言われたら、疑いもしないでしょ？ 電話とファックスで済む話だと考えないのよ！ 頭は悪くないはずなのに！ そーゆーことが漫画にも現れて、イマイチ薄っぺらいのよね。捻りも無いし。素直なトコは長所なんだけね」

なるほど。

一冊目のイラストが上がつた後、彼女について緒峯に聞いた時に、デビュー作も読んだが。

24pの読みきり、所謂ラブコメで、典型的な女の子と典型的な男子の典型的なストーリーだった。絵の上手さで読み進めるが、読後印象に残らない。

「まー、本人もどうにかしようと頑張ってるんだけどね、やーつぱ、ネームは、こー、なかなか、ねー」

デビュー前から担当しているのだと聞いた。多分緒筆にとつても、初めて任された新人じゃないだろうか。思い入れもあるだろ？。

「なら、先生の側でその作品に触れるのは、良い機会じゃないか」

「そう思つたから色々協力はしたけどね！　でもね…！…………んう！　なんかこー釈然としないのよ、あのイケメン作家本気で仕事だけで同居とか言い出したんだと思つ？　マジ絵だけ？　普段からソーゆーことする人？」

いかん、目が据わつてゐる。

「先生は、作品のために骨身を惜しまない人だ。今回はあるの絵を見て完成原稿を手直ししたくらいだし、絵を気に入ったのは間違いないだろ」

宥めると、いきなり胸倉を掴まれた。

「あのセンセ枯れちゃつた歳でもないしあの娘だつて独身だし！　アンタ、見張つてよね！　あんにやうめが助平な真似しないよう監視してよね！！」

……酔っ払いだ。今日はまだそこまで飲んでいないはず、……と思つたら、そうでもなかつた。日本酒を冷でどれだけ飲んだんだ。いつのまに。

「わかつたわかつた。……先生はそんな真似しないと思うがな」

アンタはあの娘の可愛さがわかつてない、と叫ばれて、居酒屋中の視線を浴びたこととか、緒峯は明日には忘れているんだろう。

同期入社で、未だ転職していなのは自分と緒峯だけ。一人だけの同期だから何かと交流もあるわけだが。

飲みに付き合つたびにいつも面倒なことになる。

酔っ払いを、しかも一応は女性を放り出すわけにもいかず、タクシーを拾つて緒峯のアパートの住所を告げる。緒峯と飲むと、大抵こうなる。いつものことだ。送つていけば終電は逃すのもいつものこと。タクシー代だってバカにならない。

社から近い緒峯のアパートは、入社当時から、同期で飲んだときには皆で転がり込む定番だつた。やがて同期が一人一人といなくなり、結局生き残っているのは一人だけ。でも飲み会の後になし崩しに泊まることは今でもしばしばだ。競争相手がないから、リビングのソファに悠々と眠れる。

仕事で締め切りが押せば社の廊下ででも寝ることを思えば、ソファなんて上等だ。

ふと、そう言えば自分も『枯れちゃつた歳でもない』し、緒峯も『独身』だと思いつく。それで今まで間違いが起きた例は無い。

先生も大丈夫だ。

納得した。世の中の男がみんな狼であるかの様な認識は、間違いだ。

迷い道。壱（後書き）

ドコまで主人公の名前を出さずに書けるのか。藤埜サン視点での一番のネックに今更気付いた。

迷い道。式

いつもの癖で、電話だといつのに深くお辞儀して、受話器を置く。

先生からの電話は大抵用件が端的に纏められているので、非常にそつけない。

走り書きのメモを見て、思わずため息が出そうになる。いけないいけない。先生のサポートは万全でなければ。

『ゴーディト。サロメ初』

我ながら、自分でも時間が経つてから見直したら判別不能だらうメモだ。

今回、先生に頼まれて集めた資料は、戯曲『サロメ』に関する資料と、サロメのモチーフとされている聖書の登場人物『ヘロデイアの娘』に関する資料。

そのなかで、『ヘロデイアの娘』の絵画を纏めた画集がたまたま目に付いたから、何の気なしに他の資料と一緒に送付した。

そうしたら、その画集に『ゴーディト』の絵も混ざっていたようだ。自分は宗教に詳しくないが、先生が言つには、ヘロデイアの娘と同じ聖書の登場人物ではあるが、別人だそうだ。

このゴーディトについての詳細資料が手に入るなら、と求められた。

そして、サロメだ。

初演の詳細。確かに、最初は未完成で上演されたはず。そして脚本完成後初の公演ではセンセーショナルな内容に非難が集まつたそうだ。

先生は、基本、資料集めや取材は、ほとんど依頼してこない。全部自分でやる。今回は、「こちらが無理に頼んだ企画でもあるので、可能な限り関わらせて欲しいと、自分から頼んだのだ。

だからこそ、生半可な仕事はできない。求められる以上の資料を揃えたい。

今回のモチーフだと聞いた、サロメ。

一体どんな話に仕上がるのか。

一作目は、ミリアム（旧約聖書に登場する女預言者）とカツサンドラ（ギリシア神話に登場するトロイアの王女。悲劇の予言者）についての資料を搔き集めた。

その資料がどう活かされたのか。先生独自の解釈で主人公の造形が出来上がったのだろう。

出来上がった原稿を読んでみると、自分が調べた『ミリアム』や『カツサンドラ』から漠然と受ける印象とはまるで違う話だった。

だから今回も、きっとサロメの生々しい印象とは違つ話になるんだろうと思つ。

それに、イラストも。今回は最初から絵を念頭にストーリーを書いてみたいと先生が言っていた。これほど先生が期待する絵のものに、もちろん自分も興味がある。だが、その部分については、関わらせてもらえなかつた。

作品については自分で説明するから、彼女に何か聞かれても答えないように」と先生から指示されている。

いきなりヌードはありかと電話で問われたときには面食らつたが。
……先生は彼女に、どんな説明をしたんだろうか。

いつもの居酒屋で、いつもの顔。

「それで？」

定例になってしまったのだろうか。先生の個人情報をペラペラしゃべるわけにはいかないのだが、どうして自分は緒峯に尋問されているんだろう。

田の据わった緒峯に生ビールを押し付けられ、仕方無しに口をつける。酔ったからといって口が軽くなる性質ではないことは緒峯も知っているはず。だからこれは単に緒峯の機嫌が悪いのだろう。

「……それでもなにも。先生の要望どおりに、絵を描いていてくれているようだが」「うだ。

先日、資料の件で電話したら、一田電話がつながらなかつた。何事があつたのかと後で聞けば、ずっと絵を描くところを見ていたそうだ。

迷いつつも線を描き、そして斜線で破棄する。絵そのものよりも描いている姿に、先生は興味を持つたらしい。絵を描く主人公というのも面白やうだと電話口で亥いていた。

頼まれたユーティーの資料について、送付した田と口頭での簡単な説明で、電話を終えた。

だから、緒峯が知りたがるようなことは、話題には上らない。

「……この前出た本、読んだんだけどね

緒峯が、芋焼酎を煽りながら言へ。

「なんつーかわ」

「言いかけて、ヒビチリを一口。その思わせ振りな間に、ぎくり、とした。」

「正直にものを言えず、言葉を矯正される主人公ってや。セーラー」と?」「

ああ。やつぱり。

「……なんでそつ思う」

「バカにしないでよ。あんだけハツキリテーマのある話、読めば分かるじゃない。それに、一応業界の噂話も小耳に挟んでるし。なんか大手とトラブったらしい程度にはね」

そうだ。緒峯は、今は漫画編集だが、かなりの読書家でもある。主にミステリー やサスペンスを読むが、他ジャンルだって人並み以上には読んでいる。

その辺が、自分と話が合う部分だ。他はまるで180度違う。

普通に読解力のある読者が、裏の事情を知つていれば、当然、推

測もできるだらう。だからこの別ペンネームだったのだが。

迷つた末、他言無用と前置きして、事情を話した。

「……それで、他社含め仕事を整理していた先生に、摔倒して、この企画だったわけだ」

緒峯は黙つて聞いて、ふむ、と頷く。

「それで、あの子なのね。……あー、なんか分かっちゃつたなー。くつそぢうじょう同情ポイントが

同情？ どうじう意味だ？

トマトとモツツアーラチーズのサラダを突付きながら先を促す。バジルの風味がアクセントだ。

「んー。……まあ、捻くれ者は、『素直』に憧れるのかもね」

ある意味、同病相哀れんじやう。

そう呟いて、また違うグラスを煽る。芋焼酎の次は濁り酒か。どうしてそういらっしゃらないものを選ぶのか。

「…………うう。認めたくないけどなー。んでもなー。悔しいこと、作家としては確かになー、筆折つてほしくはないわなー」

ヤバい。語尾が怪しくなってきた。確かに漫画月刊誌の仕事のペークが過ぎたばかりのはずだ。いつもの酒量にはまだ早いが、疲労が溜まって酔いが早く回っているのだろう。

耳までほんのり赤い。

「……あたしは、ちょっと静観するから……アンタは、さつちり見張つてよね」

それでもきつちり釘を刺すあたりはあっぱれだ。普段から比較して格段に迫力の無い脅しを最後に、緒峯はテーブルに懷いた。

こんなところで寝られたらかなわない。

急いで会計を済ませて引きずるように出る。幸いタクシーは直ぐにきたのだが、乗り込むと緒峯は早々にダウンした。

……仕方ない。また、アパートに放り込んでおくか。

運転手に行き先を告げ、勝手に緒峯のハンドバッグからアパートの鍵を探り出した。

ひょっとして。

自分は緒峯の酒の面倒を見なければならぬいめぐり合わせなのだろうか。

自分が一緒だから緒峯が安心して潰れる、という可能性は、極力考えない方向で。

カッサンドラ。正しいことを言つても受け入れられない予言者。一般的な認識は『悲劇の女予言者』だ。

一作目の主人公は、当初、抑圧され思つことも口に出せず、相手の顔色を窺つて相手の望むように振舞つっていた。

だが、先生の描く主人公は、最終的にゆるぎない『自分』を見つけた。

自分の心までは偽れない。

理解されなくとも受け入れられなくても。

心からの言葉を、止めるなど、できない。

イラストレーターが、堪えきれずぐしゃぐしゃの顔で涙を流したシーン。

主人公が叫ぶ言葉は、あれは、先生の心からの言葉だ。

珍しく、打ち合わせで先生の家に来ている。普段は編集部や外の店に足を運んでくれる先生が、今回は「こ」を指定したのは、イラストレーターのためだろうか。

淡々と進捗状況を確認して、挿絵の話に進んだ。どんなイラストになるのかと内心身構えていたら、意外に、平凡だった。

先生が良しとしているので異論はないが、少々、肩透かしを食らつた気分はある。

ただ、このままでは地味すぎるるので、絵面を華やかに、と希望した。

「ちょ、平凡、且つ、華やか、って矛盾してませんか？」

慌てて異を唱える愕然とした表情。それを横目に、先生が薄く笑うのが分かった。

……「こ」は先生の思惑に乗るべきか。

「大丈夫です。頑張ってください」

「先だけ、と自分でも分かる励ましに、彼女はパクパクと口を動かすが、言葉は出でこない。」

「あなたは、どうやら追い詰められた方がいい仕事をするようですが、もつと追い込まれてください」

横から追い討ちをかけた先生を、彼女がギロリと睨む。迫力はないうが度胸はあるようだ。

「そうなんですか？ 緒峯さんは、プレッシャーに弱いタイプで中々成長できないと言つていましたが」

睨みつけるのに、一緒に頬も膨らませたら駄目だろつ、と、吹き出しそうになるのを堪えて、微妙に話を逸らした。

「踏みつけ方が甘かつたんでしょう。麦ではなく雑草です。結構図太いですよ。いきなり連れて来られた他人の家で、すっかり寛げるよつです」

……先生も、なかなかどうして。仕方無しに、その路線に乗る。

「なるほど。確かに血色は前よりよくなつですが」

ああ。彼女の中で、自分も敵認定だ。

「これも作品のための投資です。珍獣一匹飼つたと思えばコレぐら

い

……先生。流石にそれは返答に困るんですが。

一瞬、どう返すべきか迷つて、沈黙すると。

「ちよつとちよつとちよつときから黙つて聞いていれば好き勝手なことを…！ 誰が飼われてるんですか！ あたしがここにいるのはオシゴトのためでしょ！？ もーイイですわ！ と描き上げます描いて終わらせます、そんでバイバイです…！」

彼女は憤然と立ち上がり、テーブルの上に広げられていたスケッチブックを掴むと、足音も高く部屋を出て行つた。バシャン、とワザとらしく音をたててドアが閉められる。

その背を見送つて、そして先生に目を戻すと、なんとも言えない柔らかい表情で彼女の去つた方を眺める先生が、そこにいた。

「……先生？」

思わず声をかけてしまつて、そして先生がいつもの穏やかな表情に戻つてから、もつたいない、と思った。あんな表情はなかなか見られるものではない。もともと端正な顔だちだが、どちらかといえば作り物めいた整い方で、内面を窺わせない。

「失礼。上手く合わせていただいて助かりました」

いつもの顔で、先生が言つ。

「乗せるのがお上手で。……結構負けず嫌いなようですね」

Jの業界では、その方が良い。むしろ緒峯が過保護だつたんじやないのかと思う。

「やつですね。おかげで、一から書き直しです

え？

打ち合わせでは、順調に書き進めていたところ話だつたのでは。

驚いて先生を見ると、苦笑して数枚の絵を取り出した。スケッチブックから破り取つたらしい紙。

「これが、当初予定していたストーリーの、絵です」

ぐしゃぐしゃに斜線で潰されているが、下の絵は分かる。

一画で塗つなら、痛い、絵だった。

「追い詰めて、こいつの絵を描いてもらおうとしていたんですけどね。実際、途中までは描いていたんですが。……何か違う、と思つた様です。『常軌を逸した露出』への解答は、これではないと」

先生が、痛みを堪えるよつと、それでいてどこかスッキリしたような顔で、絵を眺めてくる。

「……サロメやヘロディアの娘のイメージには、この絵のほうが近いかもしません」

先生の眼差しの先にある絵の、塗りつぶす黒の隙間に残つた虚ろに荒んだ瞳。身勝手に、罪の無い人間の死を願つよつた人物は、こんな目をしているのではないだろうか。

なら、どうして先生はこの絵で良しとしなかつたのだろう。

先ほどの打ち合わせでは、もつと普通の、可もなく不可もない少女の絵で、話を進めていた。

「外見の否定、とは、他人の目に映る自分の否定です。常軌を逸した露出とはつまり他者からの評価の破壊で全ての否定であり、含まれる真実の自分すらをも否定する。と、そんなストーリーを用意していたのですが。……彼女の解答は、ただ素の自分であることだった」

……なるほど。

「それで、サロメではなく、ゴティトなんですね」

追加の資料で調べ上げた『ゴティト』は、領地を守るために、敵軍の司令官の下へ、一心を持って降る女領主だ。目的のために屈辱に耐え、そして敵将の首を掲げる。

逆境にあって、ゴティトは自分を見失わない。

「ですから、書き直しです。最初から、今回の主人公は、絵が先のつもりでしたから、これも想定内です」

「いつそ面白そうに先生が言つ。最初のプロットを捨てるといつのに、晴れ晴れとした顔だ。

捻くれ者は、『素直』に憧れるのかもね。

緒峯の声が、思い出される。

「…………では、スケジュールは予定通りで大丈夫でしょうか。もともとかなり余裕がありましたし」

「絵の進行に遅れないように、書き上げます」

断言する先生に、前回の地獄を思い出した。

近年稀に見るギリギリっぷりで、これは駄目かと諦めかけた。執筆もなかなか進まず、何とか中身が書き上がったかと思えばイラストで躊躇、産つぶちでやっと納得のいくイラストレーターを見つけられたかと思えば完成原稿を更に手直しまでして。

あんな地獄は滅多に無い。今回は余裕がある。大丈夫だ。

上がった挿絵を見て、また先生が完成原稿に手を入れたとか。

前例の無い、カバー下にもイラスト印刷とか。

余裕があつても対処に四苦八苦する破目になるとは、思っていなかつた。

「んつふつふー、読んだわよー」

呼び出された居酒屋で、緒峯は既に出来上がっていた。

どうやら機嫌は良いらしい。この場合、酒を押し付けられるのは確実だ。終電までの時間と明日の仕事を瞬時に計算し、最後まで付合いつ覺悟を決めた。

「じゃあ、生一つと、……チーズ味噌? ってどんな?」

本日のお勧めメニューを眺めて、田を引いた酒肴をいくつか頼む。いつもながらこの店のメニューは取りとめも無い。が、眞いことは確かなので問題はない。

「じゃ、かんぱーい!」

早速運ばれたジョッキとワイングラスで乾杯した。

「……何に?」

何でこんな上機嫌なのか。呼び出しの電話もかなりハイテンションだったが。

「そりゃー、あの娘の仕事に決まってるでしょー？ 良い仕事したみたいじゃない」

「もう読んだのか。発売日は来週だが」

現物が刷り上ったのは、一昨日だ。昨日、先生に届けに行つた。

「一冊と、ちょっと変わったわよね～？ あれ、あの娘のせいでしょう。全体的にちょっとだけ柔らかくなつた。イラストに引き摺られちゃつた？ アッハツハ～！」

……既にどんだけ飲んだんだ。

「そんなこともない。もともと、今回はイラスト先行で書く予定だったわけだし」

実際、先生は書き直しているわけだが、少し癪なのでそこは伏せておく。

ちょうど良いタイミングで、チーズ味噌とやらが運ばれてきた。どうやら、チーズの味噌漬けらしい。チーズと味噌のくどさを大葉がフォローして、酒肴としては、ビールよりも日本酒に合いそうだ。きりっと冷えた辛口。如何せん自分は日本酒なり一合も飲めばヘベレケになつてしまつ。微妙に残念だ。

「んで、その後の予定はどうなのよ。いつもねー、名指しでアシの仕事とか、断るのもキツイんだけど。あの娘、絵は確かだし手は早いし仕上げは丁寧だし、おまけに修羅のギスギスした空気和らげてくれるし、すつ“”い貴重なんだけど」

横からチーズ味噌をつまみながら、緒峯が言ひ。

なるほど、確かに。絵の知識はないが、スケッチブックに落書きをしているところを見るに、フリーハンドでも人工物や風景を迷い無く描くのは、凄いことなんだろう。

「そうだな……。今は三作目に取り掛かっているから、なんとも言えないが」

ボディビルを取材すると先生が言ったから、いくつかのジムを調べて紹介した。ジムに取材の調整をかけたらまたま全国大会が近くあると教えられ、その件も先生に伝えた。

……昨日献本を届けに言ひたときの、彼女の様子を思い出してしまった。ボディビルに並々ならぬ思いがあるようだ。

深呼吸して、頭を切り替える。

「三作目も順調のようだし、スケジュール的には前倒しに進んでいる。これが終われば、四作目に取り掛かる前に、一区切り入れられるかも知れない」

「ふうん？ そんで、あのイケメン先生、どーよ？」

……先生の、あの、なんとも言えない表情を思い出しちゃった。

一瞬の沈黙に、緒峯はなにか嗅ぎ取った。しまった。

「ちょっと、ジーなったの？ まさか……？」

「いや！ 何も無い！ 何も無いナビー！」

「ナビ？ 何？」

「…………でも、その、…………なにか、は、…………ある、かも？」

自信なく濁した言葉にて、即座に胸倉つかまれた。

「ビーウー」とか、きっちり聞かせて欲しいわねえ～？」

絡み酒か？ いや、これは酒がなくて済むのならいい。

しぶしぶ、打ち合わせのときの先生の様子を話した。

正直、自分では判断に困つてもいたので、緒峯の意見が聞ければ
ありがたい。

「…………と書つわけ。先生は、なにか思つていろがあるんじやない
かと」

個人情報を漏らすこと後ろめたく思いながらぼそぼそと話す。

「…………

「いや、だから何かあつたわけじゃないんだ。彼女がビツビツといふ話をじやなく

緒峯の沈黙が怖い。

そりやそつだ。年頃の未婚のお嬢さんを、半ば騙すように連れて来ているのだから、万が一のことがあってはいけない。その辺は先生を信用してはいるが。

「……ふつふつふ。これは面白い

「は？」

「面白いじゃないの！ 王道だわ！ 振り回されるイケメン！！」

いきなり握りこぶしで何を力説している。

「ちょっと、今度ゼビ先生と話させて頂戴！ あの娘のこといろいろ教えてあげるからって。口と次第によつちや協力するからって！ あつはつは、天然に振り回されてヘタレに転落する美形！」

「……筋道はともかく、結論を教えてくれ」

緒峯の思考を理解しようとする努力は放棄している。

「あの先生があの娘にラバつてことよー ザマー ミロー！」

そのやまーみろが理解できない。が、先生が彼女を気に入っているらしいことは、最初から察していた。それが女性に対するものかは不明だが。

「いいからいいから。兎に角あの先生サマに伝えてよ。あの娘のこといいろいろ教えるからって。それで応じれば確定よー」

まあもう決まったようなもんだけどね！

と、緒峯は上機嫌でグラスを干す。どうしてそこで上機嫌なのか。
次はウイスキーをオーダーしているし。

「しかし、もしやうなら、彼女をあのままあそこに住まわせていいのか？」

先生がそう言つ意味で彼女に好意を持つてゐるなら、一つ屋根の下なんて。

「ああ、うん、そうね。じゃあこいつ見てよ。あの娘、男の人苦手なのよ。ギラギラハアハアしてのなんか苦手どころか嫌惡してるわよ。下手に手を出すと確実に嫌われるから。真っ向から挑むと必ず逃げられるから慎重になつて」

……一体、緒峯は彼女をじつしたいんだ。

「あーゆー計算できるタイプは、確実に手に入れようと思つたらトコトン慎重になるでしょ。迂闊に手え出すと一生手に入らないわよつて脅しといて」

脅す。いや、だから、先生が本当に『やつ』なのか、まだ決まつたわけでは。

緒峯がウイスキーの氷を指で突付く。

「ま、応援するか邪魔するかは、話してみて決めるわ

……………どっちも御免だと思つのは自分だけだろつか。

結局、つぶれた緒峯を背負つて、いつもの如く、緒峯のアパートに向かうこととなる。

バイパス。式

なんだかおかしな方向になつてゐる。

先生と緒峯が頻繁に連絡を取り合つてゐるらしい。

……嫌な予感がする。

先日の飲みの後、緒峯の連絡先と伝言を先生に渡した。半信半疑だつたが、どうやら緒峯の言つとおりだつたらしい。即、先生から電話があつたそうだ。

なんと言つか……、嫌な予感しかしない。

本音を言つてしまえば、先生の創作意欲を刺激してくれる彼女がこの先も先生と関わりを持つてくれるなら、大歓迎だ。

しかし、コトの経緯や現状を鑑みるに、だまし討ちのよつた罪悪感が否めない。

最初はどさくさに紛れて強引に仕事を引き受けさせ、更には本人にきつちり説明もなしに4冊分を契約させた。ライトノベルのイラストとしては破格の稿料とはいえ、徹夜明けの正氣でないときに契約の話をしたのは、詐欺の手口に近いような気もする。

しかも強引に同居させているし。

ただイラストの仕事という以上の無茶振りをしている気がしない
こともないようなあるよひな……。

……まあ、彼女も子供じゃないんだし。嫌なら自分でキッパリ言
うだらうし。大体あの先生に口説かれて落ちない女性がいるとは思
えない。最終的に合意なら問題ないだろ。多分。恐いぐ。きっと。
……そุดと良いな、と願つている。

『嫌な予感』は、当然予感だけで終わるはずが無かつた。

予定外の先生からの連絡は、仕事についてではなく、それ以外の
用件だった。

他社の担当に、余計な誤解を与えた、といつ。

問題は、その担当が例の「ゴシップ騒ぎ」の時の出版社だといつ、そ
の一点だ。

「ゴシップの悪夢再び、となるかどうかは微妙だが、まあ警戒は必
要だらう」という程度ではある。

先生と電話をつないだまま、即、緒峯も呼び出して巻き込んだ。
……が、緒峯を巻き込んだことを、直ぐに後悔した。

「じゃあ、利用しちゃえば?」

……けしかけてござる。

愕然としている田の前で、電話の先生と緒峯が不穏な計画を練り上げていく。いや、計画というには雑なのだが、その目的が不穏だ。

「大丈夫よ、そうですって言い切っちゃえば、あの娘が疑わないことは確実だから。この際外堀は埋めとけば良いじゃない。実際、可能性は低くても記事にされちゃうかもしないってトコは本当なんだし、そこはきっちり手を打つておかないと。まああつちだつてこれ以上売れつ子作家の機嫌を損ねようとは思わないでしちゃうから、何もなければ外堀埋めただけ丸儲け」

……電話の向こうで、先生が何を言っているのかが非常に気になる。

先生。希望なんですが、緒峯の甘言に頷かないで下さい。お願ひします。

「おっかけー、じゃあ後は藤埜サンがもつともらしくあの娘の危機感煽るつてことだ」

ああ。いじつして片棒担がされることになるのか。

いや、もうこの際、片棒でも共犯でもビリでも良い。

最終的に合意なら問題ない。ない、とこり」とじょつ。

翌日、そ知らぬ顔で先生宅に呼び出され、さも深刻気に振舞つた。

緒峯の言つた通り、彼女は疑う素振りも見せず「口口」と騙された。説明したことは、確かに殆どが事実だ。某出版社の不始末など脚色する必要もなく酷い話で、その後の「ゴタゴタも事実。

ただ、先生の疑惑やら緒峯の暗躍は、黙つているだけのことだ。

一通りの事情を話し終えたところで、タイミングよく先生が書斎から出てきた。

……はい。これから外堀埋めに行くわけですね。彼女に冷静に考える時間を与えずに。

唚然としつつも先生に促されるままに実家に電話している彼女が、……下手な詐欺師に騙される前に先生に守つてもうつほうが彼女のためかもしねい。

女性に対して容姿を讃つなど失礼な物言いであることは承知している。が、敢えて正直に言つてしまえば、あのイラストレーターは、なんと言つか、その、……適切な言葉が浮かばない。

分類するなら、可愛い系。

多分人並みに着飾つて化粧もすれば綺麗になるだろう。が、今までを見るに、おしゃれという言葉をまるで実践しないタイプだ。

彼女のスタイルは基本清潔はあるものの、ラフでカジュアル。絵を描くという仕事上、汚れやすいことを考慮しても、あまりに無頓着ではないかと思う。

異性の目を一切気にしない、もしくは、異性の目を忌避しているスタイルだ。

商業でそこそこ鍛えられたから、この印象は大きく外してはいいなと思つ。彼女は、恋愛に消極的だ。

そして、真意は不明なれど、目を光らせている緒峯がいる。

つまり先生は、非常に困難な茨の道を選んだわけだ。

と言つた。

「…………泊りがけ?」

明日に簡単な打ち合わせを予定していたのだが、夜更けにキャンセルの連絡が来た。その理由が。

『はい。ちょっとドライブに出て、そのまま帰れなくなりましたので、こちらに一泊します。明日の午後には帰る予定ですから、打ち合せの時間を午後以降にずらして欲しいのですが、可能ですか』

『いやいやいやいや、ちょっと待て、チョットマテ!』?

『急ぎの用件があるよつながら、朝一で帰りますが』

『いえ、急ぎません、大丈夫です!』

『そうですか。では、帰つたら連絡します。遅くとも毎過ぎには帰る予定ですので』

『はい、お待ちしてます!』――――――

いつもの癖で、お辞儀をして電話を切る。

イヤ待てよ自分、電話切つてよかつたのか、先生にもう少し詳細を突つ込むべきだったんじゃないのか、せめて朝一で帰つてきちらづべき、違うそれじや手遅れだろ!?

フフフ……あのイケメン、あの娘の意思を無視して仕事以上

のひがつかこ出したが、一度と皿の皿を掉ねなごりついでやる……

懸念と共に、右耳が聞こえた気がした。

バイパス。肆

打ち合わせは、出版社近くのカフェを指定された。

どんな顔で打ち合わせに行けば良いのか。……と思っていたら、来たのは先生一人だった。何でも彼女は具合があまり良くないらしい、家で寝ているそうだ。

……先生。ナニヲシタ。

先生も微妙にお疲れ気味のようで、いつもなら緑茶を頼むのに珍しく玄米茶と和菓子のセット。疲れているときは甘い物デスヨネ。

とりあえず、緒峯にバレるまでは、自分は何も知らない。知らなったら知らない。男女一人で温泉宿に泊まるしが、無いときは無い。……いや、流石にそれは自己暗示にも無理があるな。

「原稿は、予定よりもはかどっていますよ。昨日でおよそ最後まで見えました。後は全体を見直せば良いくらいです」

「凄い、ですねそれは」

先生の言葉に、思わず言葉が出た。

「随分と順調に進んでいますね。……やっぱり、イラストがあるとイメージが固まりやすいのでしょうか」

彼女が関わつてからの進捗状況が、優等生にもほどがある。実際先生は、大抵は締切を守るが、書けない時は全く筆が進まなくなる性質だ。一度止まるとにつちもさつちも行かなくなつて、結局話そのものを零から書き直すこともあるくらいだ。それが。

「そうですね。非常に助かっていますよ。先日も、他社の原稿ですが、助けてもらいましたし」

他社の。……例の、アレか。そこは助けなくとも良いところだが。

「じゃあ、ますます手放せませんね」

少しへホホな気分で、もつ口には腹を括るべきかと開き直つた。

先生に良い作品を書いてもらつたために、彼女はこのまま先生の側にいてもらおう。

緒峯が何か言つて来たら、合意で押し通そう。先生のために盾になりますよ。気分はデモ隊に立ちふさがる機動隊員だ。ポリカーボネイト製の盾つて通販で売つてるかな。

「…………そうですね。もう彼女無しでは考えられません」

先生は、小さく呟いて、控えめに口元を緩めた。その表情はヤバイです。オトコでも切なくなる。

「つつつ先生つ、協力します！ 全面的に協力しますから！」

だから緒峯に負けずに彼女をゲットしてください！ いや、もう

ゲット済みみたいだけど！

「あつがとうござります」

晴れやかな先生の顔を見て、改めて担当として作家のバックアップに全力を尽くすと誓った。

そして、月曜日。

先生はもう原稿を上げていて、早速挿絵の打ち合わせをした。彼女はなんだか一つ壁を越えた様で、意欲的にラフを何枚も描き上げてくれた。

なまじ絵が上手いものだから、マッチョの破壊力が素晴らしい。この話、主役は別なのに、マッチョの印象が強すぎた。挿絵にはなるべくマッチョのシーンは避けたい。どうやらその点は彼女も同意みたいだ。

脇役たちも丁寧に「デザインしてくれて、仕事に対する熱意が少し増したようだ。チラッと先生を窺うと、満足そうにその様子を眺めている。

……ヤツパリソーゆーことデスカ。お互いか変化があつたみたいデスネ。合意ですね。コレは合意の上なんですね。じゃなきゃ彼女が普通に仕事してるはず無いですもんね。

じゃあ、緒峯のコトはどうにか引き受けますから。お一人の邪魔はさせません。

……せめて骨は拾つて欲しいですが、お願いしても宜しいでしょうか。

いつもの居酒屋にて。

刷り上ったばかりの見本を緒峯に渡す。……といつも実で、緒峯を呼び出した。

「サンキュー！ フライングで読めるってのはこの仕事の特権よね！」

先生の本を嬉しそうに受け取ってくれる様子は、担当としても非常に嬉しい。しかし今日の目的を考えると心臓が痛い。

「ああ。……まあ、後で読んでくれ」

バラバラと捲って先ず挿絵を確認するあたり、やはり優先順位は先生より彼女の方が上ってコトだらう。

「それでだな。……あーっと、先ず連絡事項なんだが。予定がかなり余裕だから、一度彼女には自宅に戻つてもらつた。仕事再開の時には知らせるから、それまではそっちの仕事をしてもらつてい。多分2・3ヶ月は暇だらうから」

スケジュールを告げると、緒峯は喜んだ。

「助かるわ！ これで年末アシ一人確保！」

「年末？」

年末って、なにがあつたか？

「暮れはねー、アシスタンントがつかまらないのよ。みんな自分の方優先するから。盆と暮れが神無月。某所だけが神在月ってね。同人やってないアシなんてあの娘くらいよ全くドイツもコイツも趣味に走つて仕事をなんと心得る24時間戦つサラリーマン見習えって……」

途中からブツブツと聞き取れなくなつた。何か地雷を踏んだらしい。触らぬ緒峯に祟りなし。

「あ～、それで、だな。彼女の、ことなんだが、……その」

何と言つて良いのか。

間を持たせるのに、適当に頼んだ料理をつまむ。馬刺しの和風力ルパッチョ。山葵が鼻にツンと来た。

「……なによ」

緒峯の声が半音下がつた。

……これも先生のため。先生のためだ。

「……その、だな。応援するか邪魔するかは、決めたのか？」

隣が見られない。ので、カルバッチョをじっと睨む。ふむ。白髪ネギは纖維に対し斜めに切つてあるのか。小技だな。

「なんでアンタがそんなこと言い出す訳？」

更に低くなつた声に、少しひびき。コレもソレも先生の良い作品のためだ。頑張れ自分！

「先生との仕事は、彼女にとつてもプラスに働いていふと思つんだ。もちろん、先生にとつても。だから、お、応援、するほうが」

自分を奮い立たせて、勢い込んで言つた。

「…………へえ～？ つまり、アンタは応援したいわけね」

半眼になつてゐるし。へそり、もう少し酔つてから言つべきだったか？

「そうだ。先生に、協力したいと思つていい

「はー、先生にー！ 結局それよね、せんせー様サマーー。あの娘のためじゃないじゃない」

吐き棄てるよひと言われて、ムツとなる。

「だから、彼女にとつてもプラスだと思つてゐる」

「いーい？ あの娘はねー、ホンシト晩熟なのよ。お子チャマなの。

それ一が、あの如何にもなイケメンに言ひ寄らねでビーなると思
う。ドン引きよ、どんびき！」

ぐい、と胸倉掴まれた。

「んだから、アンタに監視しろって言つたのはねー、あのイケメン
のストッパーになつて欲しいからよ」

「へ？」

「邪魔なんかしないわよ。むしろイケメン先生には直に発破かけて
るもの。けどねー、ガンガンいくと確実に逃げられるからねー」

「え？ あれ？」

「だから、重石役よアンタは」

…………そつ置つ」とは先に言つてくれ。

「じゃあ、ナニか？ お前は、先生にはアレコレ情報流して煽つて、
俺には……」

緒峯がニヤリと笑むのに、絶句した。

「お前、嫌われ役をオレに押し付けたな……？」

「でもやー。結局、全然ストッパーになつてないみたいじゃない？
作家至上主義も大概よねー」

サラリと言わされて、ハツとした。多少なりとも思うところがあつ

たのに、先生のやることに異を唱えたりはしなかつた。……それを言っているのか。

「ま、これからもストッパーにはなつて欲しいわけよ。先生だけじゃなくあの娘のためにも」

ここだけは真剣に言われて、正直耳が痛い。最早手遅れだとどの面下げて言えようか。

「……わ、かつた。努力する」

氣圧されながら、頷いた。

んつふつふー、と笑ってビールジョッキを煽る緒峯が、何歩も先んじている様に思えて。

つい。

「他人の恋愛に首突っ込んで、そーゆー自分はどうなんだ」

ポロリと。

……最大級の地雷だと、知っていたのに。

その日、頭からビールを被るという初体験をした。

緒峯と一人で飲んで、緒峯を送つていかないのも初めてだつた。

戻り道（前書き）

今回は、かなり不愉快なシーンがあります。『注意下さい。

戻り道

就職難就職難と世間では叫ばれても、名の通つた大学のおかげか、周囲もそこそこ内定を貰つていた。ニュースで言う就職率は、実感は薄い。それなりに受験戦争を勝ち抜いた過去の自分の頑張りのおかげか、教育熱心だった両親のおかげか。

それでも、希望通りの出版社に入社できたことは、やはり嬉しかった。やりたい仕事ができるのは幸運なのだと思った。

中途採用ではない同期は十数人いて、それなりな大学出身が揃つていたから、俺自身も鼻高々だった。勝ち組だと思っていた。

その同期の中で異彩を放っていたのが、緒峯だった。同期とはいえ歳は二つ上。院卒という訳でもなく、大学を出て一度他所に就職してからこちらに入りなおしたという話は後から知った。

同期の最初の飲み会で、皆が自己紹介で出身大学を付け加える中、緒峯はサラリと名前と歳を言つただけ。言うほどの大学ではないのだと、一浪でもしたのかと勘ぐる連中もいた。

緒峯は、そんな世間知らず連中の無意識の嘲りなど歯牙にもかけず、男顔負けの酒豪つぶりを見せて最初の飲み会に圧勝した。

新人研修が終わると、配属が決まる。最初から希望通りに行くと

は期待していなかつたが、それでもまるで考えていなかつた営業に回されたのはショックだつた。

営業に配属された同期は結構いて、つまり営業の仕事は研修の延長でもあつたらしい。社会人として使えるかどうかを試されていたのだと、文芸に異動してから理解した。

営業の仕事は、ひたすら頭を下げるに限れる。指導してくれた営業の先輩には、丁寧語と敬語は違うと繰り返し直された。挨拶、敬語、そして時間厳守。先ずそれができていないと、そもそも仕事の話が出来ない。

敬語を自然に使って、臆せず相手と話せるようになるまでに半年はかかった。それでも同期の中ではマシな方だ。

同期の中には学歴だけのプライドで、頭を下げるのも不承不承といつた態度を隠さない奴もいた。そんな奴らは、やがて消えていった。

入社して一年が過ぎる頃、緒峯が担当した漫画がヒットを飛ばした。緒峯は最初から漫画編集の方へ配属されていて、順調に頭角を現していた。姉御肌の気性もあって、歳若い学生デビューの漫画家などを多く受け持つていると聞いた。

少女漫画なんて、と吐き棄てる同期も、少なからずいた。

『黒羽隆生』の作品に出会つたのはその時期だ。正直嫌々だった営業の仕事にも真剣に取り組むようになったのだが、早く緒峯と肩を並べたいという思いも、多分、あつたのだろうと思つ。

緒峯は、他所で一年。だから、嫌々やっていたこれまでの一年は切り捨て、これからの一 年で勝負。勝手に目標にして張り切った。残業もすすんでやつたし、新しい仕事には必ず手を上げた。段々、任される仕事が増えてきた。

そろそろ残る同期は半分ほどだったが、時間さえあれば声を掛け合って飲みに行く関係が出来上がっていた。緒峯も都合が合えば必ず顔を出したし、飲めば一番近い緒峯のアパートに雪崩れ込むのもしそつちゅうだつた。深酒でどんよりする翌朝、緒峯は一人平然として全員にじじみの味噌汁を振舞つてくれた。

目標にした一年が終わる頃、また緒峯が立て続けにヒット作を手がけた。一つはメディア化もする勢いだ。

営業は基本外回り。緒峯と社内で偶然会うなんてことは無い。だからメールでおめでとうと伝えた。

また差が開いた気がして、わざわざ会う約束を取り付けてまで祝福する気にはなれなかつた。

その直後の飲み会のことだ。

駅近くの居酒屋チーン店に呼び出されて行つて見れば、集まつていたのは男だけ。とはいへ、同期の女性は緒峯ともう一人だけだから、二人の都合が付かないなら仕方ない。しかしこのタイミングでの誘いは、緒峯のヒット祝いなのだろうと思つただけに肩透かしだつた。

が。この会の趣向は、逆だつた。

同期の一人が、自慢げに見せびらかす携帯の画面に映るもの。

ベッドに横たわる、……これは。

「疲れてるとこでひょーっと優しくしてやればこんなモノンよ。2週間で落ちたね」

「いらっしゃも一ヶ月はかかると困つてたぜ」

「お前彼女はどうすんだよ」

「そうだ。こいつは最近、緒峯じゃないもつ一人の女性同期と付き合いだしたはずだ。」

「彼女はすっげえ大事ー。緒峯は、アレ女じやねえよ。うわばみだしよ」

「お前男をベッドに連れ込んだのか！」

「あークソ、一ヶ月はかかると思つたのに……」

「んで、ソッチの具合はどうだったんだよ」

「ゲラゲラと笑ひこける奴らが、何を言つてこりの分からなかつた。」

それでも携帯の画面が不愉快で、思わず携帯を奪い取つて消去した。

「お前、ちよ、何すんだよー！」

勢いあまつて他のデータ全部消したらしいが、構うもんか。

「あー、藤林、お前ひょっとして緒峯に惚れてんの？ ザあーんね」

バキ、と拳に衝撃があつて、つまり考える前に殴つていた。

居酒屋店内での喧嘩騒ぎに、警察も呼ばれ、大騒ぎになった。頭を冷やせと連れて行かれた駅前の派出所で説教された後、今後は気をつけると注意だけですんだ。酔っ払いの顔見知り同志の喧嘩、しそう引かれたのも初めてならこの程度なのだそうだ。

携帯のデータが残つていたなら名誉毀損で動けるんだけどね、まあ今回は居酒屋のほかの客の証言も沢山取れたから、と、歳のいっただ方の警官に穏やかな口調で脅され、奴はガクガク首を振つていた。

『個人的感想は、よくやつた！』と若い方の警官にサムズアップされて、笑おうとしたら腫れた頬が引き攣れた。

事の次第は社にも知れ渡つた。事情が事情だけに、先に手を出した俺は厳重注意、奴には訓告。その後直ぐに同期はみんな辞めていった。他の女子社員や良識ある男性社員の視線に耐えかねたのだろう。もう一人の女性同期は、完全なとばっちりだろうに。

結局は、嫉妬と八つ当たりだったのだろう。緒峯だけが上手くやつて、希望でもない営業でくすぶつ正在中の自分たちという構図だったのかもしれない。ひょつとしたら八つ当たりされたのは俺もか、

と、上司に叱責された後で気付いた。忙しくしていた俺は、緒峯を最低な賭けの対象にしていたことすら知らされていなかつた。

そんな顔で営業ができるか腫れが引くまで休め、と一週間の有給休暇消化を言い渡され、自主的に自宅に籠つて謹慎していたところに、無機質な電子音。

渦中ながらも事情を知らなかつた緒峯は、誰から聞いたのか、メールを寄越した。

『件名・Re・おめでとう

本文・あんたバカ?』

上司の苦笑交じりの叱責よりも、堪えた。

戻り道（後書き）

これ、いろいろとアウトじゃないかな、と戦々恐々と致しております。

ペしゃ、と顔に白い物が被せられて、我に返つた。

何かの布だと氣付いて、それから、コレでビールを拭けつてことかと思い至つた。

「……大将、これ、台布巾じゃないですか」

注文を取るときですら頷く程度の、後は黙々と料理をならべるばかりのこの店の大将が、一応は気遣つてくれたらしい。

「雑巾じゃないだけ上等だ」

ひょっとして初めて会話したかもしね。記念すべき初会話がこれが。渋い声で言われるにはあんまりな内容だ。

「や、ですね。……雑巾でも文句言えないですね……」

台布巾を握つてシリジリと肩を落とした。

咄嗟にビールをぶちまして、でもその一瞬、緒峯は自分こそがびっくりしたような顔をした。そして、硬く引き結んだ口元。

あんな顔をさせたのは自分だ。

違つんだ。言いたいのは、もつと別の「ことのはずな」。

「分かつてんならさつあと行け」

……っ！

立ち上がり、慌てて財布を探つていふと。シッシと犬を追い払うかのように手を振られた。

「ツケとく」

大将、どうしたんだ。一生分話したんじやないか。

「あつがとうござります！ 次は必ず！…！」

言ひ終わると店を飛び出すのとどつちが早いか。兎に角、走つた。

一度大通りに出たが、タクシーは見当たらぬ。

緒糸は、もう車を拾つたか。

どつせワソメーターの距離だ、と、最短の道のりを、走つた。

ネクタイと上着が窮屈で、赤信号で足止めされたうちに、ネクタイを外して上着を脱いで丸めた。

ビールで張り付く髪が邪魔で、気付けば握り締めたままだった台

布巾で雑に拭いた。

必死に、走った。

途中からは、赤信号でも車がいなれば突っ切った。

これほど必死に走るなんて、久しぶりだ。

もう少し。

あと角二つ曲がれば。

もう直ぐ。

緒峯のアパートが見えた。一階の角部屋。部屋の電気は点いていない。

階段を駆け上がって、インターホンを押した。

「緒峯！ いるか！？」

返事はない。

まだ帰っていないのか。

立ち止まつた途端に、汗が噴出した。

冷や汗も半分だ。

もしかして、家に帰りずっと別な場所に行つた？ それともまた無視されてる？

「緒峯！ 緒峯いないのか！？！」

近所迷惑も考へず、ドアを叩いた。

「このわよ

ぱそり、と、後ろから声が聞こえて、見ると緒峯が外階段を上がり去るところだった。走り去る車の音。なんだ、いつの間にか追い越していたのか。

「ほんな時間ひるねやへしないでよ。話題がきたらうわさの」

「すまん、間違えたんだ！ 違つんだ！ お前の話じやなくて！」

憮然と迷惑そうに言われて、騒いだことを謝るべきと分かつていたけれど、滑り出た謝罪は、その事に關してではなく。

「お前だけの話じやなくて！ お前と俺が！ 俺たちが！ どうなんだ、つてことを、言いたくて！」

必死に言つた。

「俺とお前の話をしたいんだ！」

言つて、緒峯の顔を見ると。

さつきの思わずといった様子でビールをかけた時と同じく。

口を真一文字に引き結んで、言いたいことを飲み込んでいよいよ
な顔だった。

坂道（上）

何度も入ったことのある緒峯の部屋だが、流石に今は敷居が高い。

「……何じりんのよ。早く入ってドア閉めて」

二つもじめにただの同期を家に上げる緒峯に、胸の奥が苛立つた。

「せつや、オレはお前に告白したつもりなんだが」

そんな男を無防備に家に入れていいのか、と問いつと。

「アパートの廊下でそんな話、できるわけないじょ。ここからさつさと上がるんなさこよ」

一応、告白を無視されているわけではないらしい。

「……オジャマしまず……」

いつに無く行儀良く、緒峯のテリトリーに立ち入った。

酔っ払った緒峯を寝室に放り込んで、自分は居間のソファを借り

て寝る。ソファは座面の下が収納になっていて、毛布がそこに入っている。勝手知つたる他人の家だ。朝には、ピンシャンとした緒峯が先に起きていて、朝飯を作ってくれている間に、緒峯が使つた気配の残るバスルームでシャワーを浴びて、シジミの味噌汁の朝飯。

普段なら、何の疑問も感じなかつたことが、今更ながらありえないことに思えた。

「とりあえず、お茶ね」

一人掛けのダイニングテーブルに落ち着いて、ペットボトルのお茶をグラスで出され、手持ち無沙汰に口をつける。

勢いが殺がれて、少し頭が冷えて、そしてどうして良いのか分からなくなつた。

緒峯も黙つてテーブルの向こうでお茶を飲んでいる。

走つたせいか、やたらと喉が渴いて、一気にグラスを干した。

「.....」

緒峯は黙つて一杯目のお茶を注いでくれた。

押しかけたのは自分で、話があるのも自分だ。ココで沈黙我慢大會は、いくらなんでもないだろ？。

腹を括つた。

「好きだ。俺と真剣に付き合つて欲しい」

がちやん、と、緒峯がグラスを取り落とした。ワタワタと慌てふためく緒峯に、一先ずキッチンから台布巾を取つてきた。

「服は濡れてないか？ 床にはこぼれてない？」

見れば、被害はテーブルの上だけに止まつたようだ。

「アンタ、何いきなり冷静になつてんのよ」

「うん。頭が冷えた。さつきは、なんかテンパッたけど。久しづりに全力疾走したな。スッキリした」

呆れた、と緒峯が息を吐く。

「だから、冷静に、もう一度言つけど。俺はお前が好きだ。お前は？」

ガチヤン、と、緒峯が片付けかけていたグラスが床に落ちた。

「あー、何やつてんだよ。割れたぞ」

バスルーム横の収納に、筹とちり取りがあつたはず。大きい破片を手で拾つてから、筹を取つてきた。

「新聞紙、広げて出してくれ。割れ物は、『マリ出し区分どうなつてる？』

「……不燃物。土曜日こ」

「じゃ、包んで置いてくか」

手早く新聞紙に包んで、電話横の引き出しからマジックを出して
大きく『ガラス危険』と書いた。

キッチン奥のカン・ビンゴ!!の横に纏めておく。

出した簞とちり取りを片付けて戻ると、緒峯はぐつたりとダイニ
ングテーブルに突っ伏していた。

「緒峯？ 今日はそんな飲んでないだろ？ 疲れた？」

「アンタねえ！？ なんでそんな平然としてるわけ？ ウチの簞の
在り処まで知つてて、今更真剣にお付き合じ？」

がば、と顔を上げた緒峯が、また、あの泣くのを堪えていのう
な目をするから。

「先生たちに当てられた。確かに今更かもしれないけど、言わないと
現状維持するよつ、……もつと先に進みたい」

触つてもいいだろ？ か、と伸ばした手は、避けられることなく頬
に届いた。

「好きです。だから、そつ言ひ意味で、オレのこと好きになつてくれ
たらうれしい」

見る見る盛り上がりつつ涙が、それでも往生際悪く零れ落ちずに眺
ことじまつていてる。

「…………あんた、バカ?」

頬に触れていた指が、涙に濡れた。

「うん。素直に言ってくれないだろ? とは思つてたけど。『バカ』に愛を感じるな」

「な、ア、アンタ、バ」

三度目のバカは、途中で途切れた。

坂道（下り）

昨日はスマセン、と頭を下げると、大将は無言で頷いて、カウンターの空いている席を顎で示した。

この時間、いつもなら空席も田立つはずなのに、なぜか今日は殆ど満席で、カウンターの真ん中一席だけがちょうど空いていた。

いつも以上の無表情が、怒っているのか不機嫌なのかと冷や汗をかく。

「あれはね、笑うのを堪えてるのよ」

緒峯が解説してくれたが、本当だらうか。

何か頼むよりもさきにビールが（昨日頭から被つた銘柄だった）、目の前に並べられた。

「はい、カンパーア」

上機嫌でジョッキを掲げる緒峯にあわせて、申し訳程度にジョッキを持ち上げる。

「はい、そこいら辺で聞き耳立ててる人たちにー、報告がありまーす」

「ふう ゆうゆうやつ？！？」

「正式に、結婚を前提に、お付き合こす約束になりましたー。」

ひゅ~とか、やつたな、とか、じつとか、とか、ぬせーよ、とか。

「ザヨ、ちょ、なにー。？」

「いやー時間かかったな。お前らぐあぐあと、じれったいいたらね

えよ」

「緒峯ちゃんもすっかり諦めてたからなー、男がガツンと行かない
でビハキル」

「まつたくやきもせれせてくれるぜ」

周りから口々に野次られた。なんなんだ一体。

「ほり、俺ら常連は也。緒峯ちゃんの事情とか、ナントナク知つて
たからよ。お前と連れ立つて来るようになつて喜んでたんだよ。こ
れで緒峯ちゃんも一安心つてな」

後ろのテーブルのサラリーマンが囁く。

「なにお前、なんだかグズグズと、ハッキリしねえだろ」

横の上品なスースが碎けた口調で言葉を被せる。

「けどなー、緒峯ちゃんが、余計なこと言つなつて釘刺すもんだか

「うう

カウンターの端からも、なにやう。

「皆、黙つて見守つてた」

大将！？ その口の端がほんの僅かに上がったソレが大将の笑顔ですか？

「あーもーみんなして面白がつてたくせに。異性間で友情は成り立つかという命題、なんて言つてたのは誰よ」

上品スースがニヤリと拳手した。

「結論は持ち越しだな」

アウエイだ。俺一人が完璧なアウエイだ。そりゃこの店は前から緒峯の行きつけだつたけど。

ちょっと吹いたけど半分以上は残つてゐるビールを、一気に飲み干した。

「「おおー」」

何故か拍手が沸いた。ドン、ビジョックをカウンターに叩きつけ、立ち上がる。

「なんかご心配かけていたようですが！ 今後は！ 緒峯は絶対幸せにしますから…！」

自棄になつて、店内をぐるりと見回して、宣言した。せめて酒の勢いを借りるくらいは大目に見て欲しい。

隣で緒峯が唖然としていたので、ぐいと引き寄せて口付けた。

店内、やんやヤンヤの大騒ぎになつた。

大将がオゴリだと出してくれた皿は、いつもの居酒屋メニューではない洒落たフレンチ風で、旬の大振りの牡蠣が素晴らしい旨かつた。添えられたアスパラとパプリカのグリルはカラフルで、皿にも鮮やかだつた。

寡黙な大将が、無表情なりに祝福してくれているのを実感した。

「……アンタつて、ホント、吹つ切れた後が予測不能よね」

酔い覚ましに、緒峯のアパートまで歩いて帰る。

普段緒峯と飲むときに、送つていくから、と理由をじじつけて、深酒しないよう自戒していた。

酔つて、理性をなくすわけにいかなかつたから。

だから、ここまで飲んだのは、実は久しぶりだ。

「んー。そうかもなー。みんなの前でキスしたのは、ちょっとやりすぎだつたか?」

火照つた顔に、夜風が気持ちいい。

「アンタ、あの時はまだ酔つてなかつたでしょ。どう言い訳するの」

緒峯も結構飲されたのか、夜目にも頬が真っ赤だ。

「あれはー。ほら、誓いのキス？」

幸せにするつて宣言したし。アレくらいやつてもいいだろ。

「…………やつぱアンタ、かなり酔つてるでしょ」

そうやって睨まれても、何故か嬉しくて仕方ない。

「ん。酔ってる。だつて、もう我慢しなくていいんだろ」

ふわふわと浮かれた気分のまま、傍らの温もりを抱き寄せた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5572s/>

萌え絵師への道

2011年11月24日13時54分発行